
闘神伝記

よしなが あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闘神伝記

【Nコード】

N4221A

【作者名】

よしなが あこ

【あらすじ】

最大の困難にして最強の剣術と称される一方、「愚か者の剣術」として蔑まれていた幻の剣術、『双剣術』。茨の道を敢えて選び、ひたすらに「強さ」を求め続けた男トキエは、師をも越える天賦の才によって、失われようとしていた双剣術を鮮やかに甦らせる。最期の双剣術継承者が歩んだ、苦難と栄光が交差する28年の生涯。

愚か者の剣術

その者 二振りの剣もて躍る時
人の身にして闘神かみとならん

四つの大陸と幾多の島々が織り成す、広大なこの世界に於て、誰も
しもが知るひとりの男の伝説があった。

端正な顔立ちと柔和な微笑、細く長く束ねた黄金色に輝く後ろ髪、
すらりとした華奢な細身の身体。若くして世を去ったその伝説の男
は、その当時『愚か者の剣術』として忌み嫌われ、また『最大の困
難にして最強の剣術』と噂された幻の剣術、双剣術の使い手であつ
たという。

闘神と呼ばれた男の名は、トキーエ。

トキーエ＝ギアムデン。

とある街の一角にある、淑やかな緑に囲まれた屋敷。剣を打ち合
う忙しない音がする。

「そうだ、いいぞトキーエ、その調子だ！」

「はい、父上！」

そこはナロフの街に佇む、由緒正しき剣士の家系、ギアムデン家。
ナロフ警備隊員の父と、もと警備隊員の祖父とに鍛えられたトキー
エは当初、父や祖父の教えどおりに普通の剣術を練習してきた。父
と祖父の教えを守り、黙々と剣を振るうトキーエは、ギアムデン家
待望の長男で、二人の姉は母とともに機織りをし、トキーエは父と
祖父という二人の師匠に指導を受け、剣術の修行に明け暮れる日々
が続いた。

トキーエの生まれたナロフの街は、大陸一の大都市サンテルマインからおよそ五日ほど北へ向かった土地にあった。

ナロフは森の街とも称され、北東側を山脈に、西から南東にかけてを森に囲まれている。山脈から流れ込む清らかな水は、森を開いて作られたささやかな農場の発展を助けている。穀物はさほどではないが果物などの実りはよく、それらを用いた様々な果実酒はナロフの名産品となっている。また森と山に囲まれた地形上、狩猟には事欠くことなく、各家の軒先に兎や鹿の毛皮が下がっているのも、別段珍しいことではない。

近隣には小規模な村が点在し、ナロフの街がその中央に位置することから、ナロフを中心とした各村との同盟が結ばれているのも特徴で、街のきまりや、農工業、畜産業などに関する重要な取決めは、各村の長による合議制によってきめ細かく取り仕切られていた。秀でて目立つことはなかったが、ナロフを中心とした村々は、少しずつ豊かさを持って繁栄していると言つてよかった。

ナロフの位置する東の大陸は、西の大陸からの侵略者との攻防戦が過去何度となく繰り返されている。ひとたび戦争の火の手が各地に起こり始めると、東の大陸随一の大国サンテルマインの配下という後ろ盾があるとはいえ、安穩と構えているわけにはいかない。いつ敵国の刃がナロフに向いても対処できるよう、人々は剣術の練磨に励み、不意の急襲においては己の手で身を守ることを要求される。もともと剣術や弓術などが盛んなナロフは、様々な武闘を奨励しているサンテルマインの影響もあって、警備隊による武闘大会を、春祭と収穫際に併せて開催していた。

・・・

早朝稽古から戻るトキーエを、母はいつも優しく出迎えてくれる。

トキーエの美しい金髪が、朝陽の中で一際輝きを放っていた。二人の姉も美しい金髪だったが、トキーエには かなわない、と羨ましげにつぶやくのが常だった。

「おはようございます、母様。」

「顔を洗っていらっしやいトキーエ、朝食にしましょうね。」

汗が光る額を拭いながら、トキーエが庭先の井戸に駆けていくのを、母はいつも穏やかな微笑をもって見つめていた。彼がにこやかに話しかけてくれるひとときが、母にとってはこの上のない幸せだった。

「トキーエは毎朝早いわね・・・剣の音がうるさくて寝てられないわ。」

「姉様、おはよう。」

「トキーエだって好きで早起きしてるわけじゃないわよ、お父様とお祖父様に毎朝しごかれるんだから、私たちよりずっと大変だわね、トキーエ。」

「うっん、僕は強くなりたいんだ。だから剣の練習は、少しも辛くないんだよ。」

少し年が離れているせいか、二人の姉もトキーエのことをよく可愛がってくれた。もしトキーエが妹だったら、一緒に機織をして平和に暮らせたのに、と・・・上の姉はよくつぶやいていた。それほど、トキーエは練習熱心だった。

そうしてある晩、厳しい面持ちの父が息子トキーエに言い放つ。

「よいかトキーエ、間もなくおまえの十五歳の誕生日。その日より一年、各国を旅して回ってくるのだ。無論、誰に頼ることも許され

ん。ギアムデン家の跡取りとして、恥かしくない修行をしてこい。
よいな。」

ギアムデン家の長男は一人前になる前、即ち十五歳の誕生日から一年間、武者修行に出るといふしきたりがある。一年の間は街近郊に近寄ることも許されず、出立時に与えられる旅の道具と路銀、そして剣と盾だけで、修行の旅をこなさなければならぬのだ。

こうしたしきたりは大陸のあちこちで見られ、剣術の名門と呼ばれる家柄では、路銀さえ与えられず剣一本で放り出されるとまで言われている。また各地を旅した証しとして、立ち寄った土地の長や警備隊長、峠の門番などから、手持ちの盾に土地名と署名を彫ってもらふことも重要である。盾に署名された土地名が、遠いほど危険なほど、厳しい修行の旅で自分が成長したことを証明する証拠となる。

「体に気をつけてねトキーエ、母様はいつでもおまえのためにお祈りをしていますから・・・」

「姉様たちも一所懸命お祈りをしているからね。」

「無事で帰ってきてね、トキーエ・・・」

誕生日のその日、いつもと変わらぬ朝食を終えた後、泣きながら見送る母と姉二人、厳しい面持ちで構える父と祖父に見送られながら、トキーエはわずかな手荷物と剣、盾を携えて、ナロフの街を後にした。

・・・

そして月日は流れ、季節は巡り、その一年後。

「ただいま帰りました。」

トキーエは、ナロフへと戻ってきた。

十六歳の誕生日のその日、トキーエはまるで別人のように変わっていた。精悍な顔立ちに磨きがかかり、見違えるほどたくましくなったトキーエ。母と姉二人は喜んで彼を迎えたが、父と祖父は、息子のもう一つの変化にすぐに気がついた。

「・・・盾は、どうした？」

「・・・」

父が問う。トキーエは父を見つめ、そつと首を振った。

「その剣の柄・・・おまえの剣ではないな？」

「・・・」

トキーエは祖父の問いに、腰に下げた剣をすらりと抜き放った。確かに、出立時に持っていたトキーエの剣ではなかった。剣士が通常持つ剣よりも一回り小振りな、小剣と長剣の間くらいの、機能的な刀身。

父と祖父がそれを凝視する間に、トキーエは背後に手を回し、ひらりと降りぬいた。ハツとして父と祖父は顔を上げる。

トキーエの手に握られた、もう一振りの、剣。

まったく同じ作りの、機能的な刀身。

それが何を意味するか。父と祖父は愕然とした。

「な・・・何ということだ、トキーエ、おまえは・・・！」

トキーエは、幼少から父と祖父に叩き込まれた剣術を捨て、何と、双剣術の使い手となって戻ってきたのである。

「そ、双剣術だと！？きさま・・・何という恥知らずな！！」

父と祖父は激怒した。勘当するとまで言い切った父の激情は特に凄まじいものだった。母と二人の姉が止めに入るほどの怒りの中、父の怒声が屋敷中に響く。

「こつ・・・このギアムデン家に、双剣術などという異端の剣術を持ち込むとは言語道断！何を血迷ってそんな剣術を扱う気になったのだ！」

「・・・」

「答えるトキーエ！！」

激昂する父の言葉を、トキーエは黙ってただ聞いていた。だが荒々しい詰問には一切口を閉ざしたまま、答えなかった。

まなざしは真っ直ぐに、父から逸らすことなく、まるで「自分は間違っていない」と、瞳で語るかのように。

双剣術は二振りの剣を駆使し、防御よりも攻撃優先の剣術である。だが余程の手練れでも、二本の剣を同時に操るのは困難極まりない。また機動性を重視して盾を持たぬため、普通の剣士よりも無防備になりがちだ。

二本の剣で攻撃と防御の両方をこなすという理念が、生粋の剣士気質には理解し難いことだったのかもしれない。混乱の極にある戦場においてはその防御の低さが仇となり、一対一の決闘となれば、

二振りの剣を持つ以上攻撃の際に平等さを欠き、卑怯者と罵られる羽目になる。『愚か者の剣術』と称される双剣術は比類なき強さを持ちながらも、会得するのが非常に困難なため、剣士の間では最も難しく最も敬遠される剣術であったのだ。

「剣を取れトキーエ！！」

父はひとしきり怒鳴り終えた後剣を取り、トキーエを睨んだ。

「おまえの選んだ剣がどれほど愚かなものか、この父が教えてやる！おまえを挨じ伏せてでも、その二本の剣を叩き落して目を覚まさせてやる。その後で、また一から鍛えなおしてやるから覚悟せい！！」

トキーエは黙ったまま、父の言う通り剣を構えた。

トキーエの父は警備隊の武闘大会において、数回の優勝を経験している猛者である。そんな父と勝負しても、一年前は辛うじて引き分けに持ち込む程度の腕であったトキーエ。父には確たる自信があった。それを見守る祖父も、トキーエの負けは確実だと見ていた。トキーエの瞳には、焦りも、緊張もなかった。

「はじめ！」

祖父の掛け声とともに、素早く交錯する刃の閃き。父の視界から瞬時にかき消える息子の姿。剣の打ち合いはほんの数秒。そして、勝敗はあっけなく決まった。

「ば……馬鹿な、こんな……こんなことが……！」

ものの見事に負かされたのは、父であった。

剣を弾き飛ばされ、盾ですらも取り落としていた。その一瞬の交錯の間に何があったのか、母と二人の姉にはまったく分からなかった。ただトキーエが通り過ぎた瞬間に、父の剣と盾が弾け飛んだのを見ただけだったが、その一瞬の出来事を祖父だけは見つめていた。速さに分があるトキーエは、飛び込みざまにまず父の剣を二本の剣で挟みこむようにして跳ね上げ、返す勢いで盾に軽く膝蹴りをあて上向きになったところを、剣でやすやすと跳ね飛ばしたのだ。

呆然となる父と祖父。剣術において余りある自信を持っていた父は、自らが罵った『愚か者の剣術』に、いとも簡単に敗れたのだ。あまりのことに声もでない父の代わりに、祖父が静かにつぶやいた。

「・・・おまえの選んだ道を、信じることにしよう。」

祖父はうなずいてそう言った。

父も、息子に負かされたという動かし難い事実と、敬愛する祖父にそう言われては反論もできず、渋々祖父に同意するしかなかった。トキーエは一年前と唯一変わらない、人懐こい笑顔を浮かべて、二人に一礼するのだった。

「ありがとうございます。」

・・・

後日、トキーエは、憤りのおさまった父と話し合い、双剣術を志した理由を静かに語った。

「僕はナロフを出てから、北を目指しました。まずはカラツカ湖とその近隣の村々に向けて、旅を始めたのです。」

夕刻、カラツカ湖を横目に森を抜けようとしていた矢先、トキーは山賊に襲われた。ナロフ以北は森と山に囲まれ、点在する村々の近辺以外は人通りも滅多にない。六人の山賊はそれぞれが曲刀を持ち、じりじりとトキーエに迫ってくる。修行に出たばかりのひよっこ剣士を狙う野党は多く、彼等を身ぐるみ剥ぐ以外に、異国の商人に奴隷として売り飛ばすこともあるという。

トキーエは剣を構えたが、同時に冷や汗が滲むのを感じていた。

「腕に自信がないわけではありませんでしたが、六人もの山賊が相手では、よくて相打ちだと・・・僕は死を覚悟していました。でもそこに・・・」

その緊迫した状況に突然、ひょっこりとローブを羽織った老人が現れたのだ。

山賊も、もちろんトキーエも仰天した。開けているとはいえ森の中の街道で、足音も気配もさせずに歩いてきたというのか。老人はトキーエと六人の山賊に気がつく、代わる代わる双方を見つめ、きよんとする。

「な、何だじじい、邪魔すんじゃないねえ!!」

「逃げて! 逃げて下さいおじいさん、ここは僕が食い止めます!!」

トキーエは素早く老人へと駆け寄り、かばうようにして山賊の前に立ちふさがった。自分のために他人を巻き込んではいけない、トキーエはその思いで必死だったが、しかし。

老人は、そんなトキーエの肩に手をそつと置き、ずい、と前に出る。えつと声を上げそうになるトキーエにちらりと振り返ると、老

人は皺だらけだが艶のある頬を歪め、にっこりと笑ってつぶやいた。

「いい子じゃな少年よ。しばらくこの爺の遊びを見とるがいい。」

そうして老人がロープの下から引き抜いたのは、二本の剣であった。

驚きに目を見張るトキーエを尻目に、老人は風のごとき素早さで山賊に飛び掛かった。老体とは思えぬ身軽さ、太刀筋。その二振りの剣をまるで舞うようにして操り、あっという間に山賊たちを片付けてしまった。無駄な動きの一切ない、一撃必中の、まさに神業だ。

啞然として瞬きもできないトキーエに、老人は微笑んだ。

「気をつけて旅をなさるがよい、ああいう輩が最近多くなってきおった。旅の無事を祈っておるよ。」

骸を踏み越え、老剣士がゆっくりと帰ろうとした時、思わずトキーエは叫んでいた。

「ま、待って下さい、あの・・・!」

双剣術の使い手である老剣士とトキーエの、運命の出会いであった。

二人の天才

老剣士の名はエダル「ジャスターニ」。

双剣術の歴史は大変に古く、それには二つの流派があつて『ファーマレイ流』と『ジャスターニ流』とに分かれている。老剣士エダルはトキーエに、自分はジャスターニ流の双剣術者、ジャスターニ一族の者だと打ち明けた。

時代の中で賛否両論が繰り返され続ける双剣術。それが否定的な立場になればなるほど、ファーマレイ一族とジャスターニ一族は廃れ、当時すでにファーマレイ家は滅び、双剣術のファーマレイ流は幻となっていた。ジャスターニ流も時代のあおりを受け、苦難の道を歩んでいるという。

「もうわしは、双剣術を人に教えるのはあきらめたよ。時代の波がそうさせるのかもしれないが、双剣術に対する風当たりは今、ことのほか強い。だがなトキーエよ、双剣術はけして『愚か者の剣術』ではない。双剣術をこなせぬ人間がわめく戯言など、決してあてにしてはならぬ。」

トキーエはうなずく。

「剣士は己の腕に誇りを持たねばならん、それがいかなる剣術であつてもな。だからわしは双剣術を得たことを誇りに思つし、他の誰が卑下しようとするの信念は変わらない。トキーエ、おまえは過去、この大陸で巻き起こった大戦を知っておるか？」

「この大陸では過去三回・・・ヤーバニ砦大戦、グラッパル平原大戦、アエリ攻防戦・・・」

「その通り。そのヤーバニ砦の大戦は、双剣術のいちばん華やかであつた時代じゃ。というよりも、その年にこそ双剣術が完璧に確立

されたというべきじゃな。」

「・・・というと？」

「ヤーバ二砦の大戦は過去最長の戦じゃった。五十三年もの間、大陸は血みどろになってきた。効率のよい戦法、戦術、剣術が目まぐるしく変わり、まさしく敵との知恵比べじゃった。その中で生まれたのが、双剣術だっただのじゃよ。」

当時の戦は混迷を極め、もはや名誉のための戦という名目など忘れてしまったのかと思うほど、残忍無比なものだったという。長きに渡る戦に馴れ、疲れ果てた結末であつたが、双剣術とは、その戦の苦しみの中で、さらに多くの敵を一瞬にして倒すために、つまり殺戮のために生まれた剣術であつた。

ヤーバ二砦大戦の最中、気の狂ったひとりの男が、二振りの剣を手に単身敵の中へと飛び込んでいったことがあつた。気がふれていたとはいえ、もともとが素質の高い剣士であつたため、男の二振りの剣は面白いように敵の首を切り落としていった。結局、男は敵方の矢の雨に倒れたが、その戦振りは二人の男の胸に強烈に焼き付いていた。

グラヴァスⅡファーマレイとルーディⅡジャスターⅡ、後の双剣術ファーマレイ流とジャスターⅡ流の祖となる人物である。

「だが時間はなかった。時が経つほど両軍は消耗し、倒れていく。戦友だつたグラヴァスとルーディは必死に考え、そしてついに、双剣術の基となる型の基本を造つただのじゃ。」

そうはいっても、その時は俄造りであつたため、二人の努力はまさしく手探りであつた。少しずつ実戦の中で訓練し改良する。だが最初は盾を手放すことはできなかった。敵の刃は、まだ双剣術の確たる感覚をつかんでいない二人に、容赦なく襲いかかるからだ。こ

ここで死んでしまつては元も子もない。ほんの少しの休憩の合間も、二人は習練を続けた。

「そうしておよそ八年と半年後、双剣術はようやく確立された。二人の双剣術に賛同する者たちを含め、双剣術の使い手の数は、実に兵力の四分の一以上に増えていた。ヤーバ二砦の大戦は、この双剣術が決め手となったと言つてもよかつた。」

老剣士は遠い目をする。

「普通の兵の戦績の実に三倍以上を上げることができる双剣術によつて、二人の軍は敵方を圧倒した。確かに防御が薄い分、犠牲もそれなりに出はしたが、それを補つて余りある成果があつたのじゃ。血みどろの大戦は終結した・・・多大な戦績を上げたことで、グラヴァスとルーディは、時の王より栄誉ある勲章を頂戴したという。」

そうして、ヤーバ二砦の大戦で絶大な力を誇つた双剣術は、その後急速に人気を得て、修行に励む剣士の姿がそこかしこで見られるようになった。

しかし。

双剣術はもともと戦場において編み出された剣術であり、普通の剣術との格差が激しすぎる上、修得が非常に困難であつたために、双剣術を完全に会得できない中途半端なままの使い手が急増した。そしてそれが次の大戦、グラッパル平原大戦の時に表面化したのである。

「双剣術は強い、確かに。だがそれは完全に修得した上での話じゃ。生半可な剣士が双剣術者を気取つても、それは実戦においては何の意味もなさぬ。半端者が次々と敵の刃に倒れていった・・・グラッパルの大戦は短期間で辛くも勝利したものの、双剣術に関して

の地位は、それを機会にして大きく揺らいだのじゃよ。」

博打のような剣術、双剣術はグラッパル平原大戦後にそう呼ばれた。

剣士たちは熱が冷めるようにして双剣術から離れていき、双剣術のせいで息子が死んだと泣きわめく親たちが現れた。最強と謳われた双剣術は、その大戦を堺にして次第に廃れていったのだ。

「ファーマレイ流は半世紀も前に滅亡した。ジャスター二流も、もうわしくらいのものじゃな・・・時代とはいえ、哀しいものじゃよ。」

「・・・エダルさん、双剣術を完全に修得すれば、強い剣士になりますか？」

トキーエはいつしか、真剣にエダルに問い掛けていた。

「きみは己に強さを求めるのかね？」

「はい。」

エダルは寂しげに微笑んでうつむいた。

「ならば、普通の剣士になった方がいい。中途半端な双剣術者になるよりは、真っ直ぐに剣士の道を歩んだ方がきみのためじゃよ。」

「双剣術の噂は聞いています、最大の困難にして最強の剣術だと。」

「ならば、愚か者の剣術という名も知つとろう。」

「でも、今エダルさんは、それは嘘だとおっしゃいました。」

エダルの口元が一瞬歪む。

「エダルさん、僕に双剣術を教えてください。双剣術の知識を、僕に

与えられた一年の間に指導して下さい、お願いします！」

エダルは眼を丸くする。たった今、双剣術の苦難の歴史を教えたばかりだというのに、その苦難に自ら飛び込もうとするとは。

「……一年で双剣術をこなす自信は？」

「ありません。たった一年で、古い歴史を持つ双剣術を極めるなんて、とても無理です。だけど、生意気を言うようで失礼ですが、僕には時間があります、何年でも何十年でも修行できる時間が。」

「……ふむ……」

「双剣術を教えて下さい、きっと自分の双剣術を確立させてみせます。一年で足りない分を、僕は修行し続けます。お願いします、エダルさん！」

そうしたやり取りがしばらく続いた。

何がトキーエの心を捕らえたのか、トキーエは食いつかんばかりにエダルを見つめ、真剣なまなざしで懇願した。

エダルはトキーエの声を聞きながら、しばらく腕を組んで考える。

過去三回の大戦に勝るとも劣らぬ戦が、遅かれ早かれ始まるであろう。もしそうなった時に、誰よりも早く傷付き倒れていくのは、この少年のような若く尊い命であろう。彼等は、自分で身を守る確たる術を持たぬまま、戦場へと駆り出されてしまうのだから。

少しでもその命の灯を長く輝くものにするために、老いた自分ができることは、ただひとつ。

エダルはゆっくりと顔を上げ、トキーエを見つめた。

「……覚悟があるなら、ついておいで。わしの家へ行こう。」

・・・

トキーエはそこで話を止めた。

「ジャスター二氏の家で修行を・・・そこはどこの街だね？」

「・・・すみません、それはお話できないのです。」

トキーエは申し訳なさそうに首を振った。

修行をした一年間のすべては、親族にも他言してはならぬと、エダルに堅く口止めされていたからだ。父は男の約束であれば仕方ないと、その場はそれ以上何も聞こうとしなかった。

だが父は思った。

双剣術の祖がおよそ九年もかけて確立させたものを、トキーエはたったの一年で、ほぼ修得してしまっているのである。師に恵まれたのかそれとも、息子の天賦の才か。父は変わらぬ笑みを湛える息子トキーエを、複雑な気持ちで見つめるばかりであった。

そして少しの沈黙の後、トキーエは少しだけ付け加えた。

「ファーマレイ流とジャスター二流には、さほど違いがあるわけではないのだそうです。」

ただ、攻撃と防御の比率が違うだけだという。あえて言うなら、敵を蹴散らす流儀がファーマレイ流、敵の出方を待つのがジャスター二流ということになる。トキーエはジャスター二流の双剣術を会得したが、ファーマレイ流が途絶えたことで、双剣術に『流派』という概念が消えてしまったとつぶやいた。ファーマレイ流があつてこそ、ジャスター二流という言葉が生きてくるのだから。

「トキーエ、・・・ジャスター二氏は、健在かね。」

父は、最も気になっていた事を口にした。

トキーエは少し黙っていたが、ゆっくりとうなずいた。が、言葉にはしなかった。

トキーエが戻ってすぐ、ナロフの街では、由緒正しいギアムデン家の長男が、よりによって双剣術を会得したと、たいそう話題となった。

「双剣術だってよ。よくあんな剣術を選んだものだ・・・」

「格好つけてるだけさ、すぐに誰かに負かされて、熱が冷めるだろう。」

女子供は物珍しそうに、剣士たちは嘲笑うようにして、トキーエを奇異の目で見つめた。しかしトキーエは決して物怖じせず、また声高に広めもせず、周囲の声を黙って聞くだけであった。

「ようトキーエ、自慢の双剣術で俺と勝負しろよ！」

「そつだそつだ、やれやれ！」

同じく剣士を志す少年たちは、面白がってトキーエに勝負を挑んだ。幼少から剣術の天才と称されていたトキーエだったが、双剣術者となったことできつとその腕前は中途半端になり、以前より格段に弱くなったのでは、という静かな憶測が広まっていたのだ。双剣術という異端の剣術を負かし、自分の知名度を上げたいという少年らしい魂胆も、少なからずそれに混じっていたのだろう。

トキーエはそんな少年たちの憶測を知ってか知らずか、その一切をやりわり断り、決して剣を抜くことはなかった。

そんなある日。

「・・・穏やかではないお誘いですね。」

「こうでもしなきゃ、おまえはうなずかないだろう。」

トキーエの喉元に剣を突き付け、鋭い瞳の少年がトキーエを睨む。

「今すぐ俺と勝負しろ。首を振るなら、このまま喉を真一文字に切り裂くぜ。」

少年の荒っぽい言葉に、トキーエは仕方なく、だが少しも物怖じせずに言い返す。

「分かりました、受けましょう。血で服が汚れてしまっでは、それを洗って下さる母様に申し訳ありませんから。」

少年は鼻を鳴らし、剣を引いて歩き出した。

トキーエより二つ年上の、ナロフ警備隊副隊長の息子、フェロー。フェローは幼い時から剣術の天才と称されている強者だ。

物見高い少年たちや少女たちで人垣ができる広場。その中央で剣を構えるフェローに対し、トキーエは一振りの剣だけを手にした。それを見たフェローは高笑いでこう言った。

「おまえは双剣術の使い手だろう、だったら二本構えたらどうだ。」

一本の剣で自信がないから、二本も剣を使うんだろう。卑怯者の腰抜け剣術がどれほどのものか、見せてもらおうじゃないか。」

トキーエは一振りの剣を持ったまま、こう返した。

「双剣術は一本の剣を最大限に利用することから始まります。それができて、始めて二本の剣を手にすることができのです。この場

で二本も使う必要はありません、このままで結構です。」

「ふん、笑わせるな、たった一本の剣だけで、この俺に勝てる気であるのか。」

「はい。」

トキーエはきっぱりと言い切った。

フェローは思わず面食らう。

「決闘の場で二本の剣を使って勝っても、それこそ卑怯者の剣術だと言われておしまいですからね。」

「この・・・!!」

フェローは盾を持ち、剣を持って構えた。

トキーエはたった一振りの剣を持ったまま、じつとフェローの動きを見守る。周囲がしんと静まり返ると、フェローは猛然と剣を振りかぶり、トキーエ目掛けて突進した。トキーエはその勢いを寸前まで見つめ、ずっと身を屈めて剣を引いた。

周囲からわつとどよめきがあがる。フェローも目を疑った。フェローの剣を、トキーエの剣はその先端で捕らえていたのだ。おまけに、トキーエは両手ではない。片手だけで剣を支えているではないか。

フェローは動揺しながらも剣を弾いて退き、再び態勢を立て直して飛び掛かる。それでもトキーエは片手だけで構え、じつとフェローの動きを観察する。打ち合う剣の鋭い音、閃く刃の輝きが広場のあちこちに刺さった。息つく間もない激しい打ち合いだったが、その激しさの出所はすべてフェローであるように、周りには見えた。トキーエはフェローから繰り出される刃すべてを、無駄な動きのない静かな剣捌きでかわしているのだ。

そしてフェローの剣が迫った、ある瞬間。トキーエは素早く剣を突き出した。

「ああっ!!」

フェローの剣はいとも簡単に弾かれた。

盾の防御すら追い付かぬほどのトキーエの速攻は、フェローの喉元にわずか指一本の間を残して静止していた。

真っ青になるフェロー。

声も出ない観衆。

トキーエは微笑みを浮かべ、静かにつぶやいた。

「いかがでしたか？」

「・・・ま・・・参った・・・!」

一呼吸おいて、歓声が巻き起こった。

剣を引いて鞘に収めるトキーエに、フェローは声をうわずらせながら素直に負けを認めた。

「すまなかった、トキーエ・・・その・・・失礼な物言いを許してくれ。まさか双剣術がこれほどのものとは思わなかった、完敗だよ。素晴らしい太刀筋だった。」

非礼を心から詫びるフェローを見て、双剣術を馬鹿にしていた他の少年たちも同じくトキーエに謝った。少女たちのトキーエに対する奇異の眼は、尊敬のまなざしに変わっていた。周囲の賞賛の言葉の中でも、やはりトキーエはいつもの柔らかな笑みのままで、誇らしげにすることなく、また奢ることもなかった。

一方、鼻っ柱をへし折られたことで、自分がいかに傲慢になっていたかを思い知ったフェローは・・・

「失礼します、フェローと申します。あの・・・トキーエ君はおりますか。」

その一件があつてから、フェローはトキーエにしばしば剣術の練習を申し込みに行くようになった。トキーエはそんなフェローの申出をいつでも快く受け、二人で森で剣術の練習をしている姿を、その頃からよく見ることができた。

双剣術の天才トキーエと、剣術の天才フェロー。
ナロフの街で、二人を知らぬ者はいなかった。

ナロフ警備隊

少年は、やがて男になっていく。かけがえのない友情を培いながら、トキーエとフェローも、自分の道を少しずつ歩き始めた。

年嵩が上な分、フェローが先に警備隊に所属になったが、トキーエも十八になってすぐ警備隊に所属になった。祖父と父の強い希望があつてのことだったが、トキーエも己の力を高めるため、警備隊へ入ることに異存はなかった。

しかし受け入れる側の警備隊は、彼が入った瞬間から独特の空気を持つようになる。トキーエが双剣術を使うというのは警備隊でも有名で、しかも大概の警備兵は、そのことをよく思っていないかった。根強い双剣術への批判は隠しきれず、トキーエへの風当たりは決して良好とは言えなかった。

「隊長がよく許したものだ、双剣術なんて馬鹿な剣術を使う奴を入隊させるなんて・・・」

「まったくだ。盾を使わないなんて、死にたがりの悪あがきみたいなものだぜ。」

聞こえよがしな悪態は、いつでもトキーエのそばでつぶやかれていた。トキーエは、そんな時でも常に驚くほど冷静だった。どこ吹く風といわんばかりに、平静を保つことを忘れなかった。

そんなトキーエを横目に、いつでも頭に血が上るのは・・・

「他人の悪口をぐちゃぐちゃ言うのは女々しい証拠だ！おまえらにトキーエの何が分かる、何も知らずにでかい口ばかり叩くんじゃない！！！」

「な、何だよ！それが先輩に対する言葉づかいか！」

「何が先輩だ、人の悪態しかつけないような連中を、先輩だなんて

呼ぶ気はない!!」

フェローはいつでも勢いよくそうまくし立て、トキーエの悪口を言う連中に食って掛かるのだった。

トキーエはいつも何も言わなかったが、フェローはそんなトキーエに付け入る連中が許せず、しばしば口喧嘩以上の喧嘩になることもあった。当時警備隊長に就任していたフェローの父親はそんな時フェローを叱るのみならず、相手を叱ることも忘れなかった。隊長の心にも、双剣術への反感がないわけではなかったが、息子のフェローが一目置くトキーエに、少なからず興味を持っていたことも確かであった。

そうするうちに毎年恒例の警備隊武闘大会が開催される運びとなった。大会には三つの種目があり、剣術、弓術、体術に分かれている。警備隊の人員数が少ないため、ひとり二つの種目に出場することがきまりとなっていた。警備隊員全員参加の大会で、もちろんトキーエもフェローも出場する。トキーエの双剣術を擦じ伏せようとする者たちも同様だ。

それは春祭、トキーエが警備隊に所属になってから、わずか二月たらずのことであった。

「トキーエ、剣術のほかには何を選ぶ？」

フェローがにこやかに声をかけると、トキーエはうなずいて言った。

「迷ったけど、やっぱり体術にしようかと思っています。」

「え、体術？」

フェローは驚いた、といった表情で目を見開いた。トキーエは体

術に付きものの『屈強』とか『豪腕』という言葉とは、とても縁遠かったからだ。どちらかと言えば、『しなやか』さを感じさせ、男性にしては多少非力に見えなくもない。

「トキーエは弓の方が得意そうに見えるけど・・・」

「ええ、弓も好きですけど、やはり体術も実戦で練成しなくてはいいけませんからね。」

フェローは念を押してもう一度聞いたのだが、あまりにも屈託なく返された言葉の前に、何も言えなくなっていた。奴がそう言うなら、心配など必要ないのだろう。フェローはひとり納得して、その横顔を眺めていた。

最終的にフェローは弓術を選び、トキーエはやはり体術を選んだ。それを聞いてほくそ笑んだのが、トキーエの鼻をへし折ろうと策を練る連中である。剣術ではかなわなくても体術なら、あの「細腕」に負けない自信があったのだ。

そして当日。ナロフは近年にない賑やかさをもって春祭を開催した。警備隊主催の武闘大会も異常なほどの盛り上がりを見せた。

弓術部門では開催場から、街中央の噴水前に設けられた的を射るのが恒例で、弓の名手と誉れ高い警備隊伝令長のジリオツテが、例年通り手堅く優勝を手にした。狩猟の街でもあるこのナロフにおいて、弓術だけはどうしても、年期を経た勘と腕にはかなわない。健闘及ばず、若いフェローは入賞はおあずけとなった。

一方、体術部門では、注目のトキーエの試合となっていた。

「トキーエ!!ギアムデン、ゴーシュ!!バンダリ、前へ!」

広場の中央へ進み出る二つの影。トキーエの相手は、体術部門で優勝を何度も経験している、筋骨隆々の大柄な男、ゴーシュ。ゴー

シュは自分より二回りほど小さいトキーエを見て、鼻で笑ってつぶやいた。

「今から棄権するなんて言わせねえぞ、トキーエ。」

ゴーシュも、双剣術を駆るトキーエを敵視するひとりだった。トキーエは試合前の礼をし、何も言わずに微笑んでいた。

判定員が掛け声とともに、試合開始の赤い旗を振る。ゴーシュは構え、トキーエも同じく構えた。ゴーシュは体格からは想像もつかない早さでトキーエに踏み込んだ。急所への寸止めと、相手を場外に放り出すことが勝負の判定となるが、ゴーシュの踏み込みは、とても試合のものとは思えない勢いだった。過失を装ったの暴挙に出ようという魂胆が、あからさまに現れていた。

トキーエはそんなゴーシュの拳が迫る寸前でそれを躲し、躲しざまに勢いよく跳躍した。

「何っ!？」

虚を突かれたゴーシュは、すかさずその後を目で追う。するとトキーエは空中で半身を返し、手を突き出そうとしていたゴーシュの額に、二本の指で倒立して見せた。

どつと沸く観衆。

だがそこでゴーシュは、頭にくるよりも先に全身に冷たい戦慄が走るのを感じた。トキーエは少なくとも、数秒間はゴーシュの額に全体重を乗せて静止している。しかし、ゴーシュはそれをまったく感じなかった。額に触れた二本の指の感覚だけで、後は木の葉のようには何の重さもない。尋常ならざるものを感じるゴーシュ。

そしてトキーエはすぐにゴーシュから離れて着地する。ゴーシュが我に返って振り返ろうとする直前、トキーエは素早く踏み込み、眼光鋭くゴーシュの腹部目掛けて突きを叩き込む、その寸前で止め

た。

「……ト、トキーエ一本!!」

目にも止まらぬ早さだった。

観衆も一瞬静まり返り、判定員も思わず身を乗りだしていた。ゴーシュですら、あまりのことに脂汗がどっと吹き出す。

瞬間にトキーエが放ったのは、「突き」だけではなかったのだ。

そうしてトキーエが勝ち、ゴーシュは半ば放心状態になって広場から退散する。ゴーシュを応援していた連中は、口々に惜敗を悔やみ、勝利者であるトキーエを罵った。だがゴーシュは、そんな仲間たちに向けて大きく首を振り、青い顔でつぶやいた。

「……あ、あいつは、おそろしく強い……!あれが試合じゃなかったら、俺はあの一瞬で、すでに殺されている。」

「おいおい、何を言うんだゴーシュ、おまえがあんなひよっこに負けるわけが……」

ゴーシュはまた首を振り、声をひそめ口を押さえながらうつむく。

「突く瞬間、あいつは凄まじい『闘気』を発した……俺はあの時、死を見たような気がした。あれだけの闘気を持つ奴に、俺がかなうはずがない……とんでもない男だ、トキーエって奴は……」

体術の猛者ゴーシュをしてそう言わしめる、トキーエの闘気。仲間たちは重みあるその言葉の前に、押し黙ってしまうのだった。

トキーエはその後も、危なげなく勝ち進んでいった。また剣術でも、素晴らしい腕前でトキーエは連勝した。一振りの剣を使い立ち

回るトキーエは、まるで剣舞でも踊っているかのように優雅であった。またフェローも同様に、芸術と言ってもおかしくない闘いぶりを見せた。誰もが決勝戦、この二人の一騎打ちを期待した。

しかし、結局それはかなわなかった。

体に変調をきたしていたトキーエの祖父の容体が、急変したのだ。警備隊を引退したトキーエの父と姉のひとりが広場に駆け付けると、トキーエは警備隊長の許可を得て、すぐさすべての試合を棄権し、自宅へと飛んで戻った。フェローもトキーエについていきたい気持ちでいっぱいだったが、まさか自分も試合放棄するわけにはいかない。トキーエの流れる金髪を見送りながら、トキーエの分も精一杯闘おうと、フェローは己の心に誓った。

・・・

「お祖父様！」

トキーエが家に戻ると、祖父は虫の息であったが、表情は驚くほど穏やかであった。寝室には家族が集まり、街の神父がその脇に厳かに立っている。トキーエが枕元に駆け寄ると、母と姉が首を振って見せた。

「・・・トキー・・・エ・・・」

祖父が、小さくつぶやいた。トキーエは祖父の手を取った。皺の刻まれた手の温もりが、頼りないほどにいいとおしい。

「・・・己の道を信じなさい・・・いばらの道を越えてこそ・

・・・光はその頭上に・・・・・・・・・・」

「お祖父様・・・！」

祖父はそつと微笑を浮かべ、そのまま、静かに息を引き取った。幼い頃からトキーエに剣術を教え込み、可愛がつてくれた祖父。双剣術を選んだ時も、黙ってうなずき許してくれた祖父。トキーエはぬくもりの失われていく祖父の手を握り締め、哀しみの光をたたえた瞳で、しばらくそのもとを離れなかった。

・・・

その夜、春祭の最終日。

剣術で準優勝したフェローが、黒いリボンを巻いた果実酒を持ってギアムデン家を訪れた。街が狂ったような喧騒に包まれている中、ギアムデン家はひっそりとしていた。トキーエの母が応対に出て、トキーエは森の墓地に行ったと告げた。フェローは果実酒を持ったまま、墓地のある森へと歩いていった。

しばらく行くと、ランプの明りに照らされた金髪が見えた。その金髪はまるで、闇に生えているようにして、風になびいていた。

「トキーエ・・・」

おずおずと声をかけるフェロー。

トキーエは振り返り、いつもの笑みに少し淋しい影を落とし、フェローに微笑んで見せた。

「準優勝おめでとう、フェロー。」

フェローも同じように、淋しげに微笑みを返す。

「お祖父様のことは・・・気の毒だったね。でもおまえが最後まで大会に出れなかったことも、俺は悔やまれてならないよ。」

「収穫際までお預けですね。」

「古参の先輩に気を使って、俺は準優勝の座に甘んじたけど、おまえ相手だったら心から喜び勇んで闘っただろう。おまえがいるからこそ、しがらみに縛られた大会にも出た意義があるのに・・・残念だった。不本意な準優勝祝いと、お祖父様を悼んで、どうだ、少し飲まないか。」

黒いリボンが、風になびく。

「僕はお酒は・・・」

「自分の街の名産品くらい、飲めなきゃおかしいぜ。牛や馬みたいながぶ飲みするわけじゃなし。な。」

フェローは、トキーエを立たせて歩き出した。静かな墓地にランブの明りが揺らいでいった。

武闘大会の後、警備隊ではトキーエを見る目が少なからず変わっていた。最後には棄権したとはいえ、通常の剣術以上の技術を謙虚ながらも披露して見せたトキーエ。それを目の当たりにした後では、もはや彼が双剣術者だからと嘲ることは、浅はかであるとしか言い様がなかった。そして双剣術が愚かであるという意識が、警備隊の中で、また街の人々の中でも、少しずつ変わりつつあった。

それでもトキーエはいつものように変わることなく、毎日の修行を怠ることはなかった。もはや得るものは得尽くしたに見えるトキーエだったが、当人はまだ半人前のつもりだと言って笑うのだった。

祖父を失った哀しみが反動となったのか、前にも増して修行に励むトキーエの姿が森で見受けられるようになった。

そうして月日は流れ、トキーエは二十歳になった。

親友の旅立ち

ナロフ警備隊の武闘大会では、すでにトキーエは最も手堅い剣術部門優勝候補として上げられていた。双剣術者としてのトキーエの地位はすでに確立され、音に聞こえた双剣術の妙技を見ようと、他の村や街からも見物人がやってくるようになり、ナロフの街はますます賑わっていった。

そして秋の収穫際、例年通りナロフ警備隊による武闘大会が行われた。そしてそこに、鋭い目をした堂々たる初老の紳士が、来賓として招かれて大会の成り行きを見守る姿があった。その横に警備隊長も座っている。

「わざわざ遠い道程をおこし頂きまして光栄に存じます、エトワール衛兵隊長。」

「いえいえ、こちらが無理にお願いして、こうしてここに座らせていただいております次第。サンテルマインの衛兵隊長としても、また一介の剣士としても、このナロフ警備隊の武闘大会は大変興味深いものでしてね。」

初老の紳士はそう言って髭をなでる。この紳士こそ、東の大陸一の大国、サンテルマイン王国の衛兵隊長イデリオ・エトワールである。警備隊よりもさらに選りすぐりの兵によって構成される衛兵隊は軍と同様、広大なサンテルマインの領土を守る要となっている。

剣術部門の優勝決戦が始まった。

「トキーエ!!ギアムデン、フェロー!!トヴァシュトリ、前へ!」

最大の注目である。観客は沸き返り、特に女性たちは二人に熱い黄色い声を浴びせ掛ける。しかし当の本人たちに、それらの声は一切聞こえなかった。これまでの戦績はトキーエ三勝、フェロー一勝、今度の対決で五回目になる。

勢いよく声がかかり、赤い試合開始の旗が振られる。

それを合図に、トキーエとフェローは気合いとともに突進した。トキーエはいつものように盾を持たず、一振りの剣だけで闘いに挑む。鋭い金属音がぶつかりあって弾け、一気に後ずさる二人。どちらも戦の光を帯びた鋭い瞳で、互いの隙を狙う。トキーエは静かに剣の切っ先をさげ、ゆらゆらと揺らし始める。

「ほう・・・」

エトワール衛兵隊長が声を出す。フェローはじつとその切っ先を見つめていたが、やがてその均衡が破られる。一気に突っ込むフェロー。トキーエはそれを見越していたのか、猫のように身軽に跳躍した。しかしフェローも、それを読んでいた。

「はっ！！」

跳躍したトキーエに向けて、フェローは素早く剣を突き上げた。観衆があつとどよめく。トキーエもハッとして眼下のフェローの剣を凝視した。

「おおっ！！」

思わず立ち上がる警備隊長。衛兵隊長も目を見開いた。

くるりと身を返したトキーエの剣が、フェローの盾に施された装飾のわずかな溝を捕らえ、その身体をわずかに宙にとどめる。トキーエはフェローの鋭い突きを紙一重で交わし、地面に吸い込まれる

ように着地する。フェローはトキーエに体勢を立て直す隙を与えず猛攻をかける。トキーエは速攻で繰り出されるフェローの刃をすべて一本の剣で受け止め、流す。衛兵隊長は魅入られるようにその剣捌きを睨んでいた。

フェローの剣は休まることかない。トキーエも受けるだけで攻撃はしかけない。その均衡がどこで崩れるか、誰もが声もなくその情景を見つめた。だがやがてある一瞬、トキーエの身がずっと左によった。

「あっ！」

衛兵隊長が思わず叫ぶ。

フェローの変わらぬ突きが繰り出された瞬間、トキーエはフェローの剣先を受け止めると同時にするりと流し、素早く大きく一步踏み込んだ。

途端にすべての動作が急激に静止した。

トキーエの剣はフェローの剣を流すと同時に、手首から先へ抜けていた。すらりと延ばした手に握られた、剣の切っ先がトキーエの背後に伸び、その刃はフェローの首筋にびたりとあてがわれている。

「・・・・・・・・ト・・・・・・・・トキーエ、一本！」

判定官が一呼吸おいて叫んだ。

「優勝、トキーエ！ギアムデン！！」

大歓声が巻き起こる。

衛兵隊長も身を乗り出して、勝利者であるトキーエに惜しみない

拍手を贈った。トキーエは割れるような歓声の中、静かに剣を下ろし、フェローに振り返る。フェローもまた同じように剣を収め、振り返った。

「・・・負けたよトキーエ・・・完敗だ。」

「フェロー・・・ありがとう。」

二人はゆつくりと、力強い握手を交わした。さらに大きな歓声が沸き上がる。警備隊長が広場に上がると、トキーエの頭に月桂冠を乗せて、大きく叫んだ。

「秋季武闘大会剣術種目優勝、トキーエ!!ギアムデン!!皆さん、素晴らしい勝利者へどうぞもう一度大きな拍手を!!」

嵐のような拍手が降り注がれる。その拍手の渦の中、警備隊長は静かに小さく、息子のフェローに向けて微笑んだ。

「・・・おまえも、よくやった。」

フェローは照れくさそうにして微笑み、トキーエもまた、いつもの優しい笑みを浮かべて、大歓声に答えて手を振るのだった。

・・・

そして翌日。

「えっ、トキーエを、サンテルマイン衛兵隊へ、ですか。」

警備隊長は目を丸くした。サンテルマイン衛兵隊長イデリオ!!エトワールはそんな警備隊長に、力強くうなずいて見せる。

「しかし衛兵隊長、衛兵隊への入隊基準は相当に厳しいと聞きます。試験もなしに、無条件でトキーエを衛兵隊に所属させるのは、どうかと思いますが・・・」

「彼には、我が衛兵隊の試験など、まったく必要ないと確信いたしました。彼の腕があれば、瞬く間に衛兵隊分隊長や補佐官に昇任できるはずです。彼にとっても、彼の双剣術にとっても、悪い話ではないと思いますがな。」

「それは確かに。トキーエの腕はもはやナロフーと言ってよいでしょう。サンテルマイン衛兵隊で鍛えられた方が、彼のためかもしれない・・・しかし・・・」

「心中重々お察しいたします。彼のような優秀な人材を引き抜かれるのは痛いことでしょう。しかし貴殿の御子息フェロー殿のように、素晴らしい剣士がナロフを守り続ける。彼にも本当はサンテルマインに来ていただきたいが、優秀な者を二人も引き抜いては、と思いませんでな。」

「・・・お話は分かりました。トキーエを呼びましょう。」

そしてトキーエは、警備隊長室へ呼ばれ、中へ通された。待ち受ける衛兵隊長のまなざしが、腰に下げられた二振りの剣に注がれる。警備隊長は静かに先ほどのやりとりをトキーエに説明した。

「私が、サンテルマイン衛兵隊へ・・・」

「うむ、エトワール衛兵隊長たってのご要望だ。おまえとしては、どうだ？」

トキーエは衛兵隊長を見た。衛兵隊長は鋭い瞳でトキーエを見据え、椅子から腰を上げて歩み寄った。衛兵隊長はじっとトキーエを見たまま、瞬きもせずにつぶやいた。

「私はきみの双剣術に敬意を表する。たとえきみが普通の剣士であつたとしても、それは変わらないだろう。私はサンテルマイン衛兵隊の隊長として、ぜひきみに我が衛兵隊へ来てほしい。これからさらに厳しくなる世界の現状から、きみのような素晴らしい剣士がどうしても必要なのだよ。」

トキーエは少しだけうつむき、ゆっくりと顔を上げて、しっかりと答えた。

「・・・私のような若輩者が、ナロフをはじめとしたサンテルマインの・・・ひいてはこの大陸全土の平和のために役立てるのであれば、衛兵隊長のご要望に異存はありません。」

「おお・・・では、サンテルマインへ来てくれるのだな！」

トキーエはうなずいた。そして警備隊長に振り返り、深く頭を下げた。警備隊長は微笑み、トキーエの肩を叩く。

「頑張りたまえトキーエ、警備隊としては、おまえのような逸材を失うのは惜しいが、おまえの腕はこのナロフで朽ち果ててはならない。大きな舞台に立って羽ばたけ、おまえの信じた双剣術が輝く時代が、これからやってくるのだ。」

こうしてトキーエはその二週間後、サンテルマインへと出発することになった。衛兵隊への抜擢をもっとも喜んだのはトキーエの父で、警備隊の面々を招いて宴を開き、息子の旅立ちを祝福した。警備兵たちも同様にトキーエを激励し、何度も祝杯が掲げられた。

「すごいなトキーエ、サンテルマインでも頑張れよな。」

「フェロー・・・ありがとう。」

「俺は警備隊長を・・・親父を補佐して、このナロフを守っていく。」

本当ならおまえについていきたいところだが、この街を守るのが俺の使命だと思ってる。だから、おまえの活躍は、このナロフの街から見ているよ。」

トキーエとフェローは、いつ言い出したわけでもなく、同時に手をさしだした。二人の掌には、それぞれの家紋を刻んだ、小さな鋼のプレートが握られていた。それは二人の友情の証し、最も信頼を置いた相手であるという、証明である。

「ありがとうトキーエ・・・俺はこれを盾に嵌めて、護符がわりにするよ。」

フェローの言葉に、トキーエがつぶやく。

「私は盾に嵌めるかわりに、剣に・・・と言いたいところですが、肩当てに嵌めようと思います。」

「肩当てに・・・か。剣に嵌めないのか？」

トキーエは小さく微笑んで首を振った。

「・・・あなたの紋章を、血で汚すわけにはいきません。」

広がりつつある戦の波、それをこれから被りにいくトキーエ。フェローはその一言を聞いた時、胸が痛くなった。

ここで引き止めるのが、真の友情なのではないだろうか。非情な戦の最前線に立とうとしている友への、せめてもの優しさではないだろうか。

しかしフェローは最後まで、トキーエを引き止める言葉を口にすることはなかった。それはもうトキーエが、フェローの手の届かない、遙か遠くを見つめていたせいかもしれない。戦場に赴く戦士にはまるで釣り合わない、これ以上にならないほどに澄んだ瞳をしながら、フェローの伺い知らない未来を見つめはじめたトキーエ。

『トキーエはここで埋もれる程度の男ではない・・・』

フェローはひとり心の中でつぶやいて、己の中の友情と、男としての感情を、納得させようと努力するのが精一杯だった。

一方、トキーエが五日ほどを費やしてサンテルマインにたどりつく頃を狙い、トキーエを受け入れる側のサンテルマイン衛兵隊では、エトワール衛兵隊長の預かり知らぬところで、密かに不穏な動きがなされていた。

エトワール衛兵隊長の持ち帰った知らせを聞いて、衛兵隊の上級幹部は大いに喜んだが、他の兵士たちは仰天してその知らせを聞いた。無試験で衛兵隊に所属になるという双剣術の使い手の話は、瞬く間に衛兵隊に知れ渡るところとなり、それをよしとしない兵士たちが、エトワール衛兵隊長に談判に駆け込んだほど、その知らせは波紋を呼んでいた。

我々は厳しい基準に合格し、さらに難しい試験を経て衛兵隊に所属になった。それなのに、たかが田舎警備隊の兵士ごとき・・・それも『愚か者の剣術』と名高い双剣術の使い手・・・が、無試験で、この栄誉あるサンテルマイン衛兵隊に所属になると聞かされては、どの兵も面白くないのは当然だ、と。

それを聞いたエトワール隊長は、兵士たちを睨み据えてこう返した。

もちろん、それは分かる。

試験をしろと言っのなら、彼にそれを課すこともいいだろう。

だが、おまえたちはすぐに思い知るだろう。試験などせずとも、彼がここに来るべき裁量を、すべて備えていることに、と。

兵士たちはその場は引き下がったが、どうしても収まりがつかなかった。そこで有志の兵士が集まって、トキーエがエトワール隊長に謁見する前、つまりサンテルマインの城下町に入った直後を狙って、彼の力量を試してやろうという策略が練られたのだ。六人の兵が名を上げ、彼等はトキーエが街へ入るのを、今や遅しと待ち受けていた。

新兵の通過儀礼

そうしてナロフを後にし、サンテルマインへと旅立ったトキーエ。軽鎧を見に付け双剣を腰に下げたトキーエは、未知の世界へと歩き出した。およそ五日かけて、ようやくサンテルマインに辿り着くという頃になって、雄々しく聳えるサンテルマインの古めかしい城門が見えてくる。古き歴史を持つサンテルマインを守り続けるこの城門と城壁は、サンテルマインに住むすべての者たちの誇りでもあるのだ。

トキーエはエトワール隊長から渡されていた通行証を、城下町入り口の門番に差し出した。初老の門番は通行証の文句をじっと読み、にこやかに微笑んで、衛兵隊への案内をかってでた。

「ようこそ、ようこそトキーエ様。あなたのことはエトワール隊長から聞いておりました。案内役を仰せつかりましたハザムと申します、よろしく。」

「トキーエ＝ギアムデンです、よろしくハザムさん。」

ハザムは快活で話好きなようで、トキーエの住むナロフの話をしきりと聞きたがった。衛兵隊への近道ということで、城壁沿いの裏道を連れ立って歩く二人。トキーエが微笑みながらハザムに答えようとした矢先、小路から突然六人の人影が現れ、トキーエとハザムの前に立ち塞がった。

「な、なんじゃおまえらは！」

ハザムが青くなって叫ぶ。それもそのはず、それら六人はすべて黒い覆面をして黒いマントをつけ、むき出しの剣をかざして迫ってきたのだ。

トキーエはハザムを素早く後ろへ押しやり、ハザムを背後に守るようにして、その六人と向かい合った。

「貴様がトキーエか。」

覆面の底から声がする。

「私を知っておられるのなら話は早い。急ぎの用がありますので、御用件は手短に願います。」

トキーエは少しも物怖じせずに堂々と言つてのけた。ひとりの覆面男が進みでて、覆面の下からトキーエを睨んだ。

「・・・この街はおまえのような愚か者を必要としていない。ここで斬り捨てられる前に、さっさとドブ臭い田舎へ逃げ戻るがいい。」

笑い声が起る。トキーエは黙つてそれを聞いている。

だが後ろでそれを聞いていたハザムは違った。

「何と言つ侮辱を！この無頼漢どもめが、己の言葉を恥と知れっ！トキーエ様の武勇伝を知らんのか！？」

唾を飛ばして息巻くハザム。トキーエはそんなハザムを微笑んで制した。

「いいんですよハザムさん。ありがとう。」

「トキーエ様、だつて悔しいですよ、あんまりじゃないですか！」

「構いませんよ。それを証明しなすために、皆さんいらして下さったようですから。」

その言葉を聞くや、六人はザツと身構えた。ただのならず者とは違う、洗練された気迫が発せられる。トキーエもその気配を敏感に感じとり、剣の柄に手をかける。

「六人が相手では、いかにおまえでもかなうまい。」

「自慢の双剣術が、どれだけ我等に通用するかな？」

くぐもった声がする。トキーエは少し考え、ようやく両の手に剣を握り、すらりと引き抜いた。ハザムに振り返らずにトキーエはつぶやく。

「危険ですから下がって下さいね、ハザムさん。」

「トキーエ様、おひとりでは危のうございます！私が応援呼びに……！」

「平気です、大丈夫。後ろに下がってじっとしてして下さい。」

その言葉が終わらぬ内に、六人は一斉にトキーエに飛び掛かった。トキーエはそれらが迫る一瞬、力強く踏み込んで六人の中央に飛び込んだ。激しい剣の衝突音が響く。思わず目を塞ぐハザム。

だが目を開いてみるとそこには、六つの刃を軽々と受け止める二振りの剣があった。一方で二つの刃、もう一方で三つの刃、そしてもうひとつの刃を、剣の柄そのもので受け止めている。

「ばっ……馬鹿な……！」

思わず飛びすさる六人、剣の重圧が解かれたと同時に、一気に突き進むトキーエ。次には、二つの剣が凄まじい勢いで弾き飛ばされ、宙を舞っていた。

「おお、何という……！」

ハザムが思わず声を上げる。しかし残り四人は怯むことなく、両脇からトキーエの死角に入り込もうと盛んに動き、トキーエは周囲から迫る視線をそれぞれ見据える。

一つの剣がトキーエに襲いかかった。そして時間差をもって、すぐに次の刃もトキーエに迫る。トキーエは素早く身を返し、まずひとつ目の剣を弾き飛ばした。そして残るもう一方の剣で、残り三つの剣をさらりと受け流して見せる。その間、彼は一度もその方向を振り返っていない。

三つの剣は素早い動きでトキーエの隙を狙うが、トキーエはどこを向いていても必ず、刃の先をとらえて弾き返した。そのわずかに剣が持ち上がる一瞬を、トキーエは逃すことはなかった。素早く剣を突き返して、どこにそんな力があるのかと思うほどの凄まじい勢いで、覆面の男の剣を弾き飛ばすトキーエ。

残る二人に動揺が見えはじめる。

「く、くそつ、こんな馬鹿な！」

トキーエは静かに歩みよりながら言った。

「今度手合わせする時は、もっとちゃんとお相手しましょう。今はひとまずこの程度で我慢していて下さい。」

トキーエはつい、と滑るように一歩踏み出し、始めて自分から覆面の男たちに向かっていった。二人は焦りながらも、必死に応戦の構えを取る。だがもはやそこに始めのような勢いはなく、トキーエの二本の剣は、目にもとまらぬ早業で、それらの剣を二本同時に弾き飛ばしていた。

「おつ、お見事でございますトキーエ様つ、何という手練れ、何と

素晴らしい剣捌き！！」

ハザムの言葉の間、六人はそれぞれが散り散りになって逃げ、最後のひとりも、痺れた手を押さえ、あわてふためきながら去っていった。

・・・

「そうなのでございます、何ともはや、素晴らしい闘い振りでございました！隊長にも見せて差し上げたかった、トキーエ様のあの勇姿、どの伝説にも負けることはありませんでしょう！」

サンテルマイン衛兵隊の隊長室は、興奮冷めやらぬハザムのおしやべりで、ことのほか賑やかになっていた。トキーエはその脇で、控え目に微笑んでいる。エトワール衛兵隊長はにこやかにその話を聞いていた。

「災難にあったとは思えぬハザム、ひょっとして黒い覆面の男たちに、感謝しておるのではないのかな？」

「はは、トキーエ様には申し訳ないが、あのような武者振りを目の当たりにして本当に、血が沸き立つ思いでございました。」

ハザムがうきうきとしてトキーエを見る。ひとしきり満足するまで話し続け、ハザムはようやく隊長室を後にした。

衛兵隊長が苦笑しながら言う。

「おしゃべりなのが玉に傷だが、いい門番なんだ。」

「はい、承知しております。」

トキーエがそう言うてすぐ、衛兵隊長は表情を変えてため息をつ

いた。

「六人の覆面の剣士に襲われたと・・・その長剣の特徴からして、恐らく我が衛兵隊の者の仕業であろう。何という恥知らずなことを！」

衛兵隊長は頭をかいた。

「すまんなトキーエ、所属になって早々にこんなことになってしまつて・・・」

「お気になさらないで下さい衛兵隊長、予想はしておりましたから。私がナロフの警備隊に入った時も、同じような事が何度かありましたので。」

「君の手腕が認められれば、こんなことはなくなるはずだ。その場を作れるように、私も努力しよう。」

「・・・どうかお気遣いなくお願いいたします。自分の選んだ道は、自分で均して開きます。それが、我が師との約束ですので。」

衛兵隊長はしばらくトキーエを見つめた後、静かにうなずいた。

・・・

「ようこそサンテルマイン衛兵隊へ、トキーエ。俺はクリオ＝ノーラン。今日から同じ第三中隊だな、よろしく。」

「はじめまして、トキーエ＝ギアムデンです。どうぞよろしく。」

クリオは礼儀正しい、快活な男であった。小柄な体ではあったが、その眼光には鋭い光が宿っている。クリオはサンテルマイン城下町

の出身で、厳しい衛兵隊の試験を優秀な成績で突破した強者だ。第三中隊長の補佐官としてその手腕を発揮し、また人望も厚いと言われるクリオと、トキーエが隣同士の居室に入ることになったのは、エトワール衛兵隊長の少なからぬ配慮があったのだろう。

「衛兵隊は警備隊よりも多少扱いが荒つぽいかもしれん。慣れればいい所なんだが、そうなるまでにしばらく時間がかかることだけは覚悟しておくといい。それでなくても、おまえはかなり有名ならしいから・・・」

暗に双剣術者であることを指すクリオ。トキーエはうなずいた。

「我等が王とその領土を守る、このサンテルマイン衛兵隊の同志である以上、俺はどんな素性の奴だろうと仲間だと思うがな・・・そうじゃない奴も中にはいる。へこたれるんじゃないぞ。」

「はい。」

クリオはそう言いながらも、それがいらぬ心配なことはすでに分かっていた。トキーエの目は、そんな不安などは毛ほどもない、控え目ながらも強い光を宿していた。双剣術という異質の剣を駆るこの男は、どれだけの景色を見つめてきたのだろうか。クリオは、己が越えて来たものすべてを飛び越してここまで来たトキーエに、すでに抑えがたい興味を持ち始めていた。

夕暮れ間近、クリオは荷物整理のすんだトキーエを連れ、衛兵隊の各施設を案内した。

「あの建物が訓練場、そっちが倉庫。あの棟が俺たちの居住区で、これが食堂だ。結構うまいメシ食わせてもらえるよ、待遇はいいぜ。いつだったか、メイベルの警備隊に出向いた時はひどかったっけな

あ。水みたいな実の入ってないスープに、石みたいに堅い肉とチーズが出て・・・」

楽しく話しながら、クリオとトキーエは食堂に入ってしまった。そしてトキーエが食堂に踏み込んだ途端。

「!・・・」

食堂内にいた兵士ほとんどの視線が、一気にトキーエに集中した。一緒にいたクリオがハツとするほど、それは鋭い視線だった。だがトキーエは、まるで何も感じていないかのように、クリオの堅い表情を見つめ、微笑んでみせた。クリオが心配そうにトキーエの目を見る。だがトキーエは、相変わらず微笑むだけで、何も気にしていない。

肥えた食事係の男から食事を受けとり、椅子に座る二人。

「・・・気にするなよトキーエ。」

クリオが神妙な顔でつぶやく。夕飯は蒸した白身魚の料理だった。旬の野菜がたっぷり飾られ、暖かな豆のスープと丸パンがついている。

「うん、おいしいですね。」

微笑みを崩さず、スープを口に運ぶトキーエ。この凄まじい視線の中で、これだけ余裕で食事を味わえるのか。クリオはトキーエの度胸に唖然とする。

そんなトキーエに、大柄な色黒の男が靴音を響かせて近付いてきた。クリオがはつとして顔を上げると、その男はクリオを見、次いでトキーエを見た。

「おまえか、今日から入った新人ってのは。」

トキーエはゆっくりと顔を上げ、その男を見た。

視線がかちあう。

クリオが止める間もなくトキーエは立ち上がり、その男に礼をした。

「ご挨拶が遅れましてすいません。トキーエと申します。」

「トキーエ、食事を続ける。」

クリオがすかさずつぶやいた。色黒の男がクリオを見る。

丸パンを放り出して立ち上がったクリオは、その男を眼光鋭く睨みつけた。

「ワイリー、彼の紹介は明日という指示を受けただろう。どうしても用があるなら、食事の後にしてくれないか。」

ワイリーと呼ばれたその男は、じつとクリオを見た。

「すまんなクリオ、俺が用があるのはこいつだけだ。目付役だか何だか知らんが、おまえの指図は受けん。」

「何・・・!」

身を乗り出すクリオを、トキーエが素早く押さえる。

トキーエは首を振り、クリオから視線を外して振り返る。

「御用があるならどうぞおっしゃって下さい。食事はいつでもできます。」

クリオに睨まれながら、男は威圧的なまなざしでトキーエを睨んだ。

「第二中隊長補佐官、ワイルダー」パッセ。無試験で所属になられた新人様へ礼儀つてやつを教えてやるうと思つてな。」

「お気遣いありがとうございます。」

トキーエも挑むような目でワイルダーを見ている。

「新人の通過儀礼として、初日には衛兵隊全員の食器洗いをするのがきまりでな。綺麗に拭いて、磨き上げることも忘れるなよ。」

「な・・・馬鹿な、ワイリー！そんなきまりがあるものか！！」

クリオが叫んだ。だがトキーエは、ワイルダーに向けてしっかりとうなずいた。

「承知しました。必ずやつておきます。」

「トキーエ・・・！」

「いいか、皿の一枚でも割つたら、衛兵隊員としては失格だ。いいな。」

「承知しました。」

いつのまにいたのか、ワイルダーの周囲にはその取り巻きがいて、にやにやと笑っていた。クリオは怒りに震えてワイルダーを睨んでいる。ワイルダーはそんなクリオを一瞥してつぶやいた。

「誇りある衛兵隊員として、くれぐれも密告などせぬようにな、クリオ。」

「く・・・見損なつたぞワイリー、それが誇りある衛兵隊員のすることか！！」

「何とでも言え。おまえもあまりこいつに肩入れすると、とばっちりを食うことになるぞ。同期の誼^{よしみ}で忠告しておく。」

そのやりとりの間に、食事係の男数人が無理やり厨房から追い出される。トキーエはクリオを見つめ、平気だ、とでも言うように、微笑みをたたえてうなづく。

「・・・早く食事をすませて会議室へこい、クリオ。」

ワイルダーは、数人の取り巻きとともに去っていった。

クリオは苦々しげにその後ろ姿を見送り、テーブルを激しく叩いた。

「くそつ、あいつわざと会議のある今日を選んだな！トキーエから俺を引き離すために・・・何てことだ！！」

荒ぶるクリオの向かいで、トキーエは静かに椅子に戻る。

「ノーラン補佐官、どうぞ会議に臨んで下さい。私は大丈夫です。」

「しかし・・・衛兵隊員が皿洗いなど、恥辱以外の何物でもない！これを衛兵隊長が知ったら何と言われるか・・・！」

「パッセ補佐官のおっしゃるとおり、このことは他言無用に願います。衛兵隊長にこれ以上御心配をおかけするわけにはいきません。」

「これ以上・・・って、前にも何かあったのか？」

「些細なことです。これもその延長線上にすぎません。大丈夫、皿洗いもいいものですよ、こう見えても家事は上手な方ですから、どうぞ御心配なく。」

「トキーエ・・・」

冷めてしまった食事をつまみながら、クリオの気持ちは暗く沈ん

でいたが、トキーエは黙って、何を気にするでもなく食事を楽しんでいた。

・・・

そしてトキーエを気にしながら食堂を後にしたクリオ。

食堂を出ると、すぐにクリオは、食事係の男たちに取り巻かれた。

「ノーラン様、彼は大丈夫でしょうか、あの人数の皿洗いをたったひとりでなんて無茶苦茶じゃ！」

「新人だからってこんな仕打ちはひどすぎる、あんな素直そうな子に何てことを・・・」

「ノーラン様、どうか衛兵隊長におっしゃって下さい、こんなことはじめてです、彼がかわいそうですよ！」

太った老人のコツク、髭の生えた給仕、若い見習い・・・すべてが口を揃えて、一人残されたトキーエのことを心配していた。

クリオは静かに、彼等に向けてつぶやいた。

「・・・トキーエに任せよう・・・君達は、彼のことを信じていればいい。俺も、かなりの苦痛だが、そうするように努めるから・・・」

「

「ノーラン様・・・」

クリオは肩を落とし、食堂を振り返りながら、会議室へと向かっていった。

皿洗いのトキーエ

クリオが立ち去った後に残された食事係たちは、どうしてもそのまま食堂を後にすることができず、そつと食堂の扉を開けて見た。

「・・・トキーエ・・・様？」

太ったコックが中を覗く。

広い食堂のテーブルの上は、いつの間にかすべて綺麗に片付けられ、厨房からは水の音、皿の触れ合う音が世話しなく聞こえる中、なんと鼻歌が聞こえてくるのではないか！

「そこで何をしている、もう休んでいいと言つたらう！」

啞然として顔を見合わせていた食事係たちが、突然の怒号に身を縮める。数人の兵士が足音高くやってきたのだ。

「で、でも・・・」

「なあに心配するな、俺たちは彼を手伝いにきたんだぜ、なあ。」

「ああ、その通りだよ。パッセ補佐官はお優しいから、彼を手伝つてやれとおっしゃられて、俺たちをここへよこしたのさ。」

「これで分かつただろう、ほら、さつさと自分の部屋へ戻れ！」

兵士たちは食事係たちを、またも無理やり食堂から遠ざけた。食事係たちは何も言えず、兵士たちが食堂へ入っていくのを黙って見守るしかなかった。

・・・

「いよお新人さん、頑張ってるかい？」

嫌味な言い方をしながら、三人の兵士が厨房へ入ってきた。真っ白い皿が整然と山積みになっているその向うで、水音が一旦止まる。トキーエは振り返って三人を確認し、微笑んだ。

「これくらい平気ですから、どうぞ気になさらないで下さい。」

「そうはいかない、おまえが皿を割らないように見張らないとなあ．．．」

そう言いながら、兵士のひとりが洗い上げた皿の一枚を手にとるうとすると、トキーエは微笑んだまま一歩踏み出し、差し出された手の前に素早くフォークを突き出した。

「おっと、触らないで結構ですよ。片付けは私がやります。」

「なっ．．．何だ貴様、先輩の行動に文句つけようってのか！」

兵士の言葉にトキーエは怯むことなく、逆に鋭く睨み返してこう言った。

「パッセ補佐官がどう言われたかは知りませんが、これが新人の通過儀礼だと申し付けられた以上、先輩であるあなた方がなさることは何一つありません。どうぞ黙って御観賞下さい。」

「ケツ、生意気な口聞いてやがると、ただじゃおかねえぞ！！」

兵士のひとりが構えた。他の二人がはっとしてその兵士を見、同じように大きく構える。

トキーエはそれを見た途端、間髪を入れずにつぶやいた。

「そうでしたか．．．門のところで私を襲ったのは、あなた方なん

ですね。」

ぎょつとしてトキーエを見る三人。だが少しも悪びれずにこう返す。

「ふざけるな、何を根拠にそんなことを・・・先輩を侮辱するのか！！」

するとトキーエは、三人の兵士をゆっくりと指差した。

「あなたは、右足から前に出て足先を捻るのが癖になってますね。そしてあなたは構える時、上体が左へ傾いでいき、それを無意識に修正しようとして、少しふらつき気味になる。それにあなたの声、あの時聞いた声とまったく同じです。」

「・・・何を寝ぼけたことを。そんなに俺たちを犯人にしたいのか？」

「いいえ、それはどうでもいいことですよ。パッセ補佐官に言い付けられた用事が終わるまで、私の邪魔はしないでいただきたい、それだけです。」

「ほう、邪魔したらどうだってんだ、え？トキーエさんよ。」

トキーエは濡れた手を拭き、しっかりと三人に向き直った。

兵士が歩みよりながら低い声でつぶやく。

「自慢の双剣術もここじゃ使えないだろう。剣術ではかなわないかもしれないが、体術ならどうか。」

「お望みならばお相手しましょう。でも厨房で暴れて埃を立てては迷惑ですから、広いところへ・・・」

その言葉が終わらぬうちに、三人の兵士は飛び掛ってきた。

トキー工は素早く身を屈め、蹴りを放ってきた相手の足を潜ってそれを掬い、後ろの二人に向かって投げ飛ばした。二人は飛んできた一人を慌てて受け止める。

「これだけ言っても聞いていただけないのなら、私も少し荒っぽくいかせていただきますようか。皿洗いの時間がなくなるのが惜しいのでね。」

トキー工は滑るようにして三人に踏み込み、態勢を最も崩している、投げ飛ばした兵士に向かって鋭く手刀を一閃する。軽い衝撃とともに、防戦する間もなく、兵士はかくりとうなだれて気を失った。

「な、何だと!？」

慌てて身構えたひとり、飛び込みざまにトキー工に掴み掛かるうとする。トキー工は向かい来る太い腕を、まるで吸い込むようにして引き込み、そのままスツと下へ身を落とした。

「わああっ!!」

軽快な音が響いた。肩が外れたのだ。

「お、おのれっ!」

残る一人が、鋭い突きを雨のように放ってくる。トキー工はすべてのを、掌で軽々と受け流すと、相手が拳を引いたところへ瞬間に掌を延ばした。風のように入り込んだその掌は、相手の顎を捕らえた。

「がっ・・・」

顎を弾かれた兵士は、白目を剥いて崩折れる。

トキーエはその男を静かに横たえた後、肩を外されてわめいている兵士に近寄り、その肩に触れた。ぐつと強くつかまれた瞬間、激痛に襲われる兵士。だが次にはもう、肩の痛みは嘘のようにけろりと治っていた。

「さあ、もう大丈夫ですよ。お手合わせありがとうございました、後のお二方をよろしくお願いいたします。それでは皿洗いがまだ残っていますので、私は仕事に戻りますね。」

トキーエのにこやかな微笑みは、実にあっけらかんとしていた。兵士はきょとんとして肩を撫でていたが、思い出したようにして、気絶している二人の兵士を抱え、厨房を転げるように出ていった。

・・・

食事係たちは、兵士たちにああ言われたものの、どうしてもトキーエが気に掛かり、ずっと食堂の入り口にたたずんでいた。中がかなり騒々しかったのに、すぐに収まったところを見ると、トキーエはきつと張り倒されてしまったに違いない。そんな憶測が飛び交い、食事係たちは重い雰囲気の中で、成り行きを見守るしかなかった。

ところが、食堂の扉が突然開け放たれ、血相を変えた兵士が、二人の気絶した兵士を引き摺って、彼等を咎めることもなく逃げ去っていった。食事係たちはそれをじっと見守り、姿が完全に見えなくなっただけから、我先にと厨房へ押し掛けた。

「トキーエ様・・・!!」

転がり込むように厨房へ駆け付けた食事係たち。

「おや皆さん、まだこちらへいらしたんですか。後は私がやりますから、どうぞお部屋の方でおやすみください。」

そこには、予想されていた乱戦の後はまるでなく、整然と積み上げられた真つ白な皿を、一枚一枚丁寧に拭き上げる、優しく微笑むトキーエの姿があった。

「ト、トキーエ様、御無事で・・・！」

若い見習いコックが安堵のため息をつく。

「そんな大袈裟な、大丈夫ですよ、御安心下さい。もうすぐお皿も拭き終わりますから。」

「とんでもない、皿拭きくらいわしらがやりますから・・・！」
「いいんですよ、パッセ補佐官の御命令ですから、どうか最後までやらせて下さい。でも毎回こんなにたくさんの洗い物があるなんて皆さんのお仕事は大変ですね・・・」

食事係たちは、兵にありがちな横柄な態度とは無縁の、柔らかなトキーエの物腰に感服した。侮辱とも言えるこのような仕打ちにも、微笑みをたたえて対処するとは、何と言う度量であろう。あの荒くれ兵士を、こんな優しい男が懲らしめてしまうとは、人は見掛けによらぬものだ。食事係たちは一時、言葉も忘れて己の感慨に浸った。そして食事係たちはトキーエの言うとおり、皿拭きの邪魔をすることはなかったが、その代わり彼のために、とっておきの、暖かな香り高いお茶を入れてくれた。皿拭きが終わるまで、食事係たちとトキーエはおしゃべりを楽しみ、厨房は賑やかで暖かな雰囲気包まれていった。

・・・

翌朝、衛兵隊の朝礼。エトワール衛兵隊長が壇上に上がった。

「おはよう諸君、今日は新しい我等の仲間を紹介しよう。ここに紹介する八人の者は今日から、我等と同様このサンテルマインの防衛に従事することになる。志しの同じ者同志、協同精神に乗っとなって日々の任務に傾注するように。」

そうして、八人の新兵が壇上に上がる。次々に紹介がなされ、最後の一人、トキーエの番になった。エトワール隊長が、一呼吸おいてから紹介を読み上げた。

「衛兵隊第三中隊所属、トキーエ・ギアムデン。ナロフの警備隊から我がサンテルマイン衛兵隊に所属になった。ナロフ警備隊主催の武闘大会において、出場六回のうち、剣術部門優勝四回という、輝かしい成績を上げている。」

トキーエが礼をする。衛兵隊の兵士たちは、鋭い目をトキーエに向けている。しかしその場は何もなく、緊迫した空気だけを残し、紹介は終了した。手短な朝礼が終わり、エトワール隊長がトキーエを呼び付け、小声でつぶやいた。

「・・・あれから本当に何こともなかったか？」

その心配げな隊長の声に、トキーエは明るく答えた。

「ええ、何も。どうぞ御心配なく。」

隊長は、トキーエの微笑みが語るものを、計り知ることはできな

かった。そのあまりにも柔らかな瞳に、それに裏があるとは何も予想がつかないのだ。トキーエの口からそれが漏れ出ない以上、誰も彼の心の内は分からないだろう。どこまでも、底がない男・・・隊長はトキーエに対して、そう感じていた。

そうして顔見せも終わり、部屋へと戻るトキーエを、ワイルダーを中心とした兵士の一団が取り巻いた。ワイルダーはじろりとトキーエを見ている。

トキーエはそんなワイルダーを見上げ、清々と会釈して返した。

「お早うございますパッセ補佐官、昨日はご指導ありがとうございました。」

「・・・クリオはどうした。」

「はい、ノーラン補佐官は第三中隊長へ、本日の命令の受領に行かれています。」

トキーエはさらりと答えた。ワイルダーはうなずき、低い声で続ける。

「昨日は御苦労だったな。よくやってくれたものだ。」

「恐れ入ります。」

「俺の差し向けた『手伝い』は、いらなかったようだな。」

トキーエもうなずいて答える。

「はい。新入りの仕事を、先輩たちに手伝っていただくわけには参りませんので、丁重にお断りいたしました。」

ワイルダーはにやりと笑った。

「・・・丁重、か。」

トキーエも、そつと微笑みを浮かべた。

「はい、丁重に。」

ワイルダーの後に控える取り巻きの連中は、みなトキーエにしてやられた者たちだった。昨日の三人の兵士や、サンテルマインの城門でトキーエを襲ったであろう兵士が、こぞつてその場にいる。その誰もが、トキーエを悔しげに睨んでいる。だが、その場で掴み掛かってきそうな気配はない。

「・・・礼を言うぞトキーエ。」

ワイルダーは静かに言った。

「一介の兵士とは言え、こいつらとて練達の剣士。それらを軽くいなして帰すなど、並の腕ではできぬこと。俺がおまえを試したわけではないが、こいつらが束になってもかなわないとなれば、俺もおまえの腕を認めぬわけにはいかぬ。俺の部下に、ひとつの怪我也負わせなかったことに感謝する。」

「恐れ入ります。」

トキーエは礼をする。ワイルダーはさらに続けた。

「だが、俺は双剣術などという異端の剣術を認めるつもりはない。いずれ必ずおまえを負かしてやる、その時を楽しみに、今は退くことにしよう。覚えておけよ。」

「承知いたしました。」

ワイルダーはマントをひるがえして立ち去ろうとする。その間際、

静かにつぶやいた。

「・・・今後、おまえに手出しはせん。少なくとも、俺の部下にはさせん。逆に叩きのめされるのが落ちだからな。なかなか手慣れた様子だったようだが、皿洗いももうしなくていいぞ。」

「御配慮ありがとうございます。」

ワイルダーの取り巻きたちは、トキーエを振り返りながら去っていく。トキーエはしばしその場にとどまって、その後ろ姿たちが消えるのを、じっと見守っていた。

そしてそれ以後、トキーエに対する兵士の嫌がらせは目に見えて減った。衛兵隊で勤務し日々を過ごすにつれて、トキーエは次第に皆の理解を得るようになった。トキーエ自身を認める者たちが増えたことで、聞こえよがしに嫌味を言う輩も減り、それなりに充実した衛兵隊での生活を送れるようになったトキーエだった。

最前線へ

平和はいつの世も、願うばかりでは手に入ることはない。日を追うごとに激化していた戦の火の手が、ついにサンテルマインの領土に伸びる気配が見えてきた。

サンテルマインの王、ファデユスⅡオリエッティⅡサンテルマイン七世は緊急に、サンテルマイン軍と衛兵隊を招集し、敵方を迎え撃つ旨を決定した。王宮において王を守る役目をおびた精鋭中の精鋭、王宮騎士もそれに出陣することになり、サンテルマインは俄かに慌ただしくなっていた。

エトワール衛兵隊長はただちに衛兵隊全兵士を招集し、サンテルマイン軍と衛兵隊の諸々の長と緊急の会議を開いた。その会議の間通常の兵たちは、集会議場で息を潜めて成り行きを見守っていた。

「・・・トキーエ、いよいよ戦かな。」

トキーエと共に新入りとして入った兵士、ブリックスが小声でつぶやいた。

「敵国はゼランだっけ・・・あのハルン・ホート共和国も陥落させた軍事大国だろ・・・俺たち勝てるかな・・・」

ブリックスは、衛兵隊の試験を通過した割には気の弱い男だった。トキーエはブリックスを見つめ、うなずいて見せる。

「私たちは生き残らなければならない。それが勝つことに繋がるように、ね。しないうちから勝敗を心で決めてしまうのはやめよう。」
「自信家だなトキーエは。」

脇にいた別の先輩兵士、オールが嘲笑気味に言う。

「自分だけは生き残れるって顔してるぜ。さすがに双剣術者の言うことは違うよな。」

「オール先輩、や、やめて下さい、トキーエはそんなつもりは……」

ブリックスがおどおどしながらトキーエをかばう。だがオールはにやつきながらブリックスを指差した。

「へ、そうやってられるのも今のうちだぜ。戦になつてみる、みんな自分のことだけ考えて、他の奴なんかかばってられない現実に気付くのだ。自分の身を守るために他の奴を盾にするんだ、特に、盾を持たないトキーエ、おまえなんかがいちばん、そうやるんじゃないのか？格好つけても、所詮戦なんてそんなもんなんだぜ、生きる奴の勝ちさ。」

トキーエを指差して笑うオール。

ブリックスはオールとトキーエの間で、二人の顔をせわしく見比べてびくびくとする。トキーエはしばらく黙っていたが、不意に顔を上げたかと思うと、これまで誰も見たことのない、鋭い瞳をもつてオールを睨んだ。

「……仲間を盾にするくらいなら、私は潔く刃の前に身を差し出す方を選びます！」

強い口調に驚き、オールは息が止まる。

「仲間を助け、助けられてこそ、我等のような集団が機能する。たとえ辛い戦の中で極限状態におかれたとしても、同志を^{いたわ}る気持ち

を失った。ただの獣と同様。私たちは剣士でなければならない、
乱戦においては尚更のこと。その気概と誇りがなければ、私はす
でにここにはおりません。」

いつにない、厳しい口調の反論であった。

柔らかな笑みを浮かべるのが常であったトキーエが、衛兵隊で初
めて見せた顔だった。ブリックスはもちろんオールも、啞然としてそ
れを聞いた。オールは、トキーエに反論されるなど予想外であった
ため、急にそわそわして逃げるように離れていった。

ブリックスはトキーエの横顔を眺めながら、怖々声をかける。

「……トキーエ……」

ブリックスの声に、トキーエはそのまま静かに答える。

「……盾を持とう、盾に頼ろうと思ったことはない……私は双
剣術者だ、一度だって……この双剣を『盾』だと思ったことはな
いんだ……」

そうつぶやくトキーエは、うつすらと哀しみを宿した顔をしてい
た。

確かに双剣術は、剣を盾と同様に、防御するために扱うことを要
求される。しかし剣を『盾』として使うことはありえないことだっ
た。剣はあくまでも剣であり、それを防御のためのみに使った時点
で、双剣術としての意味はすべて消え失せてしまう。

初めて見たその横顔に、ブリックスは胸が締め付けられる思いだ
った。誰もが忌み嫌う双剣術とはいえ、トキーエはそれを心から敬
愛しているのだ。誇り高い剣士としての気概は誰もが持つもの、双
剣術者であるがゆえに、トキーエは誰よりもその気持が強いのだ
ろう。控え目に、だが心の内では凜として、双剣術の素晴らしさを

信じているトキーエ。ブリックスは、自然とトキーエの手を取っていた。

「トキーエ、頑張ろう。何があっても、俺たちは生き残る。助け合って、生き残るんだ。そして帰ってきて、一緒に葡萄酒を飲もう。みんなで飲もう。だから、だから・・・」

しどろもどろになりながら、必死に言葉を探すブリックス。トキーエは、その下手な言葉の中に、すでにブリックスの暖かな気持ちを見出だしていた。

「・・・そうだね、一緒に飲もう。それを楽しみに、生き残ろう。」
「そうだよトキーエ、一緒に、帰ってくるんだ。」

そしてその日、衛兵隊の第五中隊までのうち、トキーエの所属する第三中隊までが、国境付近の前線へ配備されることに決定した。

・・・

広大な領土を持つ東の大陸一の大国、サンテルマイン王国。そして隣接する西の大陸でも有数の軍事大国、ゼラン王国。過去幾度となく繰り返された戦史上において、この二つの大国は常に対極に位置していた。

サンテルマインはいかなる争いも、話し合いからはじめることを常としている。サンテルマインの当時の王、タールアランⅡオリエツティⅡサンテルマイン二世から、現国王ファデユスⅡオリエツティⅡサンテルマイン七世まで、脈々と引き継がれてきた国の信条である。

初代サンテルマイン一世の頃、統治国家というものは数えるほど

しかなく、『王』という存在そのものが、手探りの状態で掲げられた不安定なものでしかなかった。領土を拡大するために戦に次ぐ戦を経た西の大陸とは違い、サンテルマイン王国は他国と協同し、和解しながら、現在の地位を得たのだ。サンテルマイン一世は息子であるタールアラン王子、後のサンテルマイン二世に、戦の前に対話をせよと、厳しく教えこんだという。サンテルマイン二世はその教えを忠実に守り、後の子孫に伝えた。それが現在まで守られ続けているのである。だからこそサンテルマインはただの大国ではなく、他の国々と協同し、助け合うことを常とした平和国家となったのだ。

だがゼランはそうではなかった。東の大陸サンテルマイン王国が、平和を持って領土を拡大したのとは正反対に、ゼラン王国は強力な軍事力によって他国を押し退け、平伏させ、領土を獲得していったのである。話し合いによる解決などに頼るくらいなら、早々に敵の首をはねることが一番の近道だというのが、最も一般的なやり方として定着しているのである。

そうした荒々しい戦で、世界統一を最大の目標として掲げたゼランにとって、東のサンテルマイン王国は目の上の瘤である。まるで正反対の国家気質であること以外は、サンテルマインとゼランはほぼ同等の国力を持っている。世界統一を成し遂げるには、意地でもサンテルマインを陥落させなければならないのだ。がしかし、ゼランがいくら国民に重税を架し、軍備増強に努めても、それをしたこともないサンテルマインとは亀甲したまま、いつまでも両国の力は平行線を辿るのだ。

なぜか。

それは、ゼランにはありえないものがサンテルマインにあるからだ。

サンテルマインの傘下にある東の国々が、いざ戦となった時、サンテルマイン軍の兵となつて戦に賛同する、協同態勢が敷かれているのだ。大国サンテルマインの兵に加えて、東の大陸のほぼ全域から、それぞれの兵士が終結するのである。いくら軍備を増やしても、結局剣と弓、槍での戦にしかり得ない以上、装備よりも人員が、戦の勝敗の鍵を握るのである。他国と協同することなど、ゼランには逆立ちをしてもできないことだ。

ヤーバ二砦の大戦から長期戦覚悟の戦を続けてきた両国の、微妙な一線で保たれていた均衡が崩れた今、再び大いなる戦の火の手が、サンテルマインの領土を覆おうとしていた。

ゼラン軍は、すでに東の大陸に入り、サンテルマインへ向けて南下しているという。その情報を得てサンテルマイン衛兵隊がそこへ辿り着くと、ゼラン軍の先行部隊が、ある小さな村を襲撃している真つ直中に出くわした。

サンテルマイン衛兵隊は斥候として三中隊から、二中隊、一中隊と順に進軍していたので、第三中隊はその衝撃的な場面に突然出くわす羽目になった。燃える家屋、男女の判別のつかない死体、血で汚れた壁……

「見張りの兵を残して、全員突撃！村人を助けるのだ！！」

第三中隊長が斬るように叫ぶと、三中隊の兵は一斉に、燃え盛る村へと飛び込んでいった。もちろん、トキーエとブリックスもだ。見張りを置くこともなく、暴挙の限りを尽くそうとしていたゼラン兵は、サンテルマイン衛兵隊の急襲にさほど驚く様子はなかった。村人に突き立てていた剣を引き抜き、荒々しい叫び声を上げながら躍りかかってくる。

トキーエはそこではじめて、自分から先に双剣の柄に手をかけた。目の前で、ゼラン兵の剣に貫かれようとしている女の顔が、故郷のナロフの母の面影と重なる……

「やめるーっ!!」

通常の剣士よりも短めのその剣を抜き放つと、トキーエの表情は見る間に厳しく、険しくなる。普通の重い兜を被らず、目を保護するだけの単純な簡易兜を付けたトキーエは、その厳しいまなざしが隠れると同時に、羽が生えたかのように、軽やかに剣を踊らせはじめる。彼が剣を一閃させると、面白いほど敵方の血が弾け飛び、次々と首が転がった。

「す、凄い、あれが……双剣術……!!」

度肝を抜かれて思わずうめく同僚の衛兵隊兵士。

血煙の中を踊るようにして立ち回るトキーエは、その身に戦の神を宿したかと思われるほど、的確な一撃必殺の剣捌きを見せる。そして猛る闘神トキーエの姿を目にしたゼランの兵士もまた、同じように仰天していた。

「あれは双剣術!とつくの昔に息絶えたはずの剣術が、なぜ今頃になって……!?!」

動揺を隠せない様子で、ゼラン軍は少しずつ退く気配を見せる。

「退けっ、この数では太刀打ちできん、退けえっ!!」

「勝負はあずけたぞサントルマイン!!」

脱兎のごとく駆け出し逃げ去るゼラン兵の捨て台詞は、燃え盛る

家屋の轟音にかきけされて消えた。

第三中隊長はゼラン兵の撤退を確認すると、三中隊全員に、村の火事の消火を命じた。近くの溜め池から水を組み、手桶に掲げて消火作業にあたる。しかしどれほど手を尽くそうとも火の勢いは衰えることがなく、すでに手遅れであることは誰の眼にも明らかだった。中隊長はやむなく作業の中止を宣言し、兵士たちは呆然として、燃え上がる家屋を眺めるしかなかった。トキーエは最後まで手桶を手水に水を汲むのに懸命だったが、ほどなく、その手も止めざるを得なかった。

「うわああ、コリン、コリンーッ!!」

女が泣き叫ぶ声が聞こえる。家の中に残っていたであろう子供の名を、割れんばかりに呼び続ける。その女のそばには、大量の血に埋もれた死体が転がっている。その指に嵌めた指輪は、女のものと同じものだ。夫を亡くし、今子供をも失おうとしている、女。

そんな光景が、村のあちこちで繰り返される。辺り一面から、泣き叫ぶ声がする。

子供は泣き、女は髪を振り乱し、老人が震えて立ち尽くす。

「・・・見ておけ、皆の者。」

中隊長がつぶやく。

「これが、戦だ。」

トキーエも、他の兵士も、皆が唇を噛み締めた。どうにもできない。

こうなってしまうては、誰にも、何もできることなど残されてい

ないのだ。

「我々はこの哀しみを、誰に与えることも許されない。哀しみを心に刻む前に、それを払い除けなければならぬのだ。ゼランの進軍を、村や街に決して及ばせてはならぬ。心しておけ。」

「はっ！！」

兵士たちの声は、決意に満ちていた。いつ終わるとも知れない戦いに突入した今、それはいつにも増して強い声であった。

バートラスタ攻略 思惑

それから一月の間、北部地帯を中心にした些細な小競り合いが、幾度となく繰り返された。それはサントルマイン側の意図的な計略によるものであった。

海を渡って東へ侵略してくるゼランにとって、食料やその他消耗品はすべて、自国の補給船を待つか、現地調達で間に合わせるかのどちらかしかない。サントルマイン北部地域に村は数える程度しかなく、また農作業にはあまり適さない地域であるため、食料の調達は、南下する以外は困難を極める。北部地帯はささやかな鉱山地帯が点在するだけで、それらは開戦と同時に閉鎖され重い鉄扉で遮断されるため、そこへ逃げ込むこともできないのだ。

ゼランの補給船は、東の大陸に到着するまでゆうに二週間以上を費やす。街も村もない場所で、小さな戦を何度も繰り返して時間を稼げば、必然的に食料を浪費することになり、最終的にゼランは干ばしになってしまうのだ。

だが、戦はそう甘いものではない。以前からこの方法が取られてきたものの、戦の長期化はどうしても避けられないのだ。海路を絶つ方法がない以上、時間はかかっても、補給船は何度でもやってくる。北部地域唯一の港バートラスタ港は、その拠点になっているのである。

ではなぜその拠点を急襲しないのか。

・・・

サントルマイン軍と合流し、北部へ向かう本道付近で待機する、サントルマイン衛兵隊。その衛兵隊の待機区のテントで、対策会議

が行われていた。その間、兵士たちは緊張しながら指示を待っている。

「大丈夫かいブリックス、だいぶ血が滲んでる、包帯を取り換えようか。」

「平気だよ、掠り傷だから。ゼランが酔っ払ってくれてたから助かったよ。」

ブリックスは腕の包帯をなでながら微笑んだ。

「・・・トキーエ、戦が長引くのって、嫌だな・・・」

「過去の大戦は大抵十年以上も続いてる長期戦だからね・・・でも、港を押さえれば補給路を絶つことができるんだろう？」

「無理だよ、トキーエだって知ってるだろ、バートラスタがどんな所か。」

トキーエはゆっくりうなずいた。

バートラスタ、それは大きな港を抱えた街。

だがそこはサンテルマインですら近寄ることのできない、東の大陸では名の知れた無法地帯なのだ。

かつて幾多のサンテルマインの戦士団がバートラスタへ話し合いに向かったが、それら戦士たちの消息は、バートラスタでぶつりと切れてしまうのだ。そんなことが続いたせいで、サンテルマインはバートラスタとの交流を断絶している状態にある。それが、およそ数十年前の話だ。

「交流がないとはいえ、今バートラスタを仕切っている三兄妹の噂は、サンテルマインでも有名だな。あの港に入った余所者は生きて帰ってきたことがない。サンテルマインと和解することよりも、勝

手気ままな利益主義の自由貿易の方が魅力らしい。」

「ノーラン補佐官！」

いつのまに会議が終わったのか、クリオがトキーエの脇でつぶやいた。

「我々もその方法を考えないわけではないんだ。でも前例が前例だけに、どうしても一歩踏み切れない。今ここで貴重な兵力を殺ぐわけにはいかないしな。我々の目的はゼラン討伐、バートラスタ攻略ではないんだ。」

「でも、バートラスタを何とかできれば、ゼランの侵攻を食い止めることはできるでしょう。」

「それはもちろんだが、話し合いに応じるような相手じゃない。街全体が敵となることを考えたら、中隊単位では歯が立たんだろう。」

トキーエは少し考え、クリオに言った。

「ノーラン補佐官、私をバートラスタへ行かせていただけないでしょうか。」

「何だって!？」

ギョツとして身を引くブリックス。

クリオも目を丸くしてトキーエを見た。

「馬鹿な、無茶を言うもんじゃないぞトキーエ!いくらおまえでもあの街に入ったら殺されてしまう!」

「そ、そうだよトキーエ、そんなの自殺行為だよ!」

二人は早口でまくしたてた。トキーエはその言葉を一通り聞くと、ゆっくりとつぶやいた。

「私の師、エダル」ジャスター二は、バートラスタに親族がいるとおっしゃっていました。その方を訪ねてみれば、何かいい方法が見付かるかもしれません。」

「しかし・・・そんな賭けを、独りで・・・」

「戦は人々をしあわせにできません、いくらでも早く終わらせることができるなら、喜んでバートラスタへ参ります。」

クリオは腕を組んで考えたが、ふと顔を上げ、会議のテントへもう一度戻っていった。それぞれの長があわただしく集まり、そこからまた長い会議が始まった。

半日も続いただろうか。テントの中は始終騒々しい気配であふれていたが、ようやく静かになった。笑顔のクリオが出てきて、その後第三中隊長が続いて出る。

「トキーエ。」

中隊長がトキーエを呼ぶ。トキーエはすぐさま駆け付け、かしこまった。黙ったままの中隊長の隣で、クリオが力強く言った。

「お許しが出たぞトキーエ！おまえと一緒に、俺もバートラスタへ行くぜ。」

「ノーラン補佐官が？」

クリオはうなずき、中隊長もクリオの肩を叩く。

「うむ・・・大事な部下をたった一人でバートラスタへ行かせるよな、無謀なことではできない。かといって私が戦場を離れるわけにもいかぬ。決心のいることだが、ノーラン補佐官に私の代わりを頼むことにしたのだ。」

「今のバートラスタには、ゼランの兵士もつようよしてるはずだ。万が一の時、ひとりだけでも生きていれば、我が軍も動きようがあるだろう。」

するとそこへ割り込むように、ワイルダーがやってきた。そばには第二中隊長も立っている。ワイルダーはクリオを見た。

「その話、俺ものったぜクリオ。」

「ワイリー……!」

クリオが驚きの表情でワイルダーを見つめた。

第二中隊長が、第三中隊長にうなずいて見せる。

「同じ衛兵隊にいて、三中隊だけに重責をおわせるわけにはいかん。一中隊は戦の要だから動けないが、二中隊はその点自由がきく。ワイルダーもぜひ行きたいと言うのでな。バートラスタさえ何とかできれば、戦局は大きく変わる……頼んだぞ。」

ワイルダーはうなずき、トキーエを見据える。その視線が持つ不自然さを微妙に感じとったのは、クリオと、そしてブリックスだけだった。ブリックスはトキーエの側で、その横顔を心配そうに見つめている。トキーエはブリックスの不安げな顔に気が付くと、微笑みを浮かべた。

「後は頼むよブリックス、一緒に葡萄酒を飲む約束、私は忘れてないからね。きつと帰ってくるから、気長に待っていてくれ。」

「……トキーエ……」

ブリックスはそれ以上、何も言えずにうつむいてしまった。ワイルダーとクリオはすでにテントに戻り、荷物の準備に取り掛かった。

トキーエは、うつむくブリックスへ、最後にもう一度微笑みを投げ掛け、自分のテントへと戻っていった。

・・・

北部地域は大いなるゴペル二山脈から流れ出る、清々しくかつ荒々しい川、カラツカ川によって、三つの地域に分断されている。その三つの地域を越えた大陸の北西部に、バートラスタの街がある。バートラスタは北部地域の中で当然のごとく孤立しており、近隣の街や村はバートラスタの名を聞くことも恐れるという。バートラスタの主とされる三人の兄妹は、この世ならざる力をもって、街を統率しているとも噂されるが、真実かどうかは定かではない。

「あれがバートラスタの城門だ。」

およそ七日を費やして敵方の前線をすり抜け、バートラスタを臨む地域に立った三人は、兵士を思わせる重厚な鎧やマントの代わりに、軽鎧に短めのローブという旅人の出で立ちで佇んでいた。小高い丘の上、青く美しい海の手前に小さな街が見え、街のさらに手前には、頑丈そうな大門が聳えている。

クリオの指差した方向を見て、ワイルダーが鼻を鳴らした。

「ふん、たかが街風情が城門とは、お偉いこつて。」

トキーエは黙って、バートラスタを眺めている。ワイルダーはじろりとトキーエを見た。

「双剣術の師の親族が、悪名高いバートラスタに住んでいるとは、何とも滑稽だな、トキーエ。」

「ワイリー！」

クリオがワイルダーを睨み付けた。トキーエはそんな嫌味も聞こえないかのように、街を見下ろしたままでうなずいた。

「・・・ジャスター二一族があゝの街で何をしているのか、私もずっと気になっていました。そのことに関しては、師は何も教えてくれませんでしたから・・・」

「ほう、今の自分の立場を利用したってわけか。」

「やめないかワイリー！進んで斥候になったんなら、それなりの態度で臨んだらどうだ、余計な争いを起こすのはやめろ！」

トキーエは二人が睨みあうのを見て、そつと顔を逸らした。そして再び街を見下ろし、息を整える。

「・・・それでは、行つて参ります。」

クリオとワイルダーがハツとして口論を止める。

「ノーラン補佐官、パッセ補佐官、お二人はここにいて下さい。補佐官にもしものことがあったら、衛兵隊の士気に差し支えます。」

トキーエの冷静なその一言を聞くや、ワイルダーは勢いよくトキーエの胸ぐらを掴み、怒鳴りかかった。

「おまえに心配してもらうほど落魄れちゃいねえ！いい気になるなよトキーエ、何でもかんでもひとりで解決できると思つてんじゃねえぞ！！」

トキーエは胸元を締め上げられながら、ワイルダーの目を刺すようにじつと見つめた。

「・・・バートラスタの常識をご存じですか。」

「何イ・・・」

「余所者は金蔓。金のある奴だけ生かして、搾り取ったら殺せ。力のある奴には取り入れ。寝首をかけ、奪えるものは奪え・・・」

緩んだワイルダーの手をそっとほどこき、胸元を整えながらトキーエはつぶやき続けた。

「お二人は生粋の剣士、その実力も素晴らしい。でもそれは、この街では通用しないでしょう。お二人の剣技は、剣士としてあまりにも純粹だからです。」

「・・・どういう意味だ。」

「卑怯な畏に対しての対抗手段がないということです。お二人とも、剣士以外の人間と闘ったことがありますか？」

クリオとワイルダーは目を見合わせる。クリオもワイルダーも剣術の名家出身で、幼い頃から習練といえば、ちゃんとした規則に乗った対戦が常であった。そんな二人にとって剣士以外の人間と闘うなど、ありえないことである。

「その経験がまるでないあなたがあの街に入れば、為す術もなく倒されてしまうでしょう。サンテルマインの戦士団があの街で全滅したのは、そのためです。」

「この・・・馬鹿にするなっ！！」

カツとなったワイルダーの拳が唸りを上げてトキーエに飛ぶ。

トキーエは軽くその拳をかわすと、するりと身を滑らせてワイルダーの懐深くに飛び込む。ワイルダーがハッと目を見張った時には、これまでに見たこともないような厳しい目をしたトキーエが眼前に

立っていた。トキーエは目の前で息を飲むワイルダーに、さらに鋭い言葉を突き刺した。

「パッセ補佐官。あなたはもっと冷静な方だと思っていましたけどね。そんなことでは街に入っても、一時間と生き残れませんよ。」

ワイルダーはぐっとうめいて拳を引く。

「知ったような口を聞くじゃないか、貴様なら大丈夫だとも言うのか、剣士以外の人間と闘ったことがある貴様なら!!」

トキーエはワイルダーを睨んだまま、はつきりと言った。

「ええ、そうです。私はあの街で、修行をしたのですから。」

「何・・・だと!？」

「あの街に入って、生きて出てきたというのか・・・!？」

トキーエはくると振り返り、荷物を持って歩き出す。

クリオとワイルダーが言葉も出せずに立ち尽くす中で、トキーエは振り向かずにつぶやいた。

「・・・ここにいて下さい、必ず戻ります。」

トキーエの姿が遠くなる。

ワイルダーもクリオも、言葉がない。トキーエの鋭い目が、二人をその場に釘付けにしていた。トキーエの言葉に勝る力量を、ワイルダーもクリオも持ち合わせていない、その変えられない事実が、

重く二人を押し付けた。

戦場がない『実戦』とは何か。それを今、痛切に問い掛けられている。

『バートラスタで双剣術の修行？・・・なぜあんな場所で・・・』

ワイルダーは遠ざかっていくトキーエの背中を見ながら言った。

「クリオ、行くぞ。」

その言葉はクリオも、舌の先まで出かかっていた。二人はトキーエの背中を追って、駆け出す。その後の二人に言葉はなかった。そして、驚きをもって二人へ振り返ったトキーエも、もう何も言わなかった。

まなざしは三つ、遠くバートラスタへと向いている。

バートラスタ攻略 ファーマレイの家

双剣術の祖、グラヴァスⅡファーマレイとルーディⅡジャスター
二は、戦場において、掛け替えのない友情を培った。故郷の違う二人ではあったが、お互いに何日もかけてその間を行き来し、酒盃を酌み交わしていたという。

ジャスター二家は大陸の南西、アントバレルという小さな村にた
たずんでいた。そしてファーマレイ家は大陸の最北端、港を抱えた
バートラスタに居を構えていた。

・・・

「開門願います！」

トキーエの声が、静かな城門を前に響き渡る。

城門は重厚で、蝶番いはかなり以前から動かされた気配がない。
ワイルダーは腕組みをしたまま、無駄だとも言いたげにトキーエ
を見ている。だがしばらくすると、城門の横の、小さな通用口の覗
き窓がぱたんと開いた。

「・・・何か用か？」

トキーエは目だけ覗かせている相手を、じっと見据えた。

「門を、開けていただけませんか。」

トキーエが笑みを浮かべた。門番はその顔を見た途端、慌てて通
用口の覗き窓を閉めてしまった。そしてしばらくし、錠前を外す大

きな音が聞こえた後、小さな通用口がゆっくりと開かれていった。

「・・・入れ。」

扉だけが、そうつぶやいた。

ほっとした顔で、クリオが一步踏み込もうとする。だがトキーエが素早くそれを制し、何も言わずに軽やかに通用口に飛び込んだ。

「トキーエ!？」

鋭い短剣を握り締めたトキーエは、通用口から飛び込みざまに、素早く手を交差させた。光の軌跡が一瞬の閃きとなってクリオの眼に飛び込む。

「ぐわっ!」

薄暗がりには消えるトキーエ。ワイルダーとクリオも慌てて中へ飛び込む。

「これは・・・!」

暗がりの地面には、手首から血を流しながら二人の男がのたうち回っていた。手にしていたであろう手斧は地面に刺さっている。

「手の筋を切りましたから、当分何も持てないでしょう。参りましたよ。」

何もなかったかのように、さらりと言つてのけるトキーエ。恨みがましい目で、一人の男がトキーエを睨んだ。

「くそお・・・てめえ、よくもやりやがったな!!」

ワイルダーとクリオが見守る中、トキーエは静かに答える。

「・・・お互い様でしょう、そうしなければ私たちがやられますから。」

「今度会ったらブツ殺してやる!」

「それはこちらの台詞です。今度会ったら手の筋だけじゃすみませんよ。覚悟するんですね。」

ぐつとつめて血の気が引く男。トキーエはクリオとワイルダーを連れて、街へと入っていった。

「ああいう小さい通用口を通る時は気をつけて下さい。不意を突こうとみんな隙を伺っていますから。それと、迂闊に腰の剣を抜かないことです。」

「剣を?」

「特殊な決闘は別ですが、それ以外で剣を抜くと、その場にいる者全員を敵に回すことになります。短剣を持つのはその意志がなくて、一対一の勝負を決する時のみのものと判断されるんです。覚えていてください。」

「・・・短剣か・・・」

「不慣れですか?」

「訓練ではよく使っていたが最近はずがにな・・・いつも長剣でしか闘ったことがなかったから・・・」

「それでしたら、私の後ろにいて大きく構えていて下さい。街の間は短剣の扱いに非常に長けていますから、慣れない武器を扱っても勝機は望めません。女性にも油断なさいでくださいね。」

・・・

バートラスタが大きな港をかかえ、たくさんの国々と行き来するようになると、あるひとつの問題が生じ出した。商売に関する取引の『縄張り』ができ、それをめぐって異国の者同士の争いが激増したのである。

バートラスタの悪辣な商人は最初、いい品物を手に入れる手段として、そういつたいざこざは大歓迎であつた。時々、共倒れした商人の荷物を、丸ごとそっくり奪い取ることもできたからだ。

しかしそれが日に日に激化するにつれ、買取り主の商人にもその争いの火の粉が降り注ぎ始めたのだ。それでも「バートラスタでの商売は金になる」と、命懸けで商売をする商人たちが大挙してバートラスタへ押し掛けた。争いは一層深刻になり、解決は不可能とさえ言われた。街全体の商売を取り仕切ることのできる『実力者』が、バートラスタにいなかったことが、その大きな原因のひとつであつた。

その現状に付け入って、過去バートラスタはたくさんの『主』によつて支配されてきた。時には力ある宗教家、時には血生臭い鬼畜剣士、時には美麗の女呪術師。時の流れに沿って、世代交代は目まぐるしく行われ、権力争いは、商売の『縄張り争い』よりも激しく、どろどろと陰湿に過激さを増していった。

そして数年前のある時、バートラスタに来訪したある商人が、あつという間にバートラスタの全商売、全取引の実権を手にした。その時期から、バートラスタでの商売に『規律』が生まれ、商人たちはそれにのつとつた商売をしなければ、その街では生きていけなくなつてしまったのだ。

主に収まつた商人には弟と妹があり、商売に関する事柄で、その『規律』に反した者を罰する役を持っていた。二人とも、荒くれ船乗りの首を一撃で切り飛ばす剣の手練れとして、街の者たちを震え

上がらせた。反抗したすべての剣士や船乗りは、二人の刃の前に無残に切り刻まれたという。

主に君臨した商人の名はジャナッタ。ジャナッタ・ロンバルティ。弟がジャラフ、妹がジャスリー。凄腕の剣士二人の長男であるジャナッタとは、どんな男なのか。

...

トキーエの短剣が一閃する。黒いフードで顔を覆っていた女は、フードの紐を鮮やかに切られた。

「あつ・・・」

フードがさらりと落ちると、女は手にしていた長い針を投げ捨て、身を返して逃げ出そうとする。トキーエが素早く回り込んで女の手首を捻り上げると、女は痛みに小さな悲鳴を上げた。

「その針に塗っているのはしびれ薬のハヴアリエでしょう、匂いで分かる。あなたは『人売り』ですね。」

「人売り？」

ワイルダーが女を見る。栗色の髪の女は若く、薄汚れてはいるが鼻筋の通った美人であった。

三人が街角を曲がった途端、先頭を歩くトキーエに倒れるようにしなだれかかった、黒いフードをかぶった女。だがトキーエはその女を支えもせず、素早く手首を引っつかんでその身体を壁際に放り出した。

よろめいた女を支えようと慌てるクリオ、女性に乱暴するなど叫ぼうとしたワイルダー、二人は壁によりかかった女の手にしていたものを見て、身体が硬直する。白い手に握られた、鋭く長い針のきらめき・・・

腕を捻り上げられた女は金切り声で叫んだ。

「い、痛い、放してよ！あんなんかに喋ることは何もないよ！！」

「ジャスター二一族がこの街にしていると聞いてきたのです。私はジャスター二流の双剣術者、何か知っていることはありませんか。」

女はさらに目を丸くした。

「そ、双剣術・・・ジャスター二流って・・・あんだ・・・！」

「知っているんですね。少しでもいい、話してくれますか。」

女はしばらくうつむいていた。トキーエはそつと女の手を放し、微笑みかける。女はトキーエの後ろのワイルダーとクリオを見、次いでトキーエを睨みつけた。

「・・・ただ働きさせようって魂胆なら、あんならみんな貧民街へ連れ込んでなぶりものにしてやるよ！金も貰わずに、あたいが喋ることなんて何もないね！」

トキーエは、簡易兜で目を覆った。と同時に、瞬間に引き抜いた短剣を、素早く女の喉元にあてがった。女はぎょつとして立ちすくみ、顔色が青褪めていく。

「な、な・・・！！」

トキーエの低い声が響く。

「死にたいのならそれもいいでしょう。私は別にかまいませんし、情報源にも事欠きませんからね。たとえ貧民街に連れ込まれたとし

ても、私たちがそんな連中に遅れを取るとお思いですか？・・・私が双剣術者だと、教えてあげたばかりでしたのに・・・残念です。」

トキーエの短剣が女の喉の皮膚をなぞった。皮一枚、血の出ない薄さで喉をすべる短剣。刃先の鋭さは天下一品だ。

女は泣き声で悲鳴を上げた。

「ご、ごめんなさい、やめて！何でも言う、何でも言うから殺さないでえ！！」

トキーエはそれを聞くと、簡易兜をかちやりと外し、微笑みを浮かべて短剣をしまった。クリオもワイルダーも言葉もなく呆然としていた・・・こんなトキーエは始めてだ。

女は、トキーエに手首を握られたまま、聞きもしないことまで一気にまくしたてた。

バートラスタの主、ジャナッタ・ロンバルティの居場所から、ジヤナッタの次に権力を持つジャラフ、ジャスリーは残酷な性格で、日に一度は血を見ないと気がすまないということまで。そして肝心のジャスター二一族のことについて、女はこう語った。

「あんたの探してるのは、ハトリック・ジャスター二でしょ。あのじいさんは墓守りしてるの、本当よ！」

「墓守りを？・・・でも私が十五の頃にここに来た時は、墓守りなんて見かけたこともなかったのに・・・」

「街に死体が溜まりだすか、趣味の絵描きが一段落するまで、あのひとは家の中にこもりつきりなんだもの。でもハトリックじいさんを馬鹿にする奴はいないよ、だってあのひとも双剣術を使うからね。」

トキーエはそれを聞くと、嬉しそうにうなずいた。

「その家を御存じですか？」

「『ファーマレイ』の家を探すといいわ、玄関口の表札を見てけば見付かるはずよ。」

「ファーマレイの家……！」

トキーエの目が輝いた。ファーマレイ家とジャスター二家の変わらぬ友情が、今も続いている証拠ではないだろうか。

トキーエは女の手首を離して、金貨を一枚投げてやった。

「ありがとう、お礼です。くれぐれも、お気をつけて。」

女は金貨の輝きに喜ぶ前に、その言葉の裏に隠された恐ろしさを感じとり、背筋がぞつとした。

『広言したらどうなるか、分かっていますね。』

トキーエの優しい口調の中に、その鋭い思惑が表れている。女は後退りながら、小さく礼を言う。

「じゃ……、じゃあもらってくわ、気を……つけて……」

脱兎のごとく逃げ去っていく女。トキーエはその後ろ姿に微笑んだ。

「……トキーエ、人売りとは一体……」

「見栄えのいい男女をさらって、異国へ売り飛ばす商売ですよ。さつきの針に浸ってあったのはハヴアリエという強い麻痺毒で、あれにやられると一昼夜動くことができません。」

「あんな若い女が、その人さらいをやるのか……何て街だこは……」

「行きましょう、ファーマレイの家へ。」

バートラスタ攻略 双剣術者ハトリック

バートラスタの中央通りは、何とも寂れた様子であった。とてもここが商売の街とは思えないほど閑散としている。難癖をつけてくる与太者や船乗りたちを蹴散らしながら、三人はファーマレイの家を探す。

ワイルダーもクリオも、トキーエの言ったことがようやく分かったようだった。街人は小奇麗な身なりの三人を見ると目をぎらつかせて、因縁をつける隙をうかがっているのである。それは男はおろか女や老人、少年に至るまでに及び、まるで挨拶のような、日常茶飯事の行為であった。年端もいかぬ少年少女のすり、凄みをきかす船乗り崩れの与太者。無法地帯、犯罪の街に相応しく、人々は哀しいほど荒みきっていた。

ひとつだけ意外だったのは、思ったよりもゼラン兵が街中にいないことだった。うようにしていることを想像していたクリオとワイルダーは幾分ほっとした様子であった。唯一の補給路とはいえ、この無法地帯で長くとどまるのが決して良策ではないことを、ゼラン側も知っているのだろう。

余所者が街へ入るのは至難の技だが、街の住人がバートラスタから出るのは、特に制限されていないという。しかし、バートラスタで染み付いたすべてを隠し、他の平穏な街で生きていくことなど、バートラスタの住人には未来永劫無理なことなのだろう。街を出ていくとしても、大抵が山奥に一人暮らしか、放浪の旅をするかに偏っている。外に出て盗賊団を組んだという話も聞くが、それが長続きしたという話も聞かない。各々の利益が最優先である街の気質からして、組織を組むことなど、およそ向くはずがないのだ。

トキーエたちは中央通りから、港側に面した裏通りに入った。街の中央通りより、港の裏通りの方が街並みは数倍華やかであった。豪華な煉瓦造りの家が立ち並び、異国の彫像が玄関脇を飾っている。商人たちの邸宅であることは一目瞭然だ。

そんな中でも、ファーマレイの家はなかなか見付からない。

「かつがれたんじゃないか、トキーエ・・・」

ポツリと、ワイルダーが言う。ワイルダーの台詞から、段々と陰しさが取れていくのが分かる。クリオもつぶやいた。

「ここいらの家は豪華だな、サンテルマインでもこれだけの造りの家は滅多にないぞ。」

「確かに・・・でも、裏でどんな商売をしてるのか考えると、素直に褒めるわけにもいかんしな。さっきの人売りの件もあるし・・・」

角の生えた犬のような獣が鎖で繋がれ、番犬よろしく凄まじい勢いで吠えかかってくる。珍しい生き物がそこかしこで見られるのも、港のある街ならではの光景である。

「あつた!!!」

トキーエが不意に叫んだ。

ワイルダーとクリオが駆け寄ると、玄関先の表札に、確かに『ファーマレイ』と刻まれている。そこは港のいちばん端にある、小綺麗だが相当に古い家であった。

「行ってみましょう。」

トキーエは玄関のノッカーを叩いた。乾いた音が数回響く。

しかし家からは何の返答もなく、気配もない。

「留守かな。」

ワイルダーが扉の小窓を覗き、押し開こうとした。

トキーエはハツとして、ワイルダーを大きく突き飛ばした。突然のことによって態勢を崩すワイルダーは、トキーエを怒鳴りつけようと顔を上げかけたがその途端、小窓の隙間から無数の針が勢いよく飛び出すのが見えた！

針はしばらく行ったところで地面に落ち、乾いた金属音を響かせた。

「気をつけて、街の裕福な家には、盗賊やならず者よけの罠がちゃんと仕掛けてあるんです。普通の訪問以外の手段を使うと、痛い目にあいますよ。」

「・・・す、すまん、こんなところに仕掛けがあるとは・・・」

トキーエはもう一度ノツカーを叩いた。
すると、二階の窓と思しき場所から、嘎^{しわが}れた声が聞こえた。

「ファーマレイの家に何か用かね、不法な客人よ。」

ワイルダーが頭をかく。トキーエは窓に向かって言った。

「ハトリック嬢アスターニさんですか？」

「・・・どこで聞いたか知らんが、確かにわしがハトリックじゃ。」

「私は、トキーエ嬢アムデンと申します。エダル嬢アスターニ氏を御存じですか？」

声はふととぎれ、再び投げかけられる。

「エダル・・・おお、エダルはわしの敬愛する従兄弟のひとり、なぜエダルを知っておる、客人よ・・・」

「エダル」ジャスター二は私の『師』です。」

「！・・・な、何と・・・！」

「私は、ジャスター二流双剣術者です。」

突然、ばたんと戸を開け放つ音がしたかと思うと、階段を駆け降りるどたとた勢いのよい足音がする。さっき酷い目にあい損なつたワイルダーは、あわてて戸口から離れる。玄關の扉の仕掛けを外す音が聞こえ、扉は勢いよく開かれた。

「はじめましてハトリックさん。」

トキーエが清々と会釈したそこには、年老いた男が目を輝かせて立っていた。老人は長い白髪を後ろで束ね、皺の多さがその年齢を物語る。しかし眼光は鋭く、老人のそれとは思えぬほどに、深く澄んでいた。

「おお…貴殿が、我等がジャスター二流の継承者か・・・そ、その剣を見せてくれんか、その剣を・・・！！」

ハトリックは喜々として、トキーエの腰に下げた二振りの剣を指差した。トキーエがそれを引き抜いてハトリックに渡すと、ハトリックは柄の頭から刃の先までためつすがめつし、目に涙を浮かべて天を仰いだ。

「生きてまたこの剣に巡り合うとは・・・ああ、何という幸運、エダル・・・おまえの魂を感じるぞ、ああ感じるとも・・・！」

老人ハトリックは気がふれたかのようにそう言い続けた。

クリオとワイルダーは不信げな目を向ける。トキーエは、剣を抱き締めて涙を流すハトリックを静かに、そして哀しげな表情で見つめていた。

・・・

ファーマレイ家は没した。

大陸の者の大半はその事実すら知る由もない。しかし、そのことを誰よりも何よりも、世界でいちばん嘆き悲しんだのは、他ならぬジャスター二家であった。

ファーマレイの最期の人物が亡くなる時、ジャスター二家の者がその最期を看取った。最期のファーマレイ家の人物は、亡くなる直前、ジャスター二家の者の手を取って、ある言葉を残した。

『ファーマレイとジャスター二の友情よ、双剣術よ永遠なれ…』

・・・

「わしはファーマレイ家の最期を見届け、その意志を継いだ。残されたジャスター二家の者は、ファーマレイ家の墓を守り続けるのじや。ジャスター二家最期の日がくるまでな。」

「ジャスター二最期の日・・・」

ハトリックは自分を指差した。

「わしの命が尽きる時じゃよ。わしがジャスター二最期の者だからな。」

家の中に通された三人は、一階の広い応接室に腰を落ち着けてい

る。ハトリックの声は続く。

「ここにはな、ファーマレイ家のものだけじゃなくて、ジャスター二家の墓もあるんじゃない。わしはここを出ていけぬ、先祖の墓を守らねばならんからな。双剣術も、わしと共に墓の下に埋もれてしまうのだと思っていたのに・・・エダルめ、こんな素晴らしい『継承者』を育てていたとは、ありがたいことだ・・・」

「・・・私を、許して下さいるのですか？」

ワイルダーとクリオは顔を上げる。「許す」とはどういうことだろう。

トキーエの顔は哀しみに染まっている。ハトリックも、微笑みを浮かべてはいるが、どこか複雑な顔をしていた。

「・・・許すも何も・・・それが双剣術を教える者、また教わる者の不動の掟。特に貴殿が『継承者』ならなおさらのこと。なあに、エダルも本望じゃろう・・・」

しばらく、重い沈黙が降りた。

トキーエはその沈黙をゆつくりと破り、自分たちがバートラストへ来た本当の目的を語りはじめた。ハトリックはその一言一句をよく聞いていたが、話終りと同時に、小さくつぶやいた。

「・・・この街の体制を変えることなど出来やせんぞ。」

「でも、この港を押さえない限り、戦はいつまでも続いてしまう。戦の長期化はどうしても避けたいのです、どうか知恵をお貸しください。」

クリオが身を乗り出してハトリックを見る。ハトリックは腕を組んで黙ったままだ。

「どうかお願いします、体制を変えることができないとしても、せめてゼラン兵の補給路だけでも絶ちたいのです、ご助言をいただけませんか。」

ワイルダーも真剣なまなざしだ。トキーエは懇願の表情でハトリックを見ている。

するとハトリックはようやく、重い口を開いた。

「・・・ロンバルティ三兄妹のジャラフとジャスリーは、得体の知れぬ剣技を使う。またジャナツタ本人も、ただの商人ではないと聞く。・・・トキーエ殿、貴殿はそれに打ち勝つ自信がおりかな。」

トキーエはゆつくりと、だが自信を持ってうなずく。

ハトリックはトキーエの哀しみの浮く瞳を見つめ、ため息をついた。

「・・・可能性が、ないわけではない。」

クリオとワイルダーの顔がパツと輝いた。その表情を横目にしながら、ハトリックはただ淡々と続ける。

「ロンバルティ三兄妹の後釜を狙う者は、このバートラスタには大勢いる。中でも有力なのが、五隻の船の船主、アルベルトⅡシューデリじゃ。アルベルトは事あるごとにジャナツタと対立しておる。とはいえ、ジャラフとジャスリーの報復を恐れて、表立っては敵対していないがな。裏ではいつも、ジャナツタを蹴落とす方法を考えとるじゃろつ。」

ハトリックは冷茶をすすりながら続ける。

「アルベルトに会って、取引を持ち掛けなされ。ゼラン軍の船を締め出すことを条件に、ロンバルティ三兄妹を始末してやるとな。」

「始末・・・って・・・我等に人殺しをしるとおっしゃるのか！」

クリオが思わず立ち上がって叫んでいた。ワイルダーも驚きに目をしばたかせてそれに付け加える。

「我等は誇りあるサンテルマイン衛兵隊の兵士、戦場以外で人殺しなどはもってのほかです！」

ハトリックは黙っている。

そして、トキーエもまた、押し黙ったままだった。

だがやがてハトリックは、そつと首を振った。

「・・・戦場でなら人殺しを正当化できるという、あなた方のそういう考えは、我等平民にはまことに解せぬものじゃ。」

「!・・・」

「人殺しは人殺し、街だろうが戦場だろうが同じこと・・・でもそれをあなた方に問うことが筋違いだということも、わしは知っております。」

再び沈黙が応接室を覆った。

その沈黙を破ったのは、またしてもトキーエだった。

「私が取引に参りましょう。」

クリオは仰天し、トキーエを鋭く見た。

「馬鹿な、正気かトキーエ！人殺しは大罪だぞ、早まるな！」

「落ち着いて下さいノーラン補佐官、殺すことを前提にしての『取引』はしませんよ。」

「え？」

「彼等には彼等の裁きがあります。私はただの調停人になるだけです。」

トキーエは冷茶を一口飲み、息をついてから答える。

「どうか私に任せて下さい。今度は私ひとりで行って参ります。ハトリックさん、どうか補佐官たちをよろしく。」

「おお、任せておきなされ。幸運を祈っておるよトキーエ殿。」

ワイルダーもクリオも啞然とする。今会ったばかりのトキーエとハトリックの間に、目に見えぬ繋がりがあるかのようだ。ハトリックはそんな二人を見つめ、うなずいて見せた。その顔には、何も言わずにここにいと、書かれてあるかのようだ。そして、二人はその表情の前に、何の反論も返せなかった。

ハトリックはアルベルトの住む豪邸の位置をトキーエに教え、トキーエは速やかにファーマレイの家を後にした。

「あの子なら大丈夫、きつとうまくやるじやろう。お二方、すまんがこの家でしばらく寛いでくださいましな。」

ワイルダーはハトリックを睨むように見た。

「……我等では用が足らぬと、思いなのでしょうな。」

静かな嫌味の針に、ハトリックはにやりと笑った。しかし笑みの端には哀しみも浮かんでいる。

「・・・殺そうとして襲ってくる相手に手加減をしろと言われて、そう簡単にできますかな？・・・お二方ではまず無理でしょう。トキー工殿もそう感じておるのじゃろうて。大事な補佐官殿に傷を負わすまいとする部下の心情を、少しでもお察し下されませ。」

ワイルダーの次の言葉が発せられる前に、ハトリックは続ける。

「あの子は双剣術ジャスター二流の継承者。幾多の双剣術の猛者たちが潜り抜けてきた試練を、あの子は越えてきたのじゃ。それを思えば、この程度の試練など物の数ではない。」

「・・・試練？」

「そう、試練じゃよ。双剣術を駆る時は、人であってはならん。『継承者』ならばなおさらのこと。わしのごとき一介の双剣術者には及びもつかん試練が課せられるのじゃ。」

「どのような・・・」

嫌悪される剣術とはいえ、それを修得した時の強さは他の剣術の比ではない。双剣術を認めぬと断言したワイルダーでさえ、関心をもつてハトリックを見つめている。ハトリックは目を閉じ、うんうんとうなずく。自分も腰掛け、冷茶を二人のカップにつぎたしながら、ゆっくりと話し始めた。

「・・・よろしい、少しだけお話しして差し上げよう。貴殿らの剣術はたくさん流派があり、免許皆伝になれば、誰でもその流派の剣術を教えて良いということになっておったと思いますが・・・どうですか。」

「はい、確かにそうです。」

「双剣術には、『免許皆伝』という言葉はないのですじゃ。」

ハトリツクはひとつひとつ、思い出すようにつぶやいていく。

「双剣術を真に得ることができる者は『継承者』のみ。そして継承者は、たったひとりでなければならぬ。それはファーマレイ流もジャスター二流も同じ。双剣術に二つの流派があった時代、双剣術の継承者は常に二人おったということになります。」

「一子相伝、ということですか？」

「いやいや、必ずしも息子や親族でなくても良いのです、赤の他人といえど、双剣術に必要な素質に秀でていれば、血の縁は関係ないのですじゃ。」

風が出てきた。窓の隙間から風の奏でる笛の音が聞こえる。

「双剣術を継ぐ者、継承者。この者でなければ、双剣術を他人に教えることはできない。俄か造りにならぬための手段なのですじゃ、双剣術が最強にして最高に難しい剣術という謂われはそこに繋がる。それには他を逸脱してずば抜けた素質が必要になる。それに伴う習練もまた、何よりも厳しい。」

「トキーエは、それをすべてこなしてきたと・・・」

「その通り・・・だがそれをここで語ることはかないませぬ。双剣術の修行は双剣術者以外の者には他言できぬ掟があります。でも、これだけは申し上げておきましょう。双剣術とは、人の業ではないということ・・・」

「人の業じゃない・・・どういうことですか、ハトリツクさん？」

「双剣術を駆る者は、人の感情を持つてはならぬということですよ。一撃必中の戦の剣術に感情は必要ない。かといって鬼になつてはならぬ。神じゃ、神になるのじゃよ。」

「戦の神・・・闘神・・・」

「左様・・・闘神じゃ。奢りでも自惚れでもなく、双剣術者はそうでなければならぬ。それは、これからトキー工殿の戦振りを目の当たりにすれば、自ずと貴殿らにもお分かりになるじやろう。」

考えあぐねている様子の二人に、ハトリックは苦笑しながら言った。

「・・・そうじゃのう・・・双剣術の継承者は、己の身に神を宿しておるとでも、言えはいいのかのう。継承者が思いを託して次の継承者を選んだ時、継承候補者は正当なる継承者の中の神を、引き継がねばならない。脈々と継がれてきた双剣術の神、闘神を、己に引き込まねばならぬのですじゃ。」

「己に引き込む・・・とは・・・」

「・・・」

ハトリックは哀しげに微笑みを残し、それ以上口を開くことはなかった。

バートラスタ攻略 調停人

トキーエは確かな足取りで、バートラスタ港の南地区に向かっている。南地区は、ファーマレイの家があった北地区ほど住宅が密集していないせいか、かえって閑散とした雰囲気を漂わせている。その南地区のほぼ中心、一際目立って豪華な造りの屋敷がある。

「何だ貴様。それ以上こっちに近付くとただじゃおかねえぞ。」

「シューデリ様の屋敷に、貴様みたいな鼠野郎は近寄るのもおこがましいんだよ、さっさと消えな！」

バートラスタの主ジャナッタ・ロンバルティに次ぐ実力者、アルベルト・シューデリ。そのアルベルトの屋敷には、どんよりとした目つきのごろつきがうようよしていた。頼まれていたわけでもないのに自らを「用心棒」と称し、けちなごろつきを追い払って金持ち連中から日銭を稼ぐ連中は多い。また強さを誇示することで気に入られれば、一生食うに困らぬ護衛として召し使ってもらえる可能性もあるわけだが、いずれにしろ連中が貪欲な金の亡者であることに違いはない。

小綺麗な身なりの容姿端麗なトキーエの来訪を、その用心棒たちは快く思わなかったようだ。

「シューデリ氏にお目にかかりたい。」

トキーエは静かにつぶやいた。

「私は双剣術者、トキーエと申します。どうぞお取次ぎ下さい。」

用心棒たちが一様に息を飲んだ。

「双剣術？」

「・・・双剣術だって？」

用心棒の頭らしい男がトキーエに歩み寄った。その脇からひとりの男が屋敷へと駆け込む姿が見える。

「ハトリックじいさんと同じ剣を使うのか。ならば、ここで手は出すまい。シューデリ様は、ハトリックじいさんに一目置いているし、ハトリックじいさんには、我等が束になってもかなわぬからな。」

そこですぐに玄関が開き、細面の白髪 of 召使いが降りてきた。召使いは冷たい目をしながら、トキーエを一瞥して礼をした。

「双剣術をお使いになる方ですね。御主人様がお会い下さるそうでございます。どうぞこちらへ。」

「ありがとうございます。」

トキーエは召使いの後ろについて、屋敷の中へと入っていった。屋敷は外観以上に豪勢で、金銀や宝石で飾り立てられている。トキーエは大きな客間に通された。

「間もなく御主人様が参りますので、こちらでお待ちを。」

召使いは去っていった。美しい毛並みの獣の剥製が並ぶ応接室。間もなく、別の方向の扉が大きく押し開けられた。

「ようこそ客人、君が私に仇なす者でないのなら心から歓迎するよ。私がアルベルトⅡシューデリだ、どうぞよろしく。」

「はじめまして、トキーエⅡギアムデンと申します。」

アルベルトは背が高く、手入れのいい髭をのばした紳士であった。悪名高いバートラストの商人とは思えぬ小気味良い話し口調で、しばらく二人は雑談を交わす。

「なるほど、きみはサンテルマイン衛兵隊の兵士なのか。それにしても・・・いきなり私の屋敷を訪ねてくるとは、きみもいい度胸をしている。私が手元の仕掛けを押せば、きみがその椅子ごと地下牢へ落下する、と言ったらどうするね？」

「落ちてみるのも一興ですが、できればこのまま座らせておいていただきたいですね。シューデリさんがいきなりそういうことをする方ではないと、ハトリックさんにお聞きしてきましたから、そうならないことを信じておりますが。」

アルベルトは高らかに笑い声を上げた。ハトリックのことをアルベルトはよく知っていて、彼の双剣術を敵に回す気は毛頭ないと断言する。そうしてからアルベルトは、トキーエが訪ねてきたその真意を率直に問い質した。

トキーエは素直に答える。

「あなたにとって、ロンバルティ三兄妹はどういう存在ですか。」

「ふむ・・・実に単刀直入な物言いだ、トキーエ君。ならば私も簡潔に答えよう。奴等は私にとって、目の上の瘤だ。奴等のお陰で街の主になりそこねているという実情は、ハトリックから聞いているだろう。」

「私がそのロンバルティ三兄妹を、何とかすると言ったら、どうしますか。」

「・・・君が？」

「ええ。取引をしましょうシューデリさん。私がロンバルティ三兄妹を主の座から引き下ろす代わりに、私の言うたったひとつの条件を飲んでいただきたい。仮に失敗して私が囚われても、あなたに不利になることは一切しませんし、言いません。もちろん殺されたとしても、あなたに呪いの言葉を決して吐かないと誓います。いかがですか。」

アルベルトは目を丸くして、呆れたようにつぶやいた。

「・・・本気で言っているのかね？」

「はい、本気です。ただ私も急いでおりますので、あなたの返事を待つのは今、この一回きりしかありません。」

「ど、・・・どういことかね。」

トキーエのまなざしが、アルベルトの目を抉るように見る。

「私は、あなたがどう返事をして、ロンバルティ三兄妹を倒さねばならない、ということです。ただどうせ彼等を倒すなら、主の座を狙うあなたに、後の整理をしてほしいと思っただけです。」

「も、もし私がそれを断ると、どうなるね？」

トキーエはきっぱりと言った。

「・・・私が、バートラストの主となる。それだけです。」

アルベルトは仰天してトキーエを見た。

しかし、それは当然のことだろう。主を倒した者が次の主となるのは、至極当たり前のことなのだから。アルベルトはトキーエの目に嘘がないことを見抜いたのか、首を傾げてしばらく考え込んだ後、大きな手をすつと差し出した。

「分かった、トキーエ君。君との取引を承諾しよう。私にとっては願ってもない機会が訪れたというわけだな。だが、そうまでして君が求める条件とは、一体何なのだね？」

トキーエは手短かに、サンテルマインとゼランとの戦況を話し、その早期解決には、このバートラスタ港におけるゼラン兵とゼランの補給船を締め出す必要があると語った。

アルベルトはそれを聞くとにつこりと笑い、大きな手でトキーエの手を握り締めた。

「何だ、そんなことなのか！それならお安いご用だトキーエ君。軍人相手の商売は金にならないのが相場だね、かねてから私も思っていたのだよ、そろそろ潮時だね。これもいい機会だ、ゼラン船の入港を全面的に差止めることを、このアルベルトの名にかけて約束しよう。」

「ありがとうございますシューデリさん。」

トキーエは立ち上がり、アルベルトともう一度堅い握手を交わした。

「では、今日の夕刻までに決着をつけて参ります。その後の処置は、どうぞシューデリさんの御自由にお願ひします。」

「よろしい、奴等を引き取った後のことは任せていただく。では待っているよトキーエ君。」

アルベルトはそう言った後、思い出したようにトキーエを引き止めると、暖炉の脇の戸棚に走り、赤い石の嵌った美しい銀の指輪を出してきて、トキーエに手渡した。石の中にはきらめく星が三つ、浮かんでいる。

「これは私の心からの信頼の証しだ。街の主は代々そのことを伝えていくだろう。そう、私の代からね。」

「新しい主の誕生を、先にお祝いしておきましょう。」

トキーエとアルベルトは、短時間のうちに素晴らしい信頼関係を得た。もともと意地汚い商売を好まないアルベルトと、無欲で潔いトキーエとは、どこか相通じるものがあつたのかもしれない。アルベルトはトキーエを玄關まで見送り、普通の客人にもしないような堅い握手を、もう一度交わした。

「おい、おまえたち、トキーエ君は私の大切な友人だ。覚えておくように！」

用心棒たちは驚き、瞬きを忘れてしまう。こんな若造が、主人に『友人』とまで言わせる度量を持つとは、信じられなかったのだ。

「彼をロンバルティの屋敷の近くまで案内しろ。」

言い付けられたのは、小柄な少年であつた。少年の左目は眼帯で隠されている。少年はトキーエに礼をし、ついてくるように手招きした。

「それでは、行って参ります。」

トキーエは少年の後についていった。

少年はトキーエの足取りにあわせ、細い小路を曲がっていく。少年は、口が不自由であった。身振り手振りから判断するに、こういった狭い小路に入らないと、余計なごろつきに出くわして手間がかかる・・・ということらしい。さらに少年はトキーエの二振りの剣を指差し、手振りで、あなたはすごい、と言った。二振りの剣を使うなんて、そうできることじゃない、と。トキーエは微笑み、少年の後ろからつぶやきかける。

「一本の剣を右手、左手それぞれで、最大限使いこなすことだよ。それが合わさって、双剣術になる。短剣でも同じだよ。強くなりたいたら練習してみることだね。」

少年は自分の口を指差して、淋しげに微笑んだ。自分はしゃべれないから馬鹿にされる。でも強くなれば、そんな思いはしなくていい、と。

するとトキーエは、後ろ姿の少年の手を取って立ち止まらせる。

驚く少年の目線まで屈みこんで首を振り、トキーエは柔らかに少年を嗜^{たしな}めた。

「『自分』を強くしなさい。『他人の目に映る自分』を強くするんじゃない、自分自身を強くしていきなさい。後のことは、全部その努力の後ろについてくるから。いいね。」

少年はトキーエのまなざしに射抜かれた。ほんの少しの動揺の中で、少年はトキーエの的を射た忠告に衝撃を受けながら、心の奥で再び感動していた。

ふと、少年の足が止まる。ここから先がロンバルティの屋敷だと、手振りで説明する。トキーエは礼をいい、少年を後にして路地を抜けて行く。少年はしばらくの間、トキーエの後ろ姿を見送っていた。

一方、ファーマレイの家に残されたワイルダーとクリオは、暇潰しにハトリックのアトリエを見学していた。ハトリックは愚作だと笑うが、そこに飾られているのは、とても洗練された素晴らしい絵画の数々だった。絵心のない二人ですら、背筋がぞつとするほどだった。

「何という素晴らしい絵だ・・・こんな迫力は見たことがない。」

「ああ、寒気がしてくる。凄いものだなあ・・・」

ハトリックの絵は、戦の絵が大半であった。被写体はすべて双剣術者で、踊るようなしなやかさは、動き出さないのがおかしいくらいだ。クリオが脇に無造作に立て掛けられた絵を見ると、ほんの数枚だけ、歴代双剣術者の肖像画があった。

「ほう、双剣術者たちの肖像画だ。」

「どれどれ・・・おお、どれも素晴らしい・・・ん？」

ワイルダーの手が止まる。一番奥になっていた肖像画を、慌てて引き抜いて見た。

「ト、トキーエ!？」

そこには、淑やかに笑みを湛えるトキーエの肖像画があった。その姿は若く、十五になるかならぬかの少年のあどけなさを持っていた。トキーエがバートラスタで修行していた、他ならぬ証拠であった。

「おお、それを見付けなさったか。」

階段を上がってきたハトリックの声に、突然我に返る二人。

「あつ、も、申し訳ない、勝手に……」

「いやいや、構わぬよ。それはわしの自信作でな。いい出来じゃろう。」

小さなケーキを盛った皿をテーブルに置き、ハトリックは笑う。

「ここにトキーエの肖像画があるということは、トキーエがこの街で修行をしていたというのは、本当だったのですね。」

「確かに。あの子はわしと会うのは初めてじゃろうが、わしは遠くから、エダルとあの子を見守っておったのですじゃ。その絵は、二人の厳しい修行の日々を盗み見ながら描いたものじゃよ。」

ハトリックは紅茶を入れている。暖かい湯気を立てる紅茶は、どこか花の香りを漂わせている。

「わしには大事な目的があつたのじゃよ。我が従兄弟エダルの勇姿を絵にして残すことと、新しい継承者トキーエ殿の姿を絵にするのと、二つの目的が。ジャスター二最期の姿を残すのは、ファーマレイの最期を看とったわしの使命じゃと思っておる。」

「……彼は、この街でどんな修行をしたのですか？」

ハトリックは二人に紅茶を差し出して、うなずいた。

「あらゆることじゃよ……生き方も、闘い方も、……死に方も。」

バートラスタ攻略 ロンバルティの屋敷

剣のぶつかりあう激しい音が響いた。

巨大な屋敷を前にして、人垣が出来ている。その中で闘う二つの影。その一方はトキーエだ。

「ふふふ、楽しいわ、素敵よあんた。あんたみたいないい男を刻んだら、さぞ気持ちいいでしょうねえ。」

「それはどうも。でも、黙って刻ませるわけにはいきませんよ。」

トキーエの剣を見つめるのは、黒髪の女剣士ジャスリーだ。闘いの喜びからか、その額には汗が滲んでいる。ロンバルティ三兄妹の末の妹であるジャスリーの残忍な性格は、兄のジャラフにも引けを取らないという。

ジャスリーは不思議な剣を持っていた。それは半円形に近い丸さを持った細身の剣で、手首の返しによつて自在に剣先を変えられるという、滅多に使い手のいない剣である。

「あたしのショーター、いい色でしょう。あんたの血を吸い込めば、もつといい色になるわ!」

ジャスリーが頬を紅潮させながら飛び掛かってくる。トキーエも同時に踏み込み、ジャスリーのショーターの先を読みながら剣を突きあう。噂に違わぬ強さではあったが、それ以上の腕を持つトキーエの剣技を前に、ジャスリーは瞬く間に翻弄されていく。

「あ、あたしが押されるなんて・・・そんな!」

そんな絶望のつぶやきが漏れる頃、トキーエの剣がショーターの

根元を激しく突き、一際耳障りな音がこだました。その鋭い突きはショーテルを持つジャスリーの手を、したたかに痺れさせる。ひつと小さい悲鳴を上げたジャスリーに構わず、トキーエは二本の剣でショーテルを絡めるようにして、鋭く捻った。

ばきん。

細身のショーテルの刀身が、その一瞬で折れてしまった。ぎよつとして目を見張るジャスリーの間を見逃さず、トキーエは素早く両手の剣を二回交差させた。

「ぎゃああつ!!」

ジャスリーの両手両足から、血煙が上がる。どっと倒れ込むジャスリー。

「手足の腱を切りました。鎖で縛られるのはお嫌でしょうから、しばらくそうして下さい。」

一度にすべての手足の腱を切られたジャスリーは、黒髪を振り乱したまま気を失っていた。

悪魔の女と恐れられたジャスリーを、いとも簡単に倒してしまったトキーエを、まるでそれを上回る鬼神のように恐怖の目で見つめる群衆。人垣が大きくどよめき、もはやトキーエの歩みを遮る者は誰一人としていなかった。

屋敷までの短い距離を半分歩いたところで、トキーエはふと振り返る。すると、あの道案内の少年が、人垣の端の方からじっとトキーエを見ているではないか。

「ついてきてくれんだね・・・無茶をしちゃいけないだろう。」

少年はごめんなさいと頭を下げたが、まなざしは尊敬と信頼に満たされていた。トキーエはしょうがないと言いたげに微笑んだ。

「・・・でもせっかく来てくれたんなら、すまないけど、彼女を監視していてくれないかな。私が戻るまでに気付くことはないだろうけど、念のため。」

少年は、嬉しそうにうんうんと何度もうなずき、ジャスリーの脇にどっかと座り込んだ。回りのごろつきは、トキーエと親しげにするこの少年に、手も足も出せない。もちろん、出す気も持つはずはないのだが。

「頼んだよ。」

少年は満面の笑みでうなずいた。

トキーエが屋敷の両開きの扉を叩くと、突然扉はぱたんと開かれた。広い吹き抜けの玄関ホールの中央に、息を荒げた髭面の男が仁王立ちになっている。その無骨な顔が、見る見る怒りに歪んでいくのが分かる。ロンバルティの屋敷の扉を開け放ったのがトキーエだったことが、彼にはひどく衝撃的であったようだ。

「貴様・・・よくも俺の妹を負かしやがったな。だが、妹は倒せてもこの俺はそう簡単にはいかんぞ。ロンバルティ三兄妹に盾突くかどうか、貴様の死を持って教えてくれる!!」

トキーエは何も言わなかった。ただ黙って、簡易兜をかちやりと嵌める。すると途端に、トキーエから発せられる闘気が増大した。はっとするジャラフ。物言わぬトキーエの素早い踏み込みを、ジャ

ラフは寸でのところで押し止める。黒い長剣を掲げながら、ジャラフは荒い息をついた。

「双剣術か・・・面白い、久々に骨のある奴をブツ殺せるな!!」

剣を弾いて一気に飛びすさるトキーエは、構えを変えて動きを止める。

「・・・？」

ふと、トキーエの感覚が逆立った。

じつとジャラフの動きを目で追いながら、その仕草はどこか不安定になる。まるで、何かを探すように。

「うりゃああつ!!」

黒い長剣が唸る。重々しい長剣はジャラフの手によって、信じられないほど軽やかに動き、刃の雨のようにトキーエを狙った。ジャラフは噂に違わぬ素質の高い剣士で、その太刀筋は的確にトキーエの隙を突こうともぐりこんでくる。しかしその一方のトキーエは、心ここにあらずと言った様相をしながらも、その刃先を剣でことごとく跳ね返し、がら空きになったジャラフの足元にすりりと滑り込んだ。

「なっ・・・!!」

トキーエは両足を使って、ジャラフの両足を絡めとった。不意をつかれて不様に態勢を崩し、もんどりうって倒れるジャラフ。トキーエは素早く起き上がり、ジャラフ目掛けて剣を突き出そうとした。

「く……っ……」

突然、玄関ホールに邪悪な気が満ちた。

トキーエはその呻き声を最後に、微動だにせずその場に立ち尽くす。ジャラフが脂汗を滴らせながら、二階の踊り場を見た。

「おお……ジャナッタ兄貴!!」

二階の踊り場には、色黒の肥満した男が立っていた。白髪交じりではあったが、その眼光は嫌らしくトキーエを睨み、澀んだ光を漂わせている。

「ふん……情けないぞジャラフ、そんな若造に。わしの呪術で動きを止めてやらなければ、殺されていたではないか。」

「そ、そう言うなよ兄貴、不意をつかれたんだぜ!」

階段を降りてくるのは、ロンバルティ三兄妹の長兄、バートラスタの主ジャナッタ。ロンバルティだった。ジャナッタはゆっくりと階段を降り、ジャラフは急いでジャナッタの脇に走っていく。その間ジャナッタの手は、首に下げた細長い首飾りを握り締めている。トキーエも瞬きもなく凝固したままだ。

ジャナッタは、じろじろと舐め回すようにトキーエを眺めた。

「……ほう……なかなか端整な顔立ちをしているではないか。これなら得意先の商人に高値で売れる。」

「兄貴!こいつはジャスリーを……!!」

「わしの決定にけちをつける気なのか、ジャラフ。」

ぎろりとジャラフを睨むジャナッタ。ジャラフは慌てて口を噤み、首を振った。ジャナッタはにやにやしながらトキーエを見つめ、細

長い首飾りの別の位置を握る。

トキーエの目が閉じられ、両手から剣がするりと滑り落ちた。

「こつちへくるんだ。」

ジャナッタの言葉に、ゆつくりと歩き出すトキーエ。

「いつ見ても兄貴の呪術はすげえな。南国の商人から買った呪いまじなの首飾りの力は大したもんだぜ。」

「ふふ・・・トロツセ諸島の鎮魂師の作る呪いの道具は、値段も法外だが力も格別だ。これさえあれば、わしの主としての地位は不動のものだ。」

ジャナッタとジャラフの、野卑な笑い声がする。トキーエはその間もゆつくりと歩き、とうとうジャナッタの目の前まで歩いてきた。

「ふん・・・容姿のいい用心棒が欲しいと、ババアの奴隷商人がほざいていやがったから、そいつなら喜んで大金をはたくぞ。ひひひ・・・」

すると、トキーエの目がふわりと開いた。簡易兜に隠された目がぎらりと光る。

鋭い気迫が、気を緩め安心しきっていた二人の悪党の神経に、否応なしに突き刺さる。

「えっ!?!」

「ひいつ!!」

トキーエは電光石火の早業で、ジャナッタの眉間に鋭い突きを叩き込んだ。ジャナッタは突然のことに構える間もなく、まともにそ

の突きを受け白目を向いて一気に崩折れた。ジャラフは仰天し、あたふたと剣を構える。またどつと汗が滲み出て、髭面をいつそう不潔に映し出した。

「な、なぜだ、呪術にかかっていたはずじゃ・・・兄貴の呪術が効かないはずがないのに・・・!!」

トキーエは鋭い目をジャラフに向けた。

「剣以外の気配を感じた時、最初はそれが何か分かりませんでした。でもたかだか商人ごときが崇高な魔術を使うとは思えなかったから、呪術と睨んで正しかったようですね。今までその力に耐えた者がいなかったんでしょう・・・私のあんな下手なお芝居を見抜けなかったとは。」

「あ・・・あれがすべて演技だったというのか！くっ・・・ば、化け物・・・!!」

ジャラフの顔が蒼白になっていく。

「あなたの兄上の澀みきつた気が読めないようでは、双剣術の名折れ。私はあなたの兄上の立ち位置を捕らえ、集中力を極限にまで高めていた。精神に作用する呪術に抗するには、それを上回る強い集中力でそれを遮断すればいいのです。」

ずい、と歩み寄る丸腰のトキーエ。ジャラフは小刻みに震えている。

「双剣術は集中力を操る剣術でもある。本当に力ある専門の呪術師ならともかく、あの程度のおざなりな呪術で、私の動きは止められ

ません。今度は、あなたが私を止めてみたらいかがですか？」

もはや、ジャラフは敵ではなかった。トキーエの素早い手刀が走ると、あっけなく黒い長剣を取り落としてしまう。その剣を拾い上げたトキーエに、みぞおちを挟るように剣の柄で突かれて気絶するまで、ジャラフはうわ言のように、嘘だ、嘘だと言い続けていた。

戦の終焉

バートラスタの主、ロンバルティ三兄妹は倒された。

今まで彼等に取り入っていた者たちはぼんやりと歩み去り、後にはうつろな顔で気絶した三兄妹と、トキーエが残る。

道案内の少年はアルベルトの屋敷へ応援を呼びに行き、アルベルト自らが取り巻きの用心棒を引き連れてロンバルティの屋敷に駆け付けた。目の前に転がっているロンバルティ三兄妹を見て、アルベルトと用心棒たちは呆然とする。あちこちから唾を飲む音が聞こえ、感嘆のため息が漏れた。悪魔の権力者と呼ばれたジャナツタも、鬼畜剣士と言われたジャラフもジャスリーも、今ではだらしなく地べたに伏しているのである。

「夕刻の約束には間にあったようですね。いかがですかシューデリさん。」

トキーエの柔らかな言葉に我に帰るアルベルト。アルベルトは喜々としてトキーエの手を取った。

「素晴らしい・・・何と素晴らしい！トキーエ君、君は私の恩人だ！君との約束は必ず守るよ、守らずにいられるものか！今日は宴だ、宴の準備だ！！」

縛り上げられるロンバルティ三兄妹。いつの間に集まってきたのか、街のそこかしこからならず者たちが寄ってきていた。彼等はいずれも憎しみのこもったまなざしで、ロンバルティ三兄妹を睨み付けている。かつて彼等に酷い目に合わされた連中なのだろう。

アルベルトが二、三人の用心棒に何ごとが言い付けると、用心棒たちは用意していた荷車に、気絶しているロンバルティ三兄妹を乱

暴に放り込んだ。そうして、彼等はどこかへ運ばれていこうとしている。その後に、そろそろとならず者たちがついて歩き出す。彼等は彼等のやり方で、これまでの三兄妹の非道な行いに相応しい、極々適正な罰を与えるのだらう。

もう二度と戻る事もないであろうロンバルティの屋敷は、新しい主であるアルベルトに所有権が移り、ぎっしりと蓄えられていた財産や家財道具は、いずれアルベルトの手ですべて売りさばかれることだらう。

歓喜しながらアルベルトはトキーエの肩を叩き、自分の屋敷へと連れていく。またハトリックの元へも使いをやり、ハトリックとクリオ、ワイルダーも宴に招いてくれた。そしてトキーエは歩き出しながら、砕け散っている首飾りの破片に目をやるのだった。呪術を施す呪いの首飾りは、誰にも気付かれることなく、静かに闇に葬られたのだ。

翌朝。明け方まで続いた馬鹿騒ぎがようやく静まる。

山間から朝日が差しはじめた頃、旅支度を整えたトキーエと、クリオ、ワイルダーは、バートラスタの城門前で、アルベルトとハトリックの見送りを受けた。

「もう行ってしまうのか・・・何と短いことだ。トキーエ君、またぜひこの街に寄ってくれ。いつまでも待っているよ。」

「ありがとうシューデリさん。バートラスタも、あなたが治めることで、少しは変わりますね。」

「ハトリックがわたしに手を貸してくれるというから、心強いよ。双剣術と、双剣術者の伝説は、永遠にこの街で息衝いていく。今までの街の体制は、わたしとハトリックとで少しずつ変えていくつもりだ。サンテルマインとの国交を回復させるのも時間の問題だ。体制が整い次第、使いの者をサンテルマインへ行かせよう。」

「我が王もお喜びになるでしょう、お待ちしていますシューデリさん。」

クリオがにこやかに微笑んだ。ワイルダーも顔をほころばせて、アルベルトと握手を交わす。

「ぜひサンテルマインにもいらして下さい。戦の終焉に貢献したあなたの御来訪を、我が王は心から歓迎することでしょう。」

「ありがとうパッセ補佐官。戦での御武運をお祈りしているよ。」

一方その脇で、トキーエとハトリックは小さな声でやりとりをかわしていた。その小声を聞くとともにしに聞いていたワイルダーには、こんな言葉が届いていた。

『・・・エダルも喜ぶじやろう・・・命を賭して育てた継承者の活躍をな・・・』

『別の意味で、思い出深い街になりました・・・』

『双剣術を継承したことを、己の傷にしてはならんぞ・・・おまえは師を殺したのではない、師から神を受け継いだのじゃ。神を手放した師を、神のもとへ送ることこそ、継承者の運命。いずれおまえにも分かる時がくる・・・』

『・・・私の中の神を継ぐべき後継者は・・・見付かるでしょうか・・・』

そこで、あの口の不自由な少年がトキーエに駆け寄った。トキー

工は少年に気付くと、につこりと微笑んだ。

「見送りにきてくれたのか、ありがとう。元気でね。」

少年はうなずき、胸元から小さな青銅の輪を取り出して手渡した。それは鋭い刃の円盤で、それは自分が作ったものだ、ぜひ貰ってくれと、身振り手振りで伝えてくれた。

トキー工はそれを受け取ると、自分の懷から短剣を取り出した。トキー工の瞳の色と同じ、美しい緑色の石の嵌め込まれた短剣を円盤と交換に、少年に手渡してこう言った。

「これは私が修行に使った短剣だ。お古だけど、まだまだ切れ味はいい。頑張つて、強くなるんだよ。」

少年は短剣の肌に、使い込まれた無数の傷跡を見た。しかしその短剣は、これまでに見たどの短剣よりも、深みのある美しさを持っていた。少年は頭を下げ、ありがとうと、何度も繰り返した。きつと強くなるよ、と、少年の元気な声が、トキー工にだけは聞こえていた。

「トキー工殿、達者でな。」

「さらばだトキー工君！」

その後ろで、少年が手を千切れんばかりに振り続けた。その瞳に浮かんだ涙が風に吹かれて飛ぶころには、トキー工たちは南へ向けて歩き始めていた。

このことがあって以後、バートラスタはゼランの補給船を完全に排除した。バートラスタは過去、海上戦のための砲台を港に設置し

ていて、これまで使用することのなかった港の砲台は、聞き分けのないゼラン軍の補給船に灸を据える、絶好の武器となった。補給船に備えられた石弓などはまったく無力で、港には近付くこともできなくなり、結局ゼラン軍はバートラスタに入港することができず、引き返す羽目になったのだった。

それに伴って、東の大陸に陣取っていたゼラン軍は急速に力を失い、野蛮な野党よろしく分散して、自然消滅へと追いやられた。主力戦力の大半はサンテルマイン軍と衛兵隊によって殲滅させられ、わずかな生き残りは散り散りとなり、事実上ゼラン軍は完璧に打ちのめされた。

王は戦の終焉を宣言し、サンテルマイン軍と衛兵隊は、勝利の勝鬨を上げながら、故郷のサンテルマイン城下町へと凱旋した。城下町は沸きに沸いて、色とりどりの紙吹雪が吹き荒れ、楽隊の賑やかな演奏が所構わず鳴り響いた。勝利を祝う祝宴が至るところで開かれ、軍の兵隊や衛兵隊の兵士は、誰彼かまわず宴に引っ張り込まれ、酒を浴びせかけられたという。

そして今回の最大の勝因は、バートラスタの協力が不可欠であったという事実が認められ、サンテルマインのファデウス国王は、バートラスタの新しい主となったアルベルトに、感謝を込めた書簡と勲章を贈った。アルベルトはすぐさまサンテルマイン国王に、丁寧なお礼の返答をよこしたという。

ワイルダー・パッセ第二中隊補佐官と、クリオ・ノーラン第三中隊補佐官も、エトワール衛兵隊長より勲章を授与された。その盛大な授与式の中には、二人の受賞者に惜しめない拍手を送る、トキエの姿があった。

本来ならトキーエにも勲章が授与されるはずであった。しかしトキーエは、二人の補佐官の功績以上に自分が働いた事実はないと、頑として受賞を拒んだのだ。ワイルダーもクリオも、自分たちだけ勲章を授与されるわけにはいかないと、トキーエをだいぶ長く説得したが、トキーエの意志は変わらなかった。補佐官の命令に従っただけだと繰り返すトキーエに、クリオは最後に、残念そうにこう言った。

本当は、おまえひとりの勲章なのに・・・と。
そしてワイルダーは、トキーエにこう告げた。

おまえはすぐに俺たちを越える。

だから今は、俺は素直に勲章を受けとる。

いずれおまえに追い抜かれる運命なのだから、少しぐらいはいい目を見ておかないとな・・・と。その時浮かべた微笑みは、当初のワイルダーからは想像もつかない、信頼に満ちたものだったという。

・・・

サンテルマイン城下町を覆うお祭り騒ぎの中、戦死者の棺がひっそりと小高い丘の上の墓地へと運ばれていく。その中にはトキーエの友人、ブリックスの名があった。嫌味な先輩であったオールの名もある。その他にも、トキーエを可愛がってくれた何人かの先輩の名が、棺の札に刻まれていた。

ブリックスは、トキーエたちがバートラスタへ向かった後、ゼラオン軍の奇襲隊に襲われ、善戦空しくその刃に倒れ、オールも同じく奇襲隊の毒矢を受けて負傷し、手当ての甲斐なく息絶えたという。

勝ち戦の喧騒に包まれた街をそっと抜け出したトキーエ。墓地のところどころに、愛すべき家族を失った喪服姿の人影がうずくまっ

ている。トキーエは歩き出しながら、そんな哀しみの脇を通り過ぎるたびに会釈をした。うずくまりすすり泣く黒い人影たちは、そんなトキーエの様子にも気付かず、墓石を濡らすほどに泣き伏していた。

黒いリボンを結んだ葡萄酒を持って、トキーエはやがて立ち止まる。気弱な友人ブリックスの名が刻まれた墓石の前に、トキーエは沈黙のまましばらく立ち尽くしていた。

『一緒に、助け合って、生き残ろう。そして二人で、葡萄酒を飲むんだ・・・』

ブリックスのたどたどしい声が聞こえてくるような気がして、トキーエはじつと風の音に耳をすませていた。

街の中央の教会から、死者を慰む鐘の音が響いてくる。葬儀の列席者はゆっくりと立ち上がり、肩を落とし、足を引き摺りながら帰っていく。この聖なる鐘の音に乗って、愛する人が天へと召されていくことを願いながら。

トキーエは黙ったまま、葡萄酒を墓石の前に捧げる。黒いリボンが、風にたなびく。

人の生き死にの上に成り立つ戦の勝敗。

若者が老人よりも先に命を落としていく戦争の無残さ。

仲間の死を踏み台にして勲章を貰うことに、何の意味があろう。

戦に関係のない村人たちが、戦の巻き添えになって命を落としているのに、素直に勝利を喜ぶことなどできるはずがないではないか。

トキーエは心の中で、ずっとつばやき続けた。

ブリックスの墓石は、ひっそりとトキーエを見つめている。

「ブリックス・・・もう一度・・・君と盃をかわしたかったのに・・・」

墓地に増えた新しい墓石は、風渡る丘から、愛しい故郷を見下ろしている。

試されるトキーエ

その後。

いくつかの季節が流れ、トキーエは二十四になった。その間にも、大小にかかわらず幾多の戦が巻き起こった。バートラストから締め出しをくったゼランは港への接岸を断念し、砂浜や岸壁からの侵攻を主な戦略とし始めて、その執念深さを見せ付けた。長く苦しい戦の時代が、再び東の大陸を覆おうとしていた。

サンテルマインとの宿命の対決に、終止符を打たんと血眼になるゼラン。それに応戦するサンテルマイン軍と衛兵隊は、その戦が歴史上に残る長期戦になるであろうことを、予期せずにはいられなかった。

そして戦が続き、闘いが熾烈になればなるほど、トキーエの名声は否が応にも高まっていった。双剣術を駆って素晴らしい戦績を上げ続けるだけでなく、その洗練された知識によって攻略された戦も多々あるという。衛兵隊や軍の兵士たちはトキーエのことを、いつしか『闘神トキーエ』と呼ぶようになった。

二振りの剣の躍るところ生ける者の姿なし。しかしその立回りはあくまでも優雅。闘うためだけに生まれた神、闘神。戦においてのトキーエは、まさにその闘神そのもの。衛兵隊の兵士たちは口々にそう言つて、彼のことを尊敬と畏怖の入り交じったまなざしで見つめるのだった。

そしてその噂は、衛兵隊長はもとより、王の身边警護を任務とする選りすぐりの精鋭、宮廷騎士団の団長のもとにも届いていた。

「ふむ・・・その男、戦士養成学校を出ておらぬそうだな。」

「は、本来であればそこで訓練を終えた後というのが筋でございま

すが・・・」

「隊長の君自らが必要ないと判断したというのは聞いておったが、それほど優れた男なのかね。」

「我が名において、このイデリオ」エトワールが保証いたします。」

「ふむ・・・」

衛兵隊長の力強い言葉に、宮廷騎士団長オーガス」マキュアリーは感慨深げにしてうつむいた。

王の身の回りと宮廷の警護を主たる任務とし、精強、精鋭の選り抜かれた剣士たちで構成される、宮廷騎士団。剣士を志す者が誰しも憧れる、最高の剣士の称号である。そして戦闘士とは、宮廷騎士となるために必要不可欠な称号のひとつである。

厳しい試験を通過した者に入学が許される、戦士養成学校。その戦士養成学校を卒業できた者にのみ、再び厳しい試験を受ける資格が与えられる。戦士養成学校を終え、なおかつその試験に合格した者は、ソフィア」ビレニツタ寺院での訓練を許される。

ソフィア」ビレニツタ寺院は、戦闘士としての資質、剣を取らない闘い方、体術などを訓練する場所である。ビレニツタ寺院で挫折していく剣士は多く、剣士たちの憧れの第一歩、戦闘士の称号を得るために通過しなければならぬ、最も厳しい難関だとすら言われている。

そしてビレニツタ寺院での訓練を修了できた者に「戦闘士」の称号が与えられ、それと同時に『宮廷騎士』となる資格が与えられるのだ。衛兵隊に入る資格が戦士養成学校を卒業するだけでよいことから見ても、宮廷騎士になるのはまさしく至難の技と言えよう。

「一度会ってみたいな、そのトキーエとやらに。明日、宮廷内の戦闘士訓練場に来るように言っておいてくれないかね。」

「せ、戦闘士訓練場でございますか!？」

「明日の午後、訓練場で待っておるよ。訓練兵たちも興味があるよ

うだしな。」

「・・・マキュアリー騎士団長、恐れながら申し上げます。彼を試すつもりがおありならば、くれぐれもお手柔らかにお願いいたします。」

「なあに、小手調べだ。怪我はさせんよ。」

するとエトワール衛兵隊長は、きっぱりと言った。

「いいえ騎士団長、私は、訓練生の怪我を心配しておりますのです。」

・・・

その日は、雨が振っていた。夜半から降り出した雨は、明けた翌日も止むことがなく、サンテルマインの宮廷の美しい庭園は、しつとりと霞に包まれていた。王宮を訪れたトキーエを、淑やかな女官が出迎える。

「トキーエ様でございますね、訓練場に御案内いたしますわ。」

若い宮廷の女官が、トキーエを案内して奥へと進んでいく。

サンテルマインの宮廷は歴史があり、その美しさにも深みがある。王の信条で、宮廷は通常の城に比べてかなり控え目な造りとなっているが、その代わり所々に配された銅像や彫像は、サンテルマインで名を馳せた素晴らしい芸術家たちの力作として有名である。王は武術と同じように、芸術も奨励しているのだ。

女官は、頬を薔薇色に染めながら、トキーエを時折振り返ってははにかみ、早足になった。比類なき強さを持ちながら、精悍で麗しい顔立ちのトキーエは、戦士たちのみならず、サンテルマインの年頃の女たちにとっても常に噂的だった。もちろん宮廷内にもその噂は広まっについて、彼を一目見ようという女官や召使が、廊下の曲

がり角や扉の隙間から、静かな熱いまなざしを向けていた。トキーエの案内役となったこの女官もまた、羨望の視線にさらされている。・トキーエは密かに苦笑していた。

「あ、あの・・・トキーエ様、噂以上にお美しい金髪をしていらっしやるんですね・・・」

女官が思い切ったように振り返ってつぶやいた。

トキーエはそう言われて、ああ、というように自分の髪を撫でた。トキーエは後ろ髪を一部分だけ長くのばして束ねている。

「この髪の色は母譲りなのです、髪の一部を長く束ねるのは双剣術者の証しなので・・・男のくせに女々しいと思われましたか？」
「そ、そんな！女々しいだなんてとんでもありませんわ！・・・それだけのお美しい髪、女性でもそう持つておりませんもの、本当に羨ましいですわ。」

トキーエは微笑み、自分の髪を後ろに払い除け、女官に向けて恭しく一礼した。

「戦で汚れる運命にある私の髪など、貴女様のようにお美しい亜麻色の髪の比ではありません。どうぞ自信をお持ち下さい。」

女官はトキーエの言葉とその麗しい笑顔に、真っ赤になってうつむいた。そしてある一枚の扉を開けて中を指差すと、女官は頬を押さえ、小走りに城の奥へと消えていった。その後ろ姿を見送りながら、トキーエはゆっくりと微笑を消していく。

トキーエがその扉に一步入ると、再び静かな雨音が響いてくる。訓練場は、中庭を抜けた王宮の離れに位置している。

「これはよくぞいらした、噂の剣士の御登場ですな！」

突然、扉の脇から声をかけられるトキーエ。振り返ると、大柄で貫禄たつぷりの初老の男が笑っていた。

「マキュアリー騎士団長に呼ばれた剣士とは貴殿のことですな。お待ちしてました、戦闘士訓練場総監督長を勤める、ダイロンといいます。」

「お招きいただきまして光栄に存じます。衛兵隊第三中隊所属のトキーエ、ギアムデンと申します。」

トキーエは礼儀正しく会釈する。背の高いダイロンを軽く見上げながら、トキーエは言葉を繋いだ。

「ところで・・・非常に不躰ですが、ひとつお願いがございます、聞いていただけますか総監督長。」

「ああ、ダイロンと呼んでくれて結構ですよ。何か？」

トキーエは不思議顔のダイロンから目を離し、離れの方を指差してつぶやいた。

「体が資本の訓練生の皆様に、風邪をひかせては大変です。雨も止みそうにありませんから、ぜひ訓練場での目通りを願いたいのですが・・・いかがでしょうか。」

さらりとトキーエはそう言った。

ダイロンはギョツとしてトキーエを見、ついで離れの方を睨んだ。雨の中にたたずむ中庭には、ごくわずかな立ち木と、小さな噴水、薔薇のアーチがあるだけだ。

ダイロンの顔から笑みが消え、鋭い瞳がトキーエをなぞる。

「・・・なるほど・・・噂に違わぬ猛者のようだ。」

ダイロンが軽く指を鳴らす。

すると、立ち木や噴水の影から数人の男たちが現れ、離れの訓練場へと駆け戻っていった。それらの人影を見送るトキーエの瞳を見つめながら、ダイロンが心底楽しげにしてつぶやいた。

「気に入ったぜ、トキーエとやら。この離れた場所から奴等の気配を読むとは何という勘の鋭さ・・・マキュアリー団長もお喜びになるだろう。さあ、こっちに来てくれ。邪魔者がいなくなったところで、訓練場に案内しよう。」

ダイロンは大きく笑い、雨の中庭を抜けて離れへとトキーエを連れていった。そうして行き着いた先は、まるで薪割り小屋のごとく粗末な、木造の小さな建物であった。脇には石造りの長方形をした大きな建物がある。

「これは監督長の詰め所さ、あんまりぼろくてびっくりしたか？監督長に使う金があったら、訓練生の施設に回してくれて俺が願い出たんだ。」

木造の小屋の戸を大きく開けるダイロン。

「ようこそトキーエ君。お待ちしていたよ。」

小屋の片隅にある椅子から、ダイロンと同じような背格好の男が立ち上がった。美しいマント、そこに縫い取られた紋章・・・サンテルマイン宮廷騎士団長オーガス＝マキュアリーは、小さめの部屋

が殊更に狭く見えるほどの貫禄をもって、トキーエを出迎えた。トキーエは畏まり、清々と一礼する。

「はじめまして、マキュアリー宮廷騎士団長。衛兵隊第三中隊トキーエ、ギアムデン、お召しにより参上しました。」

「マキュアリー団長、彼は恐ろしく素晴らしい素質を持っています、さつそくしてやられましたよ。」

「そのような・・・訓練生が首を傾げて戻ってきおった。エトワールの言ったことも、今なら納得がいく。」

騎士団長の豪快な笑い声が、詰め所いっぱいに響いた。

「ぜひ噂の『闘神』に会ってみたいと思って、きみを呼んでみたんだが・・・想像していたようなごつい雰囲気はないな。まあ、こちらへきて掛けなさい。」

椅子を勧められ、静かに腰掛けるトキーエ。

「きみの剣を見せてくれるかな。」

「は。どうぞ。」

トキーエは立ち上がり、剣の一方を引き抜いて騎士団長に差し出した。騎士団長はそれを受けとると、じつとその刃に目を向ける。

「・・・素晴らしい剣だね、実にいい質感だ・・・この重さの剣を二本同時に操れるとは大したものだ。どうだねトキーエ君、一度戦闘士訓練生と、模擬戦をして見せてくれまいか。双剣術がどれほどの威力を持つものか、この目で確かめたいのだよ。」

その言葉を聞くと、ダイロンが口を開いた。

「・・・最大の困難にして最強の剣術。かつて双剣術には二つの流派があったと言われているが、その一方はすでに滅んでしまった・・・この事実だけでは御不満ですかね、マキュアリー団長？」

「総監督長、よく御存知ですね、光栄です。」

トキーエが嬉しそうに微笑むと、騎士団長も再び豪傑笑いを返す。

「ははは、それはそうだ。ダイロンはサンテルマインでも指折りの武闘研究家だからな。だがなダイロン、実際に双剣術を目の当たりにしてみないことには、話は始まらない。わしは自分のこの目で、噂の真偽を確かめたいんだよ。」

騎士団長はトキーエに剣を返す。さらに反論しようとするダイロンの声が喉まで出なかった時、トキーエはゆっくりとつぶやいた。

「特に出し惜しみすることはありません、マキュアリー宮廷騎士団長のお望みとあらば、幾らでもお目にかけましょう。」

戦闘士訓練場にて

「特に出し惜しみすることはありません、マキュアリー宮廷騎士団長のお望みとあらば、幾らでもお目にかけましょう。」

騎士団長はにつこりと笑い、トキーエと、思案顔のダイロンを引き連れて監督長詰め所を出、隣の石造りの建物に歩いていった。大きな両開きの扉を開くと、そこには明々とした松明が燃え盛り、屈強な訓練生たちが黙々と剣を振るい、整然と並んで稽古に励んでいた。

騎士団長の姿を見た途端、師範代と思しき二人の男が鋭く声を張り上げる。

「素振りやめ！」

師範代の大きな声がかかると、一斉に動作が止まる。見事な統率力だ。

騎士団長は師範代たちを呼びつける。

「巷で噂の「闘神」に来てもらった、トキーエⅡギアムデン君だ。彼と模擬戦をしてほしいのだが、これと思う訓練生をひとり選んでくれたまえ。」

トキーエを指差しながらつぶやく騎士団長。

師範代はトキーエを見、次いで訓練生たちを見た。ひそひそと話し声が交わされた後、師範代の一人が大声で叫んだ。

「スーヴァ！」

すると、訓練生の中からひとりの男が歩み出た。男は大きな黒い瞳を輝かせ、トキーエの前に立つ。師範代はその男スーヴァに、試合用の剣を投げる。そしてトキーエにも試合用の剣が、二つ投げられる。トキーエがそれを受けとると、騎士団長は二人に向けてこやかに手を振った。

「スーヴァ君だったね、好きなように攻めてみたまえ。」

騎士団長の言葉にスーヴァはうなずくが、伺うように師範代を見た。

「・・・師範代、本当によろしいのですか。」

「騎士団長の仰せの通りにするとよい、好きなようにやってみる。」

師範代がうなずくのを確認すると、スーヴァはゆつくりとトキーエに向き直り、礼儀正しく一礼した。トキーエもそれにならって一礼する。

「はじめまして。衛兵隊第三中隊所属、トキーエ＝ギアムデンです。よろしくお手合わせを願います。」

「戦闘士訓練生スーヴァ＝ハンサーダだ。きみの噂は聞いてるよトキーエ君、どうぞよろしく。」

黒い瞳で微笑むと、スーヴァはゆつくり剣を構えた。

トキーエも静かに構え、スーヴァの構えをじっと見守る。

「はじめ!!」

スーヴァは気合いを込めて踏み込み、剣を突き出す。トキーエはそれを躲しざまに相手の剣を上方に弾く。だがスーヴァは怯むこと

なく、弾かれるままに剣を振り上げると、右足でトキーエに鋭い蹴りを放った。トキーエは左からそれを流すと、とんぼ返りを打って後方に下がるスーヴァに向けて飛び込む。態勢を素早く変えたスーヴァは、その速攻の一撃を寸前で受け止めた。

『は、速い・・・！』

その場に居合わせた者すべてが息を飲む。

スーヴァの切り返しも素早い、トキーエの動きもそれに負けていない。ともすれば、スーヴァの速さが押され気味にすら見える。師範代が指名したスーヴァは、訓練生の中でも特に俊敏な男だったが、そのスーヴァが防戦に手間取るなど、初めてみる光景だった。

「きええっ！！」

スーヴァの剣がトキーエの剣を払い除け、空いた腹部目掛けて強烈な肘打ちを叩き込もうとする。トキーエはそれを見越し、瞬間的にもう一方の剣の腹を膝に当て、それを防御した。肘当ての金属音が耳障りなほど高く響く。素早く手を引いて後方に下がるスーヴァ、態勢を整えて構え直すトキーエ。

「・・・騎士団長、そろそろ試合を止めた方がよくないですかね。」

二人の剣士から目を離すことなく、ダイロンがつぶやいた。スーヴァの剣が空を切り、幾度となくトキーエに降り注いでいくが、トキーエはそのすべてを最小限の力で避けている。攻めているはずのスーヴァの顔に焦りの色が浮かぶ・・・それはトキーエの冷静な瞳と対照的であった。

「ふむ、おまえもそう思うか。」

騎士団長は顎をさすりながらつぶやいた。ダイロンは握り締めた手の中に汗を滲ませながらも、つとめて冷静に言葉を続ける。

「訓練生を動揺させるのは、あまり感心しません・・・」

「うむ。戦闘士の称号はおろか、戦士養成学校も出ていない者にここまで追い詰められれば、動揺もするだろう。だが、その恐ろしさこそ実戦に不可欠なもの。これも経験だ、最後まで続けさせよう。」

騎士団長とダイロンの小声の会話が終わるその寸前、初めてトキエの方から勝負を仕掛けた。スーヴァの引いた剣を狙い、細かな鋭い突きを繰り返していく。スーヴァはその刃を紙一重で交わしていたが、ふと、トキエの体が不自然な捻り方をした。

「あっ！！」

突きを引いた直後、トキエの目がぎらりと光る。途端に溢れ出る凄まじい闘気は、周囲の訓練生のみならず、騎士団長やダイロンですら圧倒する。突きをかわしたスーヴァの、眼前目掛けて剣を走らせるトキエ。そのあまりの素早さに一瞬、ぎくりとして目を見張るスーヴァ。

その刃が目の前を通り過ぎるのを見た瞬間すでに、スーヴァの心臓に寸分変わらず、トキエのもう一方の剣がぴたりとあてがわれていた。

すべての動作が停止し、呼吸さえもとぎれたまま、彫像のようになる二人。

「それまでっ！！」

声を出したのは、騎士団長であった。

ダイロンも師範代も口をあんぐりを開けて声も出せない。トキーはその声がかかると、ゆっくりと剣を引いて収めた。スーヴァはそこでようやく、冷や汗がじわりと吹き出すのを感じる。

トキーエは丁寧に一礼して、騎士団長を見た。騎士団長は満足そうな顔で、だが驚きをもってこう言った。

「・・・普通の剣士でも、あれほど正確に剣を扱える者はそういない。右と左の手が完全に違う動きをこなすとは・・・まさに神業だ。闘神の名は伊達ではないな、トキーエ君。」

その騎士団長の声に、ようやく我に返ったダイロン。大仰に天を仰ぎ感嘆のため息をついてトキーエを見た。

「スーヴァは訓練生の中でも特にすばしい奴だ。その速さをいとも簡単にあしらうとは・・・まだ夢を見ているようだ。」

スーヴァもようやく剣をおさめ、静かに一礼してからトキーエに握手を求めた。トキーエは控え目に微笑んでその手を取り、改めてスーヴァに一礼する。

「・・・貴重な体験をさせてもらった、礼を言うよトキーエ君。」
「恐縮です、ハンサーダ先輩。」

騎士団長はつかつかとトキーエに歩みより、満面の笑みを湛えながらその肩を叩く。

「エトワールの言うことは本当だったな、どうだねトキーエ君、宮廷騎士になる気はないかね？君ならすぐにでも通用するよ、私が保

証する！」

師範代と訓練生たちは、突然の騎士団長の言葉にあぐりと口を開いた。

剣士としてこれ以上の榮譽はない。宮廷騎士団長の御墨付きをもつて、無条件で宮廷騎士になれるなど、過去に例のないことである。しかし騎士団長は、その特例を必ず王に認めさせて見せると大乗り気の様子だ。

ダイロンが黙ってトキーエの口元を伺っている。
周囲の視線すべてがトキーエに集まった。

そんな中、トキーエは、はっきりと首を振った。

「畏れながら・・・慎んで、お断り申し上げます。」

「えっ・・・」

騎士団長は、予想に反したその言葉に驚きの声を上げる。
その続きの声が出ぬうちに、トキーエはゆっくりと返答した。

「・・・ここで訓練に励んでおられる先輩の皆様方を差し置いて、学校も出ていない私ごときが宮廷騎士になるなど、これほど恐れ多いことはありません。」

「それはそうだが、しかし・・・！」
「それに、私の駆る双剣術は、戦の剣術。一対一の闘いにはおよそ向かない剣術です。陛下のおわすこの宮廷内にあって、私のような戦場の剣術を駆る者はいらないと思われます。」

丁寧だが、強い拒否の意思表示だった。

誰もが憧れる宮廷騎士、その宮廷騎士への道が今、誰よりも大きく開かれたのに、トキーエの心は動かない。騎士団長は心底意外だという顔をして言った。

「・・・一生衛兵隊で過ごして、その手腕を埋もれさせるつもりかね？」

トキーエは困ったようにして微笑んだ。

「私は、戦の前線に立ち、苦しみに喘ぐ村や街の人々を一人でも多く守りたいのです。私が双剣術者であるないに関わらず、それが生涯の目標であり、願いでもあるからです。ひとりの力は微々たるもの、だからこそ衛兵隊の統率された力の中で、戦火を鎮める任にあたりたいのです。」

「トキーエ・・・」

「確かに・・・宮廷騎士は私の憧れですが、でも、私にはそのような崇高な任につく資格はありません。マキュアリー騎士団長のお言葉をいただけただけで、私はもう十分に幸せ者です。」

騎士団長は小さく唸って黙り込んでしまう。

ダイロンは上目遣いに少し考え、スーヴァに振り返った。

「・・・スーヴァ、トキーエの力は「微々たるもの」だったか？」

スーヴァはダイロンの問いに強く首を振り、嘲笑気味にしながら肩をすくめた。

「総監督長、彼の力が微々たるものなら、私はこれから、自分の何を信じて訓練に励んだらよいのでしょうか。」

辺りから笑いとともに賛同の声が上がる。ダイロンもその言葉に大きくうなずいた。

「トキーエ、おまえの話は分かった。だが、常に平和を望んでおられる陛下をお守りすることも、戦を鎮めるための大切な第一歩だとは思わんか？」

トキーエがダイロンに振り向くと、ダイロンはにやりと笑った。

「陛下が安心して他国との和平協議に臨むことができるよう、陛下を取り巻くすべての環境を、宮廷騎士たる我々が管理するのだ。我々は常に最初の砦であり、また最期の砦でもあるんだぞ。」

ダイロンは簡素な訓練服の襟に縫いとられた、美しい紋章を指差した。それこそが宮廷騎士の証しであり、誇りなのだ。スーヴァがトキーエの隣で深くうなずいた。

「宮廷騎士の任務は、想像以上に幅が広いんだよ。陛下の身边警護が主たる任務とはいえ、それは数ある宮廷騎士の任務のうちのひとつに過ぎない。戦にあつては宮廷騎士の半数以上が、前線に出て闘っている事実を知らないわけじゃないだろう？」

スーヴァはトキーエに人懐こい笑顔を見せる。騎士団長はスーヴァの肩を叩き、その通りだと相槌を打つ。

「・・・戦の悲惨さを直に感じとり、民のために闘いたいというおまえの気持ちは素晴らしい。しかし、君には宮廷騎士として余りある才能と素質がある。人にはそれぞれ自分に適した最良の場所があるものだ。そんなに若いうちから何もかも決めてしまわずに、いろ

いろと模索してみてはどうか。」

トキーエは、相槌を打ちながらも、雨の中の立ち木のように黙っている。

ダイロンはまあまあと騎士団長を押さえ、トキーエに双剣を返して笑った。

「そう急かしてはかわいそうですよマキュアリー団長、彼に考える時間を与えてやってください。今すぐに考え方を変えと言っても、できるものじゃないでしょう。」

「それはまあそうなんだが・・・トキーエ君、わたしはいつでも待っているよ、きみが宮廷騎士になりたいと言う日をね。」

「はい・・・ご配慮ありがとうございます。」

そして、静かな沈黙を保ったまま、トキーエは騎士団長とともに訓練場を去っていった。その後に残されたダイロン、師範代、そして訓練生たちも、しばらく押し黙っていた。

その中でスーヴァは、柔らかに微笑みながら師範代につぶやいた。

「世界は広いのですね・・・あれほどの男と剣を交えることができたのは、奇跡かもしれない。でも、それが幸運か不運かと問われたら・・・いったいどちらとさえいいいのでしょうかね。」

師範代はさあ、というように肩をすくめる。

「・・・ただひとつ言えることは、あいつは只者じゃないってことだ。」

「その通りっ！」

ダイロンが二人の師範代の背中を、思い切りバンと叩いた。

大きく咳き込む師範代たちを尻目に、ダイロンも訓練場を後にしながら、豪快に笑い続けた。

「あいつはこの世で最も神に近い男だ、ひょっとしたら、奴は本当に神なのかもしれんぞ。ははは、闘神か、あいつにぴったりの渾名じゃないか、闘神トキーエ！こいつは面白くなってきやがったぞ、はははは……！！」

「双剣術者……トキーエ」ギアムデン……」

「トキーエ……」

「……闘神トキーエ……」

訓練生たちのつぶやきは、羨望でもなく、嫉妬でもなく、まして憎悪でもなかった。

噂以上の闘い振りに魅了された訓練生たちから、ため息とともに漏れるトキーエの名。愚か者の剣術という不名誉な言葉はすでに、訓練生たちの心の内から消え去っていた。たとえ彼が一本の剣だけで闘っていたとしても、その勝敗は変わらなかったであろうことは、その場にいる者すべて、無論、彼と剣を交えたスーヴァ自身ですら、承知してしまっていることであった。

闘神の胸中

そんなことがあった、翌日。

トキーエが宮廷騎士団長の誘いを受けたという話は、衛兵隊の兵士全員の知るところとなっていた。

「おいトキーエ、聞いたぜ、宮廷騎士になるんだってな！」

誰彼なく声を掛けられるトキーエ。終いにはクリオまでが、

「マキュアリー宮廷騎士団長は御立派なお方だ。宮廷騎士になっても、衛兵隊での経験を忘れんようにな。」

・・・とまで激励されてしまう始末。

クリオはすでに第三中隊長に就任していて、トキーエはその右腕として控えている。本来なら補佐官であるべきところだが、それでは戦の時に動きがとれないとして、エトワール衛兵隊長とクリオの許可を得て、役職に付くのを避けたのである。

トキーエはクリオの激励に苦笑いしながら、詳しい事情を説明しようとした、その矢先。

第三中隊長室の扉がノックもなしにぱたんと開かれた。

「お邪魔いたします、トキーエ殿はおられるかな!？」

耳に新しい豪快な口調、笑い声。トキーエはきよんとする。

「・・・ダイロン総監督長?どうしてここへ・・・」

「おつ、やっぱりここにいたなトキーエ。なあに、大したことじゃないさ、ちょっと野暮用でな。あ、第三中隊長殿ですね、はじめま

して。戦闘士訓練場の総監督長をしとります、ダイロン「フォーデイエと申します。以後よろしく。」

突然のことに言葉も出ないクリオは、その言葉を聞いた途端あわてて椅子から立ち上がって畏まった。

「こつ、これはフォーデイエ様！大変失礼いたしました、第三中隊長クリオ「ノーランです！」

「・・・フォーデイエ様？」

トキーエにはまるで話が見えない。クリオは小声で説明した。

「フォーデイエ様は、マキュアリー騎士団長の前任者だ。つまり、宮廷騎士団の団長をしておられた方だぞ。知らなかったのかトキーエ？」

「ははは、そう古い話をしないで下さい中隊長殿、今じゃ腕白訓練生相手の強面親父こわもてですよ。マキュアリー団長はわしより年下だが同期生でな、勤務が解ければ酒飲み友達に早変わりだ。ところで中隊長殿、お話の最中すみませんが、ちよつとトキーエをお借りできませんかな？」

クリオは一も二もなく承知した。

ダイロンは啞然として声もないトキーエを連れて中隊長室を出ると、ある一室にすべりこんで扉を閉めた。カーテンが引かれた部屋で、トキーエは苦笑しながらつぶやいた。

「マキュアリー騎士団長の前任者、フォーデイエ騎士団長・・・お名前は知っていましたが、まさか総監督長のことだったとは・・・ずいぶんお人が悪い。だいふ失礼をいたしまして、申し訳ありませんでした。」

「はっはっは、謝るのは筋違いつてもんだトキーエ、わしはしがな
い訓練場の総監督長、ただの老いぼれの同僚だと思ってくれればい
いのさ！ほらおまえたち、出ておいで！！」

えつと声を上げる間もなく、カーテンの裏から女性たちが数人飛
び出してきた。数人の女性たちは巻き尺や布截れ、チヨークを持っ
て、トキーエをあつという間に取り巻いた。彼女たちはどうやらお
針子のようなだ。

「はじめましてトキーエ様、お会いできて光栄です！噂どおりの素
敵な方・・・胸が躍りますわ！」

「こんなにお側でお姿を拝見できるなんて、今日のわたくしたちは
誰よりもしあわせですよ！帰ったら街中に自慢しちゃうと！」

「わたくしたちは宮廷騎士様たちの制服をお作りしておりますの。」

どこの洋品店よりも素晴らしい制服を仕上げて御覧にいきますわ！」

彼女たちははてきばきと、トキーエの体の寸法を計っていく。肩幅、
腰回り、背丈、袖丈。ブーツの寸法から長さ、頭回りまでも丹念に
計られる。トキーエは突然のことに目をしばたかせる。

「ちょ・・・そ、総監督長、これはいつたい・・・」

「水臭いな、ダイロンと呼んでくれていいってのに。もうちょつと
の辛抱だから、我慢してくれよ。」

そして女性たちはトキーエの体の寸法をあらかじめ計り終わると、
水が引くようにさつと下がり、可愛い会釈とウイंकを投げ、その
部屋を後にした。ダイロンもさつさとそれに続きながら、にやりと
トキーエに笑って見せた。

「楽しみにしてな、あの子たちはおしゃべりだが腕はいい、きつと

ぴったりの制服を作ってくれるぜ。じゃあな！」

「総監督・・・ダ、ダイロンさん！私は・・・」

「気にするな、わしからの贈り物にさせてもらうよ、新しい宮廷騎士の誕生だからな！はははは・・・！！」

ダイロンは一方的にそう言って、嵐のごとく去っていつてしまった。

トキーエは呆然としてしばらく立ち尽くしていたが、そのうちに笑いが込み上げてきた。何という強引なやり方だろう、あの調子で騎士団長に就任していたのか、と。

「・・・あの短い時間の中で、ずいぶん気に入ってもらえたものですね・・・」

トキーエは頭をかきながらも、宮廷騎士に幾分心が傾きつつあることに気付いたのだった。

それからダイロンは、ほとんど毎日と言っていいほど衛兵隊に顔を出した。初めは少し戸惑っていたトキーエも、いつかその来訪を楽しみにするようになり、二人の信頼関係は次第に深まっていた。

そんなダイロンは当初から、トキーエにこんな前置きをしていた。

わしは心からおまえに宮廷騎士になつてほしいと思っている。

それは無理強いできないし、しようとも思わんが、おまえのために作った制服は、わしがいつまでも大事にとっておくから、気がむいたら袖を通すがいい。

どうしてそこまでするのかって？

わしはおまえの双剣術に心底惚れてしまったのさ。

こうして衛兵隊に顔を出すのは、双剣術のことをもっともっと知

りたいからだ。そしてついでに「闘神と呼ばれた男」・・・おまえのことも、もつと深く知ることができる気がしてな。

そのダイロンの熱心な訪問に、トキーエよりも恐縮してしまっているのは衛兵隊の面々だった。これほど熱望されているのに、なぜ宮廷騎士の道を拒むのかと、何度も話し合いがなされたが、結局その年を越すまで、トキーエの気持ちが変わることはなかったという。

・・・

そして翌年、小雪の舞うある休日に、トキーエのもとに手紙が届く。それは懐かしい上の姉からの便りであった。ナロフの隣街カスバに嫁いだ姉は、時々実家の方へ顔を出して、父や母を安心させている。だが手紙には、父の体調が芳しくないことが書かれており、ぜひ一度家へ戻るようにとの内容だった。

戦が始まってからは、滅多に家へ顔を出せないでいたトキーエも、その時ばかりはクリオに相談せずにいらなかった。

「そうか、それは大変だ。私から衛兵隊長にお願いしてみよう。戦況も落ち着いていることだし、隊長もお許し下さるだろうから、今のうちに旅支度を整えておくといい。」

「恐れ入ります中隊長、お願いいたします。」

トキーエは急いで部屋へ戻ると、旅支度を整えてひとり、ベッドに腰掛けて黙っていた。狭いながらも個室を与えられているトキーエにとって、その時間だけは無性に長く、重いものだった。

そこへ、例のごとくダイロンがノックと同時に笑顔で部屋へ入ってきた。

「いよいよトキーエ、今日は寒いな。どうだい、美味しい羊のシチュー

でも食いに行か……どうした、今日はいやに塞ぎ込んでるな。」

トキーエは力なく笑うと、事情を簡単に説明した。

ダイロンは目を見開いて驚きの声を上げる。

「なんと、親父さんが！そりゃ一大事だ、こうしちゃいられん！」

「ダ、ダイロンさん、どこへ……」

「決まってるだろう、城へ戻って、宮廷騎士団の丈夫な馬を借りてくるんだ。ナロフまで五日も歩く間が惜しい、馬なら二日だ！」

「そんな！宮廷騎士団の馬を借りるなんて、そんな恐れ多いことは……！！！」

すると、ダイロンはちらりと振り返って、いつものようににやりと笑った。

「なあに、マキュアリーなら喜んで貸してくれるはずだ、おまえの一大事は我等の一大事、みんな協力を惜しむことはないぞ！待ってるよトキーエ……！」

「ダイロンさ……！！！」

ダイロンは嵐のごとく駆け出していった。

トキーエは途中までダイロンの後を追ったが、勢いにのったダイロンの後ろ姿を見るうちに、次第に足が止まってしまふのだった。他人のためにあれほど必死になってくれる、ダイロンのような存在がいることが、今いちばんの喜びであり、力であると、トキーエは思った。

「トキーエ先輩、衛兵隊長の許可が下りたそうです！」

後輩の兵士がトキーエの後ろ姿に叫ぶ。トキーエは振り返り、うなずいて部屋へと戻る。荷物を手にして部屋を出る瞬間、トキーエはいつになく、不安に胸が潰されそうになっている自分に気付く。

戦の時に恐ろしいほど平然としていられる自分は、どこにいつてしまったのだろう。

身内の安否を気遣うように、敵方や敵の家族を心配することはできないのだろうか。

戦にあつて、そんな感情は持たぬがためだと思つていても、ふとそんな思いに取り付かれる瞬間がある。そんな時、神を宿した自分の戦振りは、振り返るのも恐ろしいほど冷酷でしかない。

自分は、双剣術を操りきれていないのではないか。

双剣術が戦の剣術であることを、思い知ったはずではなかったのか……

「トキーエ、馬の準備ができたぞ!!」

ダイロンが見事な栗毛色の馬を連れてきていた。薬や果物の詰まった麻袋も、同時に手渡してくれる。

「これは戦闘士訓練場の訓練生たちが集めたんだ、早く持つていつてやれ。親父さんが首を長くして待つてるぞ。」

「ダイロンさん……ありがとうございます、父も喜びます!」

「なあに、困つた時はお互いさまさ。気をつけていくんだぞ。」

うなずきながら手綱を取り、馬に跨がるトキーエ。トキーエは掛け声とともに馬を走らせ、故郷のナロフへと向かつていった。

馬がくたくたになるまで急いで急いで、トキーエはナロフへ向けて走っていく。姉がしたためた手紙の頃から、もうだいぶ時間が経過している。無事であってくればよいが・・・渦巻く幾多のあいまいな言葉の中、それだけが頭の中ではっきりとしていた。

・・・

「彼は行きましたか？」

戦闘士訓練場の訓練生たちが、戻ってきたダイロンに駆け寄っていく。

「ああ。マキュアリー団長もいちばん丈夫で早い馬を貸してくれた。トキーエはおまえたたちの贈り物に感謝していたぞ。」

「そうですか、それはよかった。」

訓練生たちは笑顔を浮かべる。あるひとりの訓練生がつぶやいた。

「でも・・・父上がいるだけ羨ましいな。俺の父上なんか、戦に出たまま帰ってこない。サンテルマイン軍の古参兵だったんだけど・・・」

「・・・俺の両親も、ゼランに家を焼かれて逝っちまったよ・・・」

「・・・間に合うといいな。」

「うん。間に合うといいな。」

訓練生たちは、しっとりとした笑みを浮かべ、過去を思い出しながらぼつりとつぶやいた。

戦の時代を生きる若者の中には、こういった傷を抱える者が数え切れぬほどいる。そんな思い出に囚われて無力になる前に、彼等は

常に戦いを求め、そして平和を勝ち取ろうとする。だからこそ、誰もが己の身と心を強く、強くしようとして、剣士や武闘家への道を志すのである。

ダイロンは切ない気持ちになりながらも、努めて明るく笑いながら、訓練生たちの背を叩いた。

「辛気臭い顔をするんじゃない、あいつにや闘神が味方についてるんだぜ、滅多なことはあるもんか。俺たちはあいつの帰りを待ってるやいいんだ！」

ダイロンにつられ、訓練生たちも相槌を打ちながら笑った。

ダイロンは笑いながらも、訓練生と同じように、静かな祈りの気持ちをもって、力ないトキーエの微笑みを思い浮かべるのだった。

宮廷騎士への道

そうしてトキーエがナロフに向かって、およそ七日が過ぎた頃。

「おい、トキーエが戻ったぞ！」

「トキーエ先輩が戻った、中隊長に連絡を！」

にわかに騒がしくなった衛兵隊の宿舎前。栗毛色の馬には丈夫な編み籠が幾つも吊り下げられていて、トキーエはそれを丁寧に解き降ろしていく。そこへ連絡を受けたクリオが駆け付けると、トキーエは振り返って微笑んだ。

「長い間申し訳ありませんでした。おかげさまで里帰りもできましたし、・・・家族にも会えました。」

クリオは一瞬息を飲んだが、すぐにうなずいて笑い掛けた。

「そうか。そんなたくさんの籠、どうしたんだ？」

「ナロフの名産品を持ってきたんです。今夜はこれで一杯やりましょう。」

編み籠をあけると、美しい緑色の瓶が現れた。中にはたつぷりとした液体が波打っている。後輩の兵士が目を見張った。

「あつ、ひよつとしてナロフの果実酒ですか？こりやいいや！」

「ナロフの酒は美味いんだよな、今夜は楽しみだぜ！」

他の兵士たちが嬉しそうな声を上げて、トキーエの降ろした瓶を撫で回した。トキーエを囲んで、兵士たちは皆和気藹々と歓談する。

クリオは普通に微笑んでそれを見ていたが、微笑みを浮かべるトキエの横顔に浮かんたわずかな霞と、その意味するものを、すで見たとような気がしていた。

そして、トキエは宮廷へ馬を返しに、ダイロンのもとへ訪れた。ダイロンはいつものような豪快さで、彼を迎えることはなかった。そつと小さく笑い、トキエに椅子をすすめた。トキエは座りながら、三つの瓶をテーブルの脇に置いた。

「大事な馬をお借りできて、大変助かりました。それにたくさんの薬や果物、本当にありがとうございます。心ばかりのお礼ですが、どうぞ皆さんで飲んでください。」

「・・・親父さんには、会えたか？」

ダイロンが遠慮がちにつぶやくと、トキエは少しの沈黙の後、小さくうなずいた。

「ええ・・・。辛うじて、間に合いました。」

「話は、できたか。」

トキエはうつむきかげんになりながら、少しずつ話し始める。

「数年前、北で猛威を奮った流行病が尾を引いたようです。一度は治ったそうなのですが、寄る年波には勝てなかったのでしょうか。老体には事のほか厳しい病だったそうですから・・・。」

「流行病か・・・北から流れてきたって評判の悪玉の病だな。それにやられていたのか・・・。」

トキエはうなずき、テーブルに乗せた瓶を指差した。

「見てください・・・父は私のために、こんなにたくさんお酒を用意してくれていたんです。剣士たちの憧れ、宮廷騎士になるかもしれない、不肖の息子の、前祝いと称してね・・・」

「!・・・」

「父は生粋の剣士でした。小さい頃からよく聞かされていたものです・・・宮廷騎士こそが剣士たる者の頂点だと。その父の最期の言葉は、こうでした。」

『最期の親孝行を誓ってくれトキーエ、その道がおまえの前に開かれているのなら、父が果たし得なかった夢を、おまえが・・・かなえてくれ・・・』

「・・・父は、そう言い残して、亡くなりました。まるで、私を待っていたかのように。」

ダイロンは三つの瓶を見つめた。トキーエの父の期待の大きさと、愛情の深さがうかがえる。次いで、すぐにトキーエはつぶやいた。

「私は、父の遺言に、従うことにしました。」

「遺言・・・えっ・・・トキーエ、それじゃ・・・!!」

ダイロンは目を見開いて身を乗り出した。

トキーエは椅子から立上がり、ゆっくりと深く一礼する。

「一所懸命に努力する覚悟です。ダイロン総監督長、どうぞ私に宮廷騎士への道をお示してください。宮廷騎士になるためならば、どんなことでもいたします。」

ダイロンは息を飲んでその言葉を聞いた。ずっと待ち侘びていた言葉なのに、言い知れぬ緊張感が漂う。ダイロンは手放して喜びたい気持ちを押さえて一息置き、つぶやいた。

「・・・父の遺志を継ぐという気構えは分かった、だがおまえ個人として、宮廷騎士のことはどう思ってるんだ。まだ、自分には相応しくないものだと思ってるのか？」

トキーエは、困ったな、とでも言うように首を傾げたが、ゆつくり首を振った。

「自分に相応しいかどうかは、ここではつきり言えません。でも、自分に合わないとも、今は思いません。資格不足なら、戦士養成学校から改めて始めます。」

ダイロンはようやく、元通りの笑みを顔に浮かべた。謙虚なトキーエの言葉に首を振って笑う。

「おまえに戦士養成学校なんざ似合わんよ。安心しろトキーエ、あの時から、マキュアリー団長も俺も、おまえを迎える気持ちは変わってないんだ。もちろん、訓練生たちだってそうさ。先を越されて悔しがるだろうが、変えようのない実力の差つてもんがあるんだ。おまえのような男がいるってことは、いい刺激になるだろうよ。」

「そうなるといいのですが。」

「マキュアリー団長も喜ぶぞ！さあ、こうしちやいられん、早速報告だ！じきに団長自ら衛兵隊長のところへ挨拶にいくはずだ、まとめた荷物はそのままにしとけ、すぐに宮廷にきてもらうからね！」

ダイロンはトキーエの手をとった。

「・・・よろしく頼むぜトキーエ。」

「こちらこそ、ダイロン。」

トキーエはその時初めて、敬称ぬきでダイロンを呼んだ。

ダイロンは最初、おっと声を上げてきよとしたが、すぐにとりと笑ってうなずいた。

「ようやくそう呼んでくれたか。言つたろう、俺のことは老いぼれの同僚と思えって。やっと、そう認識してくれたんだな。」

ダイロンは豪傑笑いを響かせながら、さっさと部屋から出ていつてしまふ。トキーエは三つの瓶を眺め、ひとりうなずきながら、同じく部屋を後にするのだった。

・・・

それと同じ頃、ある情報が流れてきていた。トキーエの働きにより、バートラスタの主となったアルベルトⅡシューデリ直々に、サンテルマイン衛兵隊へ連絡があったのだ。

トキーエの父が患った流行病は、あの北の港街バートラスタでも猛威を奮ったという。その威力は凄まじく、後遺症により体力の落ちた者たちも次々と亡くなり、街の人口の約四分の一が命を落としているとの報告があった。そしてその死亡者の中に、最期のジャスターⅡ一族であった、ハトリックⅡジャスターⅡの名があるというのだ。

アルベルトの書簡の最後は、こう結ばれていた。

『追伸 敬愛するハトリックは天に召される間際、双剣術継承者トキーエ殿へ伝えるべく、一説の詩を残した旨ご報告する。』

疾風なりき太刀筋
はやて

稲妻なりき眼光

双剣の紋章に栄光あれ

双つの友情に栄光あれ

我が恩人トキーエ殿に伝えられたい。もしバートラスト近郊を訪れることがあつたら、ぜひ立ち寄られ、彼の墓標に祈りを捧げてやってほしい、と。貴衛兵隊に戦の女神が微笑まれるよう、遠き北の地からお祈りする。・・・アルベルトⅡシューデリ』

第三中隊長クリオは、エトワール衛兵隊長から書簡を受け取った時、ハトリックの死をトキーエに伝えるべきかどうか悩んだ。最期のジャスター二一族である彼の死は、今のトキーエには重荷ではないかと考えたのだ。クリオは悩んだ末、第二中隊長ワイルダーⅡパッセに相談を持ち掛けた。

「父上を亡くした後すぐ、ハトリック氏の悲報を聞くのは、酷ではないかと思つてな・・・」

クリオの言葉に、ワイルダーも同じく神妙な顔で答える。

「・・・それはそうかもしれないが・・・俺は、奴が宮廷騎士になるまえに、すべて話したほうがよいと思うな。」

「トキーエの将来を思えば、当然だろうが・・・」

「あいつが最後の双剣術者になってしまったんだ、それなりの心の準備は必要だろう。ましてこれから宮廷騎士になるのであれば、その気構えは、奴の今後に大きく影響するはずだ。」

クリオはワイルダーの言葉に深くうなずいて、書簡の入った丸い

筒をじっと見つめた。

「最後の双剣術者か・・・」

「・・・わびしいものだな。」

伏し目がちにうなずくクリオを見つめながら、ワイルダーの脳裏に、あのバートラスタでのトキーエとハトリックの姿が思い浮かんだ。

「・・・トキーエは分かっているはずだ、遅かれ早かれ、その運命の日が必ずやってくることを。それにクリオ、俺たちにも・・・分かってることが一つだけあるじゃないか。」

「それは・・・？」

「・・・俺たちにできることは、何一つないってことさ・・・」

ワイルダーは、ゆっくりと哀しげにそう言って、クリオの部屋を立ち去った。

任命式の囃

トキーエが衛兵隊に戻って一月あまり経ったある日、王宮において、厳かに宮廷騎士任命式が行われた。

音に聞こえた双剣術の使い手を、ぜひ宮廷騎士として迎えたいという騎士団長の熱心な申し出を、ファデウス国王は軍の関係者なども交えて議論し、熟考した。学校を出ていないことを問題視する意見もあったが、国の防衛の要である宮廷騎士団長の意見を揺るがすほどの決定打はなく、トキーエを宮廷騎士に任命する特例措置を設ける旨を、国王自らが決定した。

サンテルマイン軍の各將軍たちも、また王宮の古参宮廷騎士たちも、そして召し抱える当の国王も、いつになくささやかな緊張感を持って、その式典に参列した。

美しく広い大広間は、いつもの宮廷騎士任命式とは違い相当な混雑であった。衛兵隊の役職ある面々が列席しているせいでもあるが、普通そこであまり見かけないはずの貴族などもいて、トキーエの注目度が桁外れに高いことを物語っていた。

「トキーエーギアムデン。汝、何時いかなる時も、宮廷騎士たる誇りを忘れることなく、その身を崇高なる宮廷騎士の任に捧げることがここに誓いたまえ。」

祭事を司る王宮神官が、トキーエの前に美しい剣を差し出す。膝まづいているトキーエは、ゆっくりとその剣を受け取ると、恭しく掲げて立ち上がり、王の座す台座へと歩いていく。美しい王宮騎士の制服に身を包んだトキーエは、まるでもうずっとその制服を着こなしてきたかのような、不思議な雰囲気漂わせていた。任官式にしているのが不釣合に見えるほど、トキーエの姿は落ち着いている。

「王の前で誓いのことばを・・・」

神官の言葉とともに、トキーエは王の前にそつと膝まづき、剣をかざして深々と礼をした。

「わたくしトキーエ」ギアムデンは、今日この時より、陛下の御身を守護する要となり、全身全霊を持って、宮廷騎士としての任に従事することを、ここに誓います。」

すっかりとした、美しくも厳しい瞳。トキーエの瞳を食い入るように見つめる王は、任官式の決まりである誓いの言葉も、いつもより一層力強く耳に残るのを感じた。

「・・・そちの噂は聞いておる。今日からは宮廷騎士としてその才腕を生かし、民に悠久の平和をもたらすよう、同志とともに励むがよい。期待しておるぞ。」

「はっ、光栄であります。」

トキーエは剣を再び掲げ直し、神官のもとへとそれを返納する。神官はそれを立派な箱に収めると、聖なる水を注いだ金のゴブレットを、トキーエに手渡した。

「我らが全能なる神々よ、この者に豊かな祝福を与え、刃の嵐よりこの者を守りたまえ・・・」

トキーエはゆっくりと、ゴブレットの聖水を飲もうとした。瞳を閉じて口をつけようという、その時。

「・・・」

そこでふと、トキーエの動作が止まる。
神官がそれを見て、もう一度繰り返した。

「この者に豊かな祝福を与え、刃の嵐よりこの者を守りたまえ・・・」

「・・・」

それでも、トキーエは動かない。

式典会場は次第にどよめきだし、どこからか野次が飛び始めた。

「聖なる誓いの水が飲めぬのか、ギアムデン殿ともあろう方が！」
「怖じ気付いたんなら、さっさと衛兵隊へ帰るがよろしい！」

トキーエの一挙手一投足を気が気でなく見ていたダイロンは、人込みに紛れた野次を聞いた途端、一気に頭に血が上る。騎士団長がダイロンをぐっと押さえ、かぶりを振った。

「堪えるダイロン、ここで暴れては反対派の奴等の思いつぼだ。」
「し、しかし団長っ・・・なぜだトキーエ、なぜ飲まないんだ!？」
「・・・まさか・・・!」

騎士団長が眉をしかめる。トキーエは騒然とした広間の中でようやく立ち上がった。マントをひるがえしてゆっくりと神官を見つめ、そして王を見つめた。

「畏れながら申し上げます。」

ゴブレットを手にしたままのトキーエは、透き通るように響く声でこう言った。

「わたくしは先程、陛下に宮廷騎士の誓いを宣言いたしました。ゆえに、我が命はすでに陛下のもの。この命をどうされるも、陛下の御意志のままでございます。」

しんと静まる会場。

「陛下に命を委ねた今、わたくしが、わたくしの意志で命を絶つ道は、閉ざされました。」

「!・・・トキーエ!？」

ダイロンがぎょつとしてトキーエを凝視した。トキーエは続ける。

「・・・親愛なる陛下、不躰な愚問を述べることをお許し下さい。陛下は、わたくしの死を、お望みでございますか。」

誰もが息を飲んだ。王は突然の問いに身を引きながら、トキーエの真摯なまなざしを受け止めずにいられない。

「・・・何を・・・何を言う、そちの死をなぜ余が望もうか。」

トキーエは、ゆつくりと微笑んだ。

「光荣です陛下。わたくしはそのお言葉をいただけただけでも、このひとときに宮廷騎士としていられたことを、誇りに思います・・・」

トキーエは、ずっと、ゴブレットの水に口をつけた。

「ああっ!?!」

「きゃああっ!?!」

悲痛な叫びがおこり、会場が騒然となる。

聖なる水を口に含んで飲み下した直後、トキーエはゴブレットを手にしたまま、ふらりと、倒れた。

軽く吐いた血が霧となって飛び散り、床にばたばたと落ちる。

「ト、・・・トキーエーッ!?!」

「トキーエッ!?!」

悲痛な叫びとともに、ダイロンが列席者を押し退けて駆け出した。同時にクリオとワイルダーも、目の前に立ち尽くす上級幹部を強引にかきわけて飛び出し、トキーエに駆け寄った。騎士団長もすぐさま飛び出してきて宮廷騎士たちに鋭く号令をかけ、会場を即座に固めさせる。

ダイロンは必至にトキーエを揺すり、頬を叩いて叫んだ。

「トキーエ、この馬鹿野郎、トキーエッ!?!」

顔色が蒼白になり、まぶたもぴくりとも動かない。その白い肌に口元の血のしずくが、ぞつとするほど赤く浮き上がっている。トキーエの金髪だけが流れるように美しいことが、なおさらその状況を悲愴に見せた。

「指が冷たい・・・!トキーエ頼む、起きろ、起きてくれっ!?!」

クリオが握り締めた手を必死に揺すって叫ぶ。

王も、思わず台座から立ち上がって、トキーエの横たわる姿を凝視していた。血が逆流するかのような鼓動。

『何と・・・何と言う・・・！あの男は、聖なる水が毒であることを知っていて、あのような・・・！？』

そうこうするうち、ふと会場の一角で高笑いが起こった。

「ふはは、ふはははは！やった、やったぞお、俺はやったんだ！」

途端に人垣が乱れ、声高に笑い続ける男が、広間に立ち尽くしていた。

退いた人の群れには見向きもせず、男は狂気の馬鹿笑いを、倒れたトキーエに向けて放っている。

「見たか、田舎兵士め！貴様ごときが宮廷騎士などと、誰が認めるものか！成り上がりの戯け者は、毒の水でも飲んでいろ！ふはははは！」

「取り押さえろっ！！」

騎士団長が言うが早いか、宮廷騎士たちが素早く男を取り押さえた。神官の服装をした男は、なおもわめき続ける。

「あんな野郎は地獄へ落ちて当然だ、泥臭い奴にあの制服が似合うはずがねえ！本当なら俺が！この俺様が宮廷騎士に相応しい逸材だったんだ！・・・俺の出世を邪魔しやがって、いい気味だぜ！！」
「なっ・・・何てことを・・・！」

宮廷騎士たちが顔を歪めた。

確かに、トキーエが宮廷騎士に任官することで、戦闘士訓練生たちの一部が、少しだけ任官が遅れてしまったことは事実だった。その期間の差がたとえわずかでも、気位の高い兵士たちには、先を越された侮辱としてとらえられるのも、ある意味で無理からぬ話であった。

騎士団長が、その男の前に立った。

「貴様が、アンファイリィ。」

男は騎士団長の顔を見て、歪んだ顔をさらに歪ませて笑った。

「俺を覚えてくださっているなんて、光栄です団長様！ははは、どうです、あの不様なトキーエの格好！胸がすーっとしますよー！」

騎士団長の目が鋭くなる。

「団長、俺はあいつに負けなくらい強いんです、俺こそが、宮廷騎士に相応しい男なんですよ！ねえ団長！？」

トキーエを抱えたダイロンが男を睨み据えた。騎士団長はじつと黙っていたが、ふと、氷のような冷たい目で男を一瞥し、吐き捨てるように言った。

「我等に必要なのは力ではない、誇りだ！それすら忘れた貴様が宮廷騎士になることなど、未来永劫ありえぬ！！」

騎士団長は剣の柄に手をかける。

「貴様に、トキーエのような優しさがあるか。誰にでも慕われ、思

われるあの暖かさがあるか。強さだけで、誇り高き宮廷騎士になるうだなどと、思い違いも甚だしいわ！よくも我が部下を・・・許さぬ！！」

「・・・・・・・・待って・・・・・・・・ください・・・・・・・・！」

細い声がした。

「！！」

「トキーエ！！！」

ダイロンの腕に支えられながら、トキーエがゆっくりと目を開けた。

目を見張るダイロンと、クリオ、ワイルダーの前で、蠟のように白い顔のトキーエはゆっくり、よろめきながら立ち上がり、騎士団長に一步步静かに歩いていった。

「私は・・・平気です、平気ですからどうか・・・！」

「駄目だ、動くんじやないトキーエ！！！」

騎士団長はトキーエに駆け寄り、力の入らないその身体を支えて叫んだ。

「何が大丈夫なものか！無理に飲まずとも、おまえには・・・、おまえには分かっていたはずではないか！！！」

「は・・・はい・・・でも・・・」

弱々しく微笑みながら、トキーエはつぶやいた。

「飲まなければ、宮廷騎士には・・・なれないのですから・・・。
それに・・・」

トキーエは狂った目の男を見た。

「その方の...気持ちを思うと...」

「・・・」

会場内の人間すべてが、トキーエを見つめた。
涙している貴族の女性もいる。

「へ・・・へへへ・・・へ・・・な、何を・・・何を言っただよ
う、この偽善者野郎・・・!」

「やめんか、アンファイリー!!」

「貴様に哀れまれると思うと反吐がであらあ、貴様みてえな成り上
りの強運野郎に何が分かる、何が分かるってんだあつ!!」

騎士団長が、ずっと手を動かした。

「ぐへっ・・・!」

腰に下げていた短剣を、電光石火の早業で鞘ごと投げ付けた。短
剣の柄が男の側頭部を直撃し、男は白目を向いて倒れ込む。曲線を

描く短剣の軌跡を熟知しきっていなければ、到底できない技である。騎士団員たちは男を抱え、すぐさま会場を後にした。

騎士団長は白い顔のトキーエを見つめ、そつとつぶやいた。

「……トキーエ……おまえに唯一の弱点があるとすればそれは……」

「……はい。」

トキーエは悲しげに微笑んだ。分かっていますと、言つかのよう

「……ギアムデン、いや……トキーエよ。」

するとそこに、王が立っていた。台座から歩いて、わざわざトキーエのもとにやってきたのだ。

「陛下、神聖な式典をこのようにしてしまい……お詫びのしようもございません……」

トキーエはよろめく体でとつさに膝まづこうとしたが、王はそれを優しく制し、トキーエの腕をそつと叩いた。

「……そちの度量は底知れぬ。見知らぬ相手を思いやり毒を含むとは、何と言う男よ。だが今後は、二度とそのような真似をするでないぞ。約束じゃ、トキーエ。」

「は……申し訳ありませんでした……」

「そちの命は余のものと申したな。ならば余のために、そちは決し

て死んではならぬ。よいな、闘神よ。」

「はっ・・・承知いたしました。」

王はにやりと笑った。

トキーエはゆつくりと膝まづいて王を見送り、会場は割れんばかりの拍手に満たされた。

ダイロンたちが近付いてくるのを感じながら、トキーエは再び、ゆつくりと、倒れ込んでいった。

最後の双剣術者

トキーエよ・・・

わしは今おまえに、わしの中の神を継がせた。
いいや・・・神が、おまえを選んだのだ。

剣を抜くな！・・・まだ抜いてはならぬ。

わしから流れる血を見るのだ。

どす黒いじやろっ、けして美しくはない血じゃ。

これは、神からの祝福・・・

汚れた血を、体から追い出して下さっておる。

いずれおまえも、この祝福を受け、天へと昇るじやろっ。
神を宿らせたまま、死んではならぬぞ。

正しき継承者を選ぶのだ。

後は、己の中の神が、すべてを決する。

ああ・・・トキーエ・・・

男じやろっ、泣くんじやない・・・

優しいトキーエ・・・泣かんでいいんじゃ・・・

このエダルは・・・おまえが継承者で、嬉しいぞ・・・

...

「トキーエ・・・久しぶりだな、元気だったか？」

「フェロー！」

「父上のことは・・・残念だったな。」

「ええ・・・」

「・・・不謹慎だが、おまえのお祖父様が亡くなられた時を思い出

していたよ。まるで昨日のここのようだな・・・」

「・・・そうですね。」

「俺は今は、警備隊の副隊長補佐をしているよ。親父は引退したし、これからの警備隊は、俺たちがしよって立つことになるな。」

「頑張つて下さいねフェロー。」

「宮廷騎士の道、進んでみればいいじゃないか。素晴らしいよ。親父さんだって、それが夢だったんだろう。そこに立つたおまえにしかできないことが、きっとあるはずだよ。」

「ええ・・・」

「おまえの活躍は、きっと大陸中のどこにいても聞こえてくるだろうぜ。」

...

「ハトリック氏が!?!」

「うむ・・・立て続けに残念な話で、何だが・・・」

「・・・」

「気を落とすなよ。」

「はい・・・」

「・・・その・・・トキーエ・・・」

「何でしょうか、ノーラン中隊長。」

「・・・最後の双剣術者に・・・なってしまったんだな。」

「・・・はい。」

「宮廷騎士になって、さらに腕を磨いてくれ。気の利いたことが言えなくて・・・おまえには申し訳ないが・・・」

「とんでもない・・・ありがとうございます。」

「頑張れよ・・・」

…

「……」

トキーエは、ゆっくりと目を開けた。

「おお……トキーエ！」

「トキーエ様！」

ぼやけた視界が次第に澄んでいくと、傍らで覗き込んでいるダイロンと、数人の宮廷騎士、扉からは女官や召使いたたちが心配そうに見つめている。

「……ダイロン……」

ダイロンのいつもの笑顔が、涙目になっていた。

「心配かけやがって……このままおっ死んじまうかと思ったぞ！
無茶もほどにしとけ！……でもよかった、具合はどうだ！？」

ダイロンの矢継早の言葉に返答する間もなく、扉口に立っていた女官たちが躍り上がって叫んだ。

「トキーエ様っ、ああよかった、やっと気がつかれましたのね！」

「皆ですつと祈っておりますたのよ、三日も寝ずに！ああ神様、トキーエ様をお救い下さり感謝いたします！」

「お元氣になられるまで、私たち一生懸命ご看病いたしましてよ！」

ダイロンを押さんばかりの勢いで部屋に流れ込んでくる女官たち。

泣いている召使いもいる。ダイロンは騒ぐ彼女たちを無理やり部屋から追い出し、宮廷騎士たちに扉を閉めさせる。やれやれとダイロンが息をついた頃、ひとりの宮廷騎士がトキーエに言った。

「幸運としか言い様がないよトキーエ。ゴブレットに盛られた毒は一口で死に至るほどの猛毒だったそうだ。狂気のアンファイリーは牢獄へ直行したから心配ないよ。」

その宮廷騎士は、以前マキュアリー団長に頼まれてトキーエと模擬試合をした、当時の戦闘士訓練生スーヴァ・ハンサーダだった。

「そうだぞトキーエ、おまえあれを一口飲んだらう、後遺症がでなければいいが・・・」

ダイロンも顔をしかめてつぶやいた。トキーエはようやく、いつものあの微笑みを浮かべて答えた。もう顔色もよくなっている。

「実は・・・いけないこととは知りながら、もしものことを考えて、毒消しの葉を一枚、口の奥に挟んでいたのです。聖なる水に毒を盛られていたことは、水の匂いを嗅いだ時すぐに分かりましたが、毒消しの葉を噛むのに手間取ってしまつて・・・」

毒消しの葉は頼りないほど薄い、そのわずかな絞り汁は毒消しに絶大な威力を発揮する。森に自生するものに最も強い解毒作用があるが、最近は寺院や教会などでも栽培するようになっていた。

ダイロンがハツとした。ゴブレットを手にトキーエが押し黙り、王宮神官が二度も同じ聖句を発した、あの時・・・

「それである時、時間をかけて・・・!？」

「そうなりますね・・・あの時毒消しの葉をきちんと噛まなかった

ら、私は会場中に血を吐いて、その場で絶命していたでしょう。」

宮廷騎士たちの顔が青褪める。スーヴァは信じられないといった顔で、トキーエにそつと尋ねた。

「なぜ、そこまで考えついた？」

トキーエはスーヴァを見る。

「……こういうことには慣れています。」

あっさりと、だが寂しげに、トキーエはつぶやいた。

「私をよく思わぬ方々がいれば、私が宮廷騎士になる前にどうにかしようと思うでしょう。となれば、確実に私が使うと分かっているものに細工を施すのは、ごく自然な動作ではないでしょうか。」

「予想できたことだと言うのか、この不測の事態が？」

「……経験上、警戒しておくべきだと思っていましたが、残念ながら……的中してしまいました……」

スーヴァは、空恐ろしくなった。自分より若いこの男は今まで、どれだけの経験を積んできたのだ。柔和な微笑みの裏に隠された本当の顔は、いったいどんな顔なのだ。模擬戦をした時のトキーエの太刀筋を思い返し、スーヴァは目の前のトキーエの横顔を凝視した。

「……私は、死んではならないのです。」

「え……」

ぼつりとつぶやいたトキーエに、思わずスーヴァが問い返す。だ

がトキーエはそれ以上、何を言うこともなかった。

ダイロンはフウ、と安堵のため息をつき、トキーエの肩を叩いた。

「ま・・・大した度胸だったぜ。さて、三日も寝っぱなしで腹も減っただろう、今召使いたちに何か持ってこさせ・・・」

そこまでダイロンが言ったところで、扉がどんとノックされる。

「失礼いたします、開けてくださいませ！」

「トキーエ様にお食事をお持ちいたしましたの、早く開けてくださらないとスープが冷めてしまいますわ！」

ダイロンはハア、とため息をついて笑った。

「さてと、世話焼き女たちに後を任せるか。よろしくやりなトキーエ。おまえらもそろそろ持ち場へ戻ったほうがいいな。マキュアリー団長は怒りやしないだろうが、レッセル副官に見つかったらうるさいぜ。」

「はい。トキーエ、ゆっくり養生しろよ。」

「ありがとうございます、先輩。」

ダイロンと宮廷騎士たちは、皆につこりと微笑んでうなずいた。

・・・

一方、サンテルマイン衛兵隊長室。

イデリオⅡエトワール衛兵隊長、クリオⅡノーラン第三中隊長、ワイルダーⅡパッセ第二中隊長、そして、オーガスⅡマキュアリー宮廷騎士団長。険しい顔をした四人は、小さなテーブルを囲んで話

し合いをしていた。

「今回のことは誠に申し訳なかった。あのような輩を事前に排除できなかったとは、宮廷騎士団の団長として真に情けない限りだ・・・」

「幸い大事には至らなかったのです、どうかそのようなことはおっしゃらず・・・」

騎士団長は、衛兵隊に謝罪しにきたのだった。衛兵隊からわざわざトキーエを引き抜いておきながら、危険な目にあわせてしまったのは、自分の力が至らなかったからだ、と。衛兵隊長は恐縮しながら、そんな騎士団長をなだめているのだった。

「しかし・・・あの者はどのような素性の者なのでしょう。団長殿はあの者の名をお呼びになっていたようですが・・・」

ふとワイルダーがつぶやくと、騎士団長はうなずいた。

「うむ・・・恥ずかしい話だが、奴は戦闘士訓練生の一人でな。確かにアンファイリーはかなり優秀な訓練生なのだが、変に自意識過剰になってしまつてな。他の訓練生を小馬鹿にしたり、単純な訓練で手を抜いたり、目に余る傲慢ぶりだったのだ。今回奴より先にトキーエが任官することに決まったのを聞いて激怒して、『えこひいきだ』『不平等だ』と、私に直談判にきた程だからな。」

「ではやはり、その場に彼がいたことは、別に不思議ではないわけですね。訓練生たちも任命式には列席するのですから・・・」

クリオが慰めるように言うと、騎士団長は首を振る。

「いや・・・奴は出席できないはずだったのだ。」

騎士団長はさらにため息をついて腕を組んだ。

「奴はその日、訓練場の宿直当番だった。訓練生なら誰でも宿直をせねばなんのだが、任命式その日、奴がたまたま宿直にあたっていたな。」

「では・・・その者は、宿直の任務を放り出して、任命式に潜り込んだ、と？」

「・・・いや、答えはそれほど単純ではない。」

クリオとワイルダーは首を傾げる。

衛兵隊長だけは、騎士団長の言わんとしていることを理解したようだ。

「奴をそそのかした者がいるということ・・・ですか、団長。」

騎士団長は顔をしかめてうなずいた。

「相変わらず牢獄で、きちがいのように罵詈雑言を吐き散らし続けているよ、奴は。取り調べもできないからそのまましばらく放っておいたら、奴の言葉の端々に、妙な言い回しが出始めてきたんだ。」

...

「ちきしょうトキーエ、毒で殺せないなら、俺が貴様を刺し殺してやる！刺し殺してやるぞおっ！！」

...

「せつかく・・・せつかくの機会だったのに、あんなに相談したん

だ、いい方法だと思ったのに・・・」

…

『へっ、あんな偽善者野郎なんか、いずれおしまいさ！俺が失敗したって、奴等は必ず成功するぜ、見てろトキーエ、ここから出たら、今度は俺が奴等に機会を作ってやらあ！！』

…

「・・・というようにな。」

三人は静かに押し黙ってしまった。

「昔から・・・天賦の才を持つ者に嫉妬する輩は後を絶たぬ。持つて生まれた才能を憎みながら敢え無い最期を遂げた者たちを、わたしは見てきた。宮廷騎士の立場を保ちながら、その邪な連中から彼を守るために・・・何か良案はないだろうか・・・」

唸ったまま沈黙する三人の中、ワイルダーの心境は複雑だった。

ワイルダーは以前、トキーエを貶めようと策を練った側だ。当時はそれを正義と信じていたワイルダーも、今思えばそれが子供染みた、ある意味で獣の縄張り争いにも似た、若気の至りであったと思えるようになっていた。

トキーエを同じ剣士として、一人の男として見ることができるようになったのは、あのバートラスト以降からだ。そして、かつてあれほど忌み嫌ったトキーエの双剣術は、すでにワイルダーの中で確たる地位を持って久しい。今までトキーエと闘うことを図らずも避

けてきたその真意は、負けると分かる決闘をわざわざ選ぶことはないということ、ワイルダー自身がすでに知っていたからかもしれない。ワイルダー自らそれに気付いた時、屈辱ではなく、あきらめを含んだ笑いが浮かんだのは、彼と、彼の双剣術を認めた何よりの証拠でもあった。

だからこそ、男として剣士として認めたその男、トキーエが、程度こそ違うものの、かつて自分がしたような暴虐によって命を脅かされたという事実は、ワイルダーにとって衝撃と同時に深い悔恨を呼び起こしていた。あの狂気の男と同じことを、トキーエに対して自分も行ってきたのかと思うと、どうしようもなく情けなくなってしまうかすにはいられないのだ。

大義名分をどれだけ口にしていようと、狂気の男アンファイリーと自分は、同じだったのではないか……と。

「宮廷騎士の任に見えないような『任務』というものはないのでしようか、マキュアリー団長。」

ワイルダーの心境を微妙に察知して、クリオが話題を変えようと明るいい声を出した。

「宮廷騎士として、表立って活躍することが彼の危険につながるのであれば、彼を表に出さないようにしてはどうかと……」

「そんな任務があつたかな……トキーエの剣技を生かすには、どうしても陛下の警護や戦の指揮になつてしまふし、それを生かさないうにおいては、彼が宮廷騎士になつた甲斐がないし……」

衛兵隊長が鼻をこすって独り言を言う。

「ふむ……おつ……と、そうか、あるぞ、そういう任

務が！」

ずっと黙っていた騎士団長が手を打って叫んだ。

「本当ですか団長！？」

「あるとも、素晴らしい任務が！」

騎士団長は立ち上がってマントを払い、にっこりと微笑んだ。

「いやあ、ここにきてよかった。トキーエには大いに活躍してもら
うよ、そう、戦闘士訓練場でな！」

「戦闘士訓練場……！」

騎士団長はうなずいて、クリオとワイルダーを見た。

「君達、礼を言うよ。トキーエをよく育ててくれたね…有能な指揮
官に恵まれたトキーエは、幸せ者だな。」

「は、恐れ入ります！」

クリオは微笑んで答えた。

しかしワイルダーは、一瞬息が止まった。わずかな動揺とともに、
ワイルダーは騎士団長に深々と頭を下げる。

「いいえ・・・団長殿、私は彼にとって、有能な指揮官ではありま
せんでした。」

ワイルダーは、続けて衛兵隊長にも頭を下げた。

「申し訳ありません、私は指揮官として失格です。私も、彼にひど
い仕打ちをした邪な人間のひとりなのですから……！」

「ワイリー……」

ワイルダールの様子を見た騎士団長が、突然豪快に笑いだした。

「パッセ中隊長、顔を上げたまえ。思い違いは困るな。」

「え……」

ワイルダールの沈痛な面持ちとは裏腹に、騎士団長は澄み切った青空のような笑顔で語りかける。

「優しいだけで指揮官は務まらんのだぞ。厳しい上下関係と連帯性を教え、部下の力量を的確に見極めるのも指揮官の大事な力だ。過去はどうであれ、君はそれを見極め、彼を認めたからこそ、彼が倒れたあの時とつさに飛び出してきたのだろつ。」

騎士団長はあっけらかんとした口調で続けた。

「考えてもみたまえ。君の圧力で潰れるような男が、あの猛毒を口にして生きているはずがなかるつ。パッセ中隊長、君は彼の力量を磨き上げたにすぎん。今となつては苦い思い出かもしれんが、昔のことは気にせんことだ。いいね。」

「……は、はい……！」

抱き続けてきた過去の重荷が取れたように、ようやく微笑を浮かべるワイルダール。クリオも、ワイルダールの肩をぼんと叩いて微笑んだ。騎士団長は豪快な笑い声を響かせながら、マントを翻して衛兵隊長室を出ていった。

「ダイロンが喜ぶぞ、何てつたつて、いちばんの気に入りと一緒に仕事ができるんだからな！ははは……」

最高師範トキーエ

トキーエはその週のうちに体調をすっかり整え、ようやく宮廷騎士としての任務につき始めた。騎士団長はトキーエに衛兵隊での話を告げ、戦闘士訓練場の指揮監督の任につくよう命じた。ダイロンも大いに喜んでこの話を聞いたが、トキーエは今一つという顔ををして、騎士団長に言った。

右も左も分からぬ自分がいきなり指揮監督になっても、訓練生を混乱させるだけだから、ぜひ技術指導官の任をいただきたい、と。

騎士団長は一呼吸の間考えた後、ゆっくりとうなずいた。せっかくダイロンと組むことになったのだから、訓練場総監督はダイロンに任せ、訓練生への剣技指導にあたった方が、トキーエにあっていると考えたのだ。

「いくらか研修を行ってもらうが、構わぬかね。」
「もちろんです。」

そして数か月の研修に入り、ダイロンとその他の訓練場師範たちから、指導の基本と技術を学んだトキーエ。そこでもトキーエはその才腕を見事に発揮し、師範たちから絶賛を受けたという。

宮廷騎士トキーエの噂は尽きることはなかった。闘神がサンテルマイン国王を守護するのであれば、サンテルマインは生涯安泰だと街人は皆微笑みあっていた。ちょうど戦も治まってきていた時だけに、その出来事は街に希望を持たせていた。

最後の双剣術者トキーエⅡギアムデン、当時二十四才。

そうして、幾多の季節が流れた。

ゼランとの戦は相変わらず続いており、サンテルマイン軍の兵力の半分以上が前線へ向かい、衛兵隊も入れ替わりに戦地へと赴き、協同してゼラン軍との戦に明け暮れた。華やかな戦績を上げる者もてはやされる影で、戦死者の棺が墓地へと向かう現実は依然変わらず、戦の無残さに誰もがうんざりとしていた。戦況は日々変化し、それが激化する時は、必ずと言っていいほど、兵も民衆もある言葉を口にした。

闘神。

かの闘神が戦に現れれば、勝利は常に我等が頭上にあり。

闘神と謡われたトキーエ・ギムデン、彼が宮廷騎士に任官し戦から退いて、すでに四年が経過していたが、なぜ彼が戦から退き、戦闘士訓練場の技術指導官という地味な役回りに収まったのかと、街では様々な噂が飛び交った。トキーエの宮廷騎士任命式での一件は有名で、あれほどの大事件の後、ぱったりと姿を見せなくなった彼の噂は、尽きることがなかった。

だが、ひとつだけ明確なある事実があった。

彼が指導した戦闘士訓練生、すなわち宮廷騎士は、これまで以上に素晴らしい洗練性を持った剣士として、その才腕を発揮するようになったということだ。戦場へ駆り出される宮廷騎士の中に、トキーエの指導を受けた宮廷騎士が含まれるようになって始めて、噂の真相が明らかになった。

闘神は、新たな戦の神たる逸材を、鍛え育てているのだ・・・と。

・・・

「おおトキーエ、今日は新兵がひとり来るそうだ。」

白髪混じりとはいえ、大柄な体に顎ひげを生やした迫力満点の訓練場総監督長ダイロンがトキーエにつぶやいた。そこは監督長詰め所、小さな机や椅子が並んでいる。トキーエは剣の柄を磨きながらダイロンを見た。

「こんな時期に、ですか？」

「うむ。わしも変だと思うが、何せビレニツタ寺院のお偉方は、何を考えてるのかさっぱりだ。そこいらのならず者の剣士より余程タチが悪い。」

そこでふいに扉を叩く音がし、サンテルマイン衛兵隊の兵士が入ってくる。

「お寛ぎの所失礼いたします、新しい訓練生を連れて参りました。」

兵士は後ろに下がり、代わりにひとりの青年を押してよこした。

「！」

ダイロンとトキーエは揃って目を見張った。

正式な訓練を受けていた剣士とは思えない、ぼさぼさの髪に薄汚れた衣服。そして何と、手には大きな木製の械がはめられているではないか。

「ビレニツタ寺院長からの書状でございます、どうぞ。」

兵士はダイロンに小さな白い筒を渡すと、一礼して一步下がる。

トキーエはダイロンとともにその書状を読んだ。

前略 戦闘士訓練場総監督長ダイロン「フォーディエ殿

今日そちらにつかわしたその戦闘士は、諸々の事情により我が寺院で預かることが出来ません。しかしながら、その者の技術適性が他より数倍優れておりますことは、寺院長たるわたくしが保証いたします。我が王よりすでにお許しも得ておりますので、どうかそちらの訓練場にて鍛練ができますよう、宜しくお取計らいのほどをお願いいたします。 - ソフィア・ビレニツタ寺院長 -

「諸々の事情？」

「分かりました、どうもご苦労さまでした。」

「はっ、失礼致します。」

若い兵士はきびきびと去っていった。

トキーエは眉をひそめて首をひねるダイロンを尻目に、その戦闘士の前に立って手の械を見た。

「こんな大きな械をつけられるなんて・・・詳しい事情はどうでもよいことですが、ここに来るのは嫌でしたか？」

トキーエは戦闘士に微笑みかける。戦闘士はそこでようやく、ぼさぼさの髪の間から、牙をむく獣のような目でトキーエを睨んだ。

「・・・闘神トキーエってのは、おまえのことが・・・」

「ええ、私がトキーエです。ようこそ訓練場へ。」

戦闘士は突然、械に封じられた両手を勢いよくぐんと振り上げた。トキーエはつい、と後ろに下がってそれを避ける。

「ようやく会えたぜ、トキーエ。ギアムデン！俺は貴様に会うためだけにここに来たんだ！！」

男はトキーエを睨み、気合いととも腕に力を込めた。

「ぬあああああつ！！」

木製の大きな械がめきめきと音を立てて弾け飛び、破片が辺りに散らばって落ちた。邪魔な枷がなくなった手首を軽く揉みほぐしながら、男はにやりと笑ってトキーエに叫ぶ。

「俺はジャリク・ターラント、メイベルから来た。貴様の無敗伝説をこの俺様が塗り替えてやる、覚悟しろ！」

ダイロンはそれを横目に見ながらも、男に声もかけず、たしなめすらしない。というより、その緊迫した状況を、ダイロンはまるで無視していた。白い筒を机に置いて、何事もないように立ち上がる。

「じゃあなトキーエ、訓練場で待ってるぞ。」

男、ジャリクは、ダイロンのあまりの無表情さにカツとなって振り向く。すでに閉じられた扉が答えを返さない代わりに、トキーエが口を開いた。

「ジャリク、ですか。午後の訓練が始まります、そろそろ訓練場に行きましょうか。ついでに施設内も案内しましょう。」

「ふざけるな、逃げようつてのか!!」

食らい付く勢いのジャリクの前で、まったく冷静な顔のトキーエは少し考えてから、あの柔和な笑みを浮かべた。

「分かりました、ではこうしましょう。」

両手を広げ、腰の二本の剣をテーブルに置き、マントを外すトキーエ。

「この小さな詰め所の中で、一戦交えてみましょう。私があなたを負かしたら、素直に戦闘士訓練生として習練に参加して下さい。あなたが私を負かせたら、あなたの望むようにして結構です。好きに街中をふれまわって最強とやらの名乗りを挙げて下さい。」

「望むところだ、貴様を倒して、俺が最強の戦士になる!」

その言葉が終わりもしない内から、ジャリクは猛烈な勢いでトキーエに突っ込んできた。トキーエはすらりとそれをかわして、ジャリクの背後に回る。

「なっ……」

恐ろしいまでの身の速さ、勢いづいてテーブルを弾き倒しながらも、ジャリクは我が目を疑った。一方のトキーエは、テーブルが音を立てて倒れ転がる間、ずっと静かにジャリクを見つめていた。

「なるほど……ジャリク、短剣を使いなさい。私は素手で結構で

すから。」

ムツとするジャリク。

「差をつけようつてのか・・・後悔するぜトキーエ、ズタズタにしてやる！」

トキーエは微笑みながらジャリクに短剣を投げた。

ジャリクはそれを受けると同時に切り掛かってくる。決して遅くはない、むしろかなりの早さといえるその剣さばきの先を読み、トキーエはすいすいとそれをかわしていく。

「へっ、闘神てのは逃げ回るしか脳がねえのかよ!!」

語気を荒げるジャリクに、トキーエは微笑を湛えたままつぶやく。

「あなたの悪いところを見えています。確かにあなたは力も強いようだし、剣の速さもある。でも・・・」

トキーエは、踏み込んできたジャリクの短剣の切っ先をふわりと巻き込み、掌で素早くジャリクの鼻先を弾く。うめいて飛びすさるジャリク。

「あなたの剣には柔軟性がありません。力で押すだけでは、今のようにかわされた瞬間が最大の命取りになる。せっかくの勢いのよさが台無しです。」

「くそっ、減らず口を!!」

ジャリクは叫びちらして短剣を振り回してくる。トキーエはその

刃が迫る一瞬、それまで発していなかった猛烈なまでの闘気を帯びた。ギョツとして一瞬怯んだジャリクの腕を、トキーエは瞬時に脇へ回り込んで固めてしまっていた。

「ばっ・・・馬鹿な、今は・・・!!」

「気迫を表に出しつ放しでは、敵に悟られ身構えられて、思わぬ苦戦に陥る危険が生まれます。でもそれ以前に、ジャリク、こんな剣捌きではこの先いくつ命があっても足りませんよ。」

「くっそお、なめるなあ!」

ジャリクはトキーエにつかまれた腕を放そうと懸命にもがいた。しかしトキーエの手は食い込まんばかりの強さで、ジャリクの腕を締め上げている。あの大きな枷を砕いた力を持っても、まるで通用していない。

「このくらいも外せないようではいけませんね。勝ちを焦って訓練を怠っていた証拠です。さあ、そろそろいいでしょう、訓練場に行きましょうか。」

「待てっ、俺はまだ負けてない!!」

「あなたが望むなら、勝敗をより決定的にしても構いませんよ。でも今決着をつけるより、私を始終狙える立場・・・戦闘士訓練生になった方が、一番の近道だと思いませんか。」

「・・・!!」

トキーエは、挑戦的な笑みを浮かべた。少なくとも、ジャリクに

はそう見えるまなざしだ。そしてそれは、その時点でジャリクの負けを宣言したようなものだった。かきむしるような思いで、それを認めぬわけにはいかないことを、ジャリク自身すでに悟ってしまっていることも、動かしがたい現実であった。

「ここの訓練生には、あなたのような方がたくさんいます。みんな私を負かすことを目標に、日々習練に励んでいるのです。」

事実、闘神トキーエが戦闘士訓練場の技術指導官になってから、宮廷騎士を志し戦闘士となるために血眼になる若き剣士たちが急増している。噂の双剣術者に教えを受けたいという者から、それを負かして最強者になりたいという者まで、その理由は実に多彩だ。

「あなたは勝敗だけを目当てにして、ブレニツタ寺院以外の戦士にも無差別に決闘をしかけていたのでしょうか。ブレニツタ寺院は戦士を育成する場である前に、厳粛な法に則った聖なる場所です。あなたのような『型破り』な剣士は置いておけないと思うのも、無理からぬことですね。」

ジャリクはトキーエを睨みつけるが、その顔には、ジャリクがこれまで受けてきたような差別や、蔑みはなかった。むしろ、おまえは大した奴だと言いたげな関心のまなざしが、ジャリクを見つめていた。

「寺院が手をやくほどの猛者ならば、これからの訓練もついてくれるでしょう。訓練は訓練としてきちんとやってもらいますが、それ以外の時間であれば、いつ私を狙っても構いません。最強を目指すあなたにとって、素晴らしい好条件だと思いますが？」

トキーエは微笑んで手を放した。急に放されて尻餅をつくジャリ

クだったが、何も言わずにトキー工を見た。相変わらずの獣のような目で。

「分かってくれたようですね、みんな待っていますよ。行きましようか。」

トキー工は監督長詰め所の扉を大きく開け放った。

宮廷騎士の本質

その日から、戦闘士ジャリクと最高師範トキーエの闘いが始まった。

中盤まで進んでいる訓練に追い付くべく、ジャリクに厳しい短期集中猛特訓を課すトキーエ。ビレニツタ寺院での訓練を中断したままになっていたことも手伝って、その特訓は夜遅くまで容赦なく行われた。ジャリクは始終悪態をつきながらも、その猛特訓の課目を必死にこなしていった。

「さすが、ビレニツタ寺院長が太鼓判を押すだけありますね。」
「その女みてえに白い横っ面をブツ飛ばすためだ、何でもやるさ！」

しかしジャリクは訓練に入ってから、猛烈な忙しさもあつてか、無理にトキーエにかかっていくことはなかった。粗暴とはいえ剣士の道を選んだジャリクにとって、訓練によって学ぶべき部分は数多く、興味ある課題に真剣に取り組むジャリクの姿が、時折見られるようになった。

「トキーエ、ジャリクの素質はどうだ？」

詰め所でお茶を飲みながら、ダイロンがトキーエに振り返る。トキーエは少し考え、言葉を選んでつぶやいた。

「・・・放浪の剣士や軍の兵士としてなら、最高の逸材でしょうね。」

トキーエもお茶を一口飲んだ。

「そろそろ自覚が出てもいい頃合ですが、ジャリクにはまだ、宮廷騎士になるという気構えがありません。それに、宮廷騎士とは何なのかも、すでに忘れてしまっているようですね。」

「困った奴だ・・・訓練はもう終盤だし、のんびりしてられないな。」

「こればかりは、彼自身に答えを見つけさせる以外に、方法はありません。少し荒っぽくしないと駄目なようですね。」

「奴にできると思うか？」

心配そうなダイロンの声に、トキーエは微笑み返した。

「ジャリクなら、大丈夫でしょう。」

ある日、朝稽古をしに訓練生が訓練場に集合すると、トキーエがひとり、高い塀の上に黙って立っていた。他の訓練生には見慣れた景色らしく、誰もそれを不思議に思っていない。後から訓練に参加したジャリクだけが、その初めての光景に目を丸くしていた。

「何やってんだあの野郎・・・」

「まあ見てろ、すぐに分かる。」

ジャリクのそばで、小さな丸パンの入った籠を持つダイロンがつぶやく。トキーエは両手に細みの刃を持っていた。朝日がようやくさしてくると、その刃が美しい赤い光を放ち出す。訓練生たちが集まって、食い入るようにそれを見ている。

朝日に誘われ、どこからともなく鳥がやってくる。鳥たちはそれぞれにさえずりながら、まるで木にでも止まるように、自然にトキ

トキーエの体に羽を休め始めた。トキーエは静かに目を開け、ふわふわとまるで踊るように両手を動かし、足を運ぶ。

その間、鳥は一羽も逃げない。

「あれだけ動いて、鳥が逃げないのか・・・！」

「気配を完全に消しているからさ。今のあいつは森で揺れる木と同じだ。」

ダイロンが丸パンの入った籠を取りだし、トキーエに向けて放った。トキーエはまるで違う方を向いたまま、赤い光を一閃する。丸パンが見事に剣に突き刺さり、鳥たちが一瞬ばたばたと羽ばたく。だがそれらはすぐに、またトキーエへと舞い戻って行く。少しも恐れずにとまったままの鳥もいた。

ダイロンが投げるパンを次々に剣に刺し、トキーエはそれを静かに堀に突き立て、ようやくふわりと鳥を追いつく。鳥たちは飛び立ち、トキーエが堀から降りるのを見届け、剣に刺さった丸パンを啄み始める。空になった籠を抱え、ダイロンが鳥たちを見た。

「・・・この間から鳥の数が少ないようだな、トキーエ。」

「ええダイロン。ジャリクの気配が強すぎます。」

トキーエがジャリクを見る。不意の視線に戸惑うジャリク。

「俺の・・・気配？」

「そうです。今後気をつけなさい。」

「な・・・何をどう気をつけろってんだよ！」

トキーエは鋭い目でジャリクを睨んだ。これまでに見たこともな

い鋭い視線が、ジャリクの目を射抜く。思わず息を飲むジャリクに、トキーエは厳しい口調で言った。

「戦場の兵ならまだしも、今あなたがなろうとしているのは宮廷騎士。宮廷騎士とは猛々しいだけでは失格です、自分がここにいると敵に宣言しているようなものだ。宮廷騎士に必要なのは荒っぽさではない、冷静な判断と的確な行動、鋭い洞察力です。」

ジャリクを指差すトキーエはさらに言った。

「皆から遅れた訓練の分、あなたは瞬く間に取り戻して、訓練生として一流の技量を持つに至りました。でも精神修行だけはジャリク、あなたは残念ながら見事に落第点だ。これだけ広い空間にあつて、あなたの気配だけが一際突出している。人の姿を見慣れ、その気配さえ感じなれている鳥たちが、あなたの気配に怯えていた。」

「な・・・何だと・・・!？」

「今から一週間、あなたは訓練に参加しないで結構です。その一週間で自分の気配を消すことを、自分の力で覚えなさい。それまでにできなければ、残りの訓練を続ける資格はない。即刻訓練場から出ていってもらいます。」

「ぐ・・・!」

「訓練生たちに聞いてもいい、誰に聞いてもいい。でも私は何も教えません。あなた自身が探り出さなさい、いいですね。自分の気配がどれほどの勢いで流れでているか、よく考えてみてください。」

トキーエは唇をかみしめるジャリクを残し、朝の駆け足に出掛け

ていった。

ジャリクは猛烈な怒りに包まれながら、焦燥感に頭を掻き毟った。理解できる範疇での説教ならうなずきようもあるが、ジャリクにはトキーエの言う『気配を消す』ということの意味が分からなかったのだ。

『じつと敵を待ちぶせることが『気配を消す』ことそのものじゃないのか？あの時俺は黙って鳥を見ていたはずなのに、鳥はその俺の気配に怯えたというのか。もっと違う何かがあるのか、俺の知らない何かが……』

しかしそう考えれば考えるほど、ジャリクはいらいらと落ち着きをなくしていった。このままでは一週間など瞬間に過ぎてしまう。それまでに『気配』の謎を解かないと、二度とトキーエを狙う機会はない……ジャリクは必死にその答えを探そうとした。

「気配か……そうだなあ、僕は特に気にかけてことはなかったなあ……」

「気配を消す訓練？そんな訓練はしなかったぜ。」

「俺も師範を越えたくて色々やってきたけど……気配がどうのとか言われた覚えはないよ。」

ジャリクは同期の訓練生仲間に聞いて回ったが、どの訓練生もまるで『気配』というものを意識していない回答をよこした。焦燥感に蝕まれたジャリクは監督長詰め所に飛び込み、訓練場監督ダイロンに向かって、嘯みかかるような勢いで詰問した。

「・・・そんなに教えてほしいか。」

「当たり前だ、俺はトキーエを倒す、倒して見せる！こんなところでくすぶって絶好の機会をなくす訳にやいかねえんだよ！！」

ダイロンは大きく息を吸い込み、それと同じ大きな溜め息をついた。そしてやれやれとでも言いたげな顔でジャリクをじっと見つめ、ぷいと背中を向けてしまった。

「どうやらおまえはもう落第が決まったようだな。」

「どういうことだ！い、一週間はまだ終わっちゃいないぜ！」

ダイロンは後ろ向きのまま、木の器に盛られた乾燥果実を口に放り込む。ジャリクは黙ったままのダイロンにさらに食いつこうとする。

と、不意に肩を叩かれて視線が宙に浮いた。

「あ・・・っ!？」

大きな地響きを立てて、ジャリクは綺麗に投げ飛ばされていた。受身を取る暇もないほど、それは唐突に起きた。

キョトンとするジャリクの脇には、いつの間にかトキーエが立っている。

「ダイロン、今日の夕食はあなたの好きな羊の煮込み料理ですよ。そろそろ食堂へ行きましょう。」

「おおそうか、そいつはいい！今日のワインは一段と美味しく飲めそうだな！」

ジャリクが身を起こしかけてトキーエを睨むと、ダイロンが振り

返って首を振って見せる。瞬時にジャリクは、トキーエの手が剣の柄にかかっているのを見た。どっと冷や汗が出るのを感じる。

ジャリクは閉じられた扉に向け、さっきのトキーエを思い起こした。

・・・存在を感じなかった。

気配というものがまったくない。ずっと前からそこにいたようで、すでにそこからいないようで。あいつは本当に人間なのか、ジャリクは温和なトキーエの顔を思い出し、背筋が冷たくなった。

・・・

それから四日ほどたったある真夜中、ジャリクはそつと窓から抜け出し、訓練場の広場にやってきた。暗い訓練場の一角、そこには訓練指揮官としてのトキーエではなく、ひとりの宮廷騎士としてのトキーエがいる。

誰よりも人一倍訓練を積み、日々怠ることなくもくと練習用の重剣をふるトキーエ。ジャリクはその姿を、生真面目すぎて虫酸が走ると罵っていたが、日々自分の訓練を積むにつれ、一日が一日では足りないほどの習練を積みかさねるトキーエをいつか、半分呆れて、半分尊敬して見るようになっていた。

『今俺は奴を見ている・・・しかし、もし目を閉じたらどうだろう・・・』

ジャリクは目を閉じる。

剣が空気を切り裂く音、樹々の葉ずれの音、遠くから響く水の流れの音・・・感覚器で捕らえることのできる範囲内、その中でジャリクは、そこにいるはずのトキーエを捕まえることができなかった。

「・・・!？」

自分の感覚に驚いて目を開くジャリク。剣を振るう音の中、トキーエはそこにいる。目の認識でしか、彼を捕らえることができないのはなぜだ？

ふと、剣の音が止んだ。

「ジャリク。」

突然の呼び掛けにぎくりと身を縮めるジャリク。かなりの距離があるにも関わらず、トキーエは茂みの中のジャリクの方向を真っ直ぐに見つめている。

ジャリクはおずおずと立ち、トキーエのもとに歩んで行った。

「こんなに遅くどうしました。明日にさしつかえます、早くお休みなさい。」

「・・・」

決まりが悪くて、ジャリクが何も言い出せずに黙っていると、トキーエは小さく微笑み、自分の持っていた二本の重剣のうち一本を、ジャリクに投げてよこした。

「私は何も教えませんよジャリク。でもあなたが、私からそれを探り当てるのは勝手です。私は練習を続けますから、好きになさい。」

トキーエはそう言うと、片手で素振りを始める。

ジャリクは手渡された重剣の重みに改めて驚いた。あの細腕でこんな重さの剣を、あんなに早く振り回していたのか！

ジャリクはそのずっしりとした剣を見、次いでトキーエを見た。

二振りの剣を操る双剣術の使い手トキーエ。この重剣を二本も軽々とこなす腕ならば、戦闘用の軽い剣など、自分の体の一部も同然であるう。

「・・・」

ジャリクはいつの間にか、同じように重剣の素振りを始めていた。トキーエを見ながら、初めは両手を使う。それでも結構な負荷がかかって辛い。トキーエは黙々とそれを続ける。負けてなるかとジャリクも続ける。しかしそのうちに、自分の視野に他の存在がなくなっていくた。

風も、樹々の揺らめきも、ふくろつの鳴き声も、景色でさえ、ジャリクの感覚から消え去っていくた。汗だくのまま剣を振るジャリク。自分のはく息と、胸の鼓動だけが、今ジャリクの感じるすべてであつた。

不意に、その感覚の虚無に異質の何かが入り込んだ。

ジャリクはハッとして迫りくるものを受け止めた。そこでようやく、自分の回りの景色、音、風のすべてが戻ってくる。手にしたものに目をやると、受け止めていたのは、トキーエの拳だつた。

トキーエがにこやかに笑つた。

「ジャリク、どうでしたか？」

「え・・・」

「集中し、無意識になることで、余計な考えに煩わされなくなる。闘っている時に考え込んで、手元を鈍くさせてしまう一瞬は命取り

です。集中するのは剣士として当たり前ですが、宮廷騎士は、戦場とはまた別の緊張、恐怖を持たねばなりません。兵士の敵は兵士と決まっていますが、宮廷騎士の敵はそういった姿すら見せない、「闇色の剣士」なのです。時には暗殺者であり、盗賊であり、裏切り者である、あらゆる顔をした千変万化の闇です。」

「・・・闇色の剣士・・・」

ジャリクは思い出した。

ソフィア・ビレニツタ寺院で、寺院長の最初の訓話の中、宮廷騎士について述べた言葉に、トキーエの言う『闇色の剣士』があった。敵軍の兵士と対するのみならず、あらゆるものから王を守るという使命を帯びた宮廷騎士は、それらの敵を闇色の剣士と呼ぶのだ、と。

「今あなたはすべての邪念を払い、剣を振ることだけに集中し、周囲の樹々と一体化した。気配を消すということは、自分の存在を他と同化させること、周囲の流れに溶け込むこと、すなわち『無心』ということですよ。」

「無心・・・」

「そうです。剣術とは体が覚えるもの、頭で考えてから出すものではない。戦闘士ともなればそれはさらに研ぎ澄まされ、磨かれています。無の状態で敵に出くわしても、それは心理的に有利に働きます。訓練生たちはきちんとした課程でそれを無意識に習得しますが、あなたの場合は特殊な例です。早くから勝敗にこだわった戦い方を身に付けたせいで、無心よりも闘争心が勝ってしまい、無の状態になれずじまいで今日まで過ごしていた。今ならその意味が分かると思いますが、どうですか？」

ジャリクは素直にうなづく。

「あなたは何か集中しながらも、いつも違うこと・・・そう、例えば私を打ち負かすことなどを色々考えていたのでしょうか。それが、怠るということに繋がるのです。これも・・・分かりますね。」

トキーエの微笑みの前に、ジャリクはただうなづくばかりだ。

「精強な肉体と、研ぎ澄まされた剣技。普通の剣士はすでにこれを得ています。私たち宮廷騎士に求められるのはそのさらに上、瞬間の正確な判断力、鋭い勘、迅速な動作。そして、この集中力、無の心です。」

「無の心・・・」

「もう難しくないはずですよジャリク。普通に日々を過ごしてごらんなさい。素直に風を感じ、音を聞きなさい。回りの流れに同化しながら、内に大いなる大河を秘めた、静かな小川のせせらぎとなりなさい。」

ジャリクは目を閉じる。

今まで聞こえなかったものが聞こえてくる。虫の声、風の音、樹々のきしみ。そのすべてに聞き入るうち、ジャリクは自分が空間そのものであるかのように、不思議な緊張感とともにくつろいだ気分になる。

そこへ、一閃する感覚が走る。

ジャリクは心で捕らえるより早く、素早くかがんでそれをかわしていた。土を踏む音が響くと、聞き慣れた大きな笑いが耳に届いた。

「はっはっは、会心の回し蹴りだったんだがな、かわされちまったか！」

「総監督長・・・いつの間に？」

身を返して驚くジャリクに、ダイロンがあのもう豪傑笑いで答える。

「それは俺の台詞だジャリク。よく短時間でここまでやれたもんだ、さすがトキーエが見込んだ男だけはあるな。」

ダイロンはにやりと笑ってトキーエとジャリクを交互に見る。ジャリクがその言葉に思わず振り返ると、トキーエは何もなかったように優しく微笑んでいた。

「すいませんダイロン、早く起こしてしまつて。」

「いやいや、ちょうどいい頃合さ。ジャリクと一緒に朝飯をとりに行かなきゃならんからな。おい、こいつを持ってついてこい。日の出までに鴨を二十羽捕まえるんだ、この弓でな。後から二、三人ついてくるはずだ、先に獵場に行つていようぜ。」

「え・・・」

「行つてきなさいジャリク。自分が今の瞬間どれだけ成長したか、あなた自身が確かめてくるといい。もう鳥を怯えさせることはないでしょうから・・・」

ジャリクはぼんやりとしていたが、ダイロンに急かされて弓を手に訓練場を出ていった。トキーエは微笑んでそれを見送り、ダイロンが手を振る。

ジャリクはようやく我に返り、そつと、トキーエに向けて一礼していった。

伝説となった男

それからジャリクは少しずつ変わっていった。

宮廷騎士になるのだという自覚が出てきたのか、粗暴だった言葉使いや態度が次第に落ち着いて、戦闘士としての素質をめきめきと上達させていった。それとともに剣技や体術にも磨きがかかり、訓練にも率先してついてくるようになる。そこにきてようやく、ジャリクはトキーエを狙うようになった。

言葉を交わすことは少なかったが、トキーエは相変わらずの優しい微笑みで、ジャリクの成長を見守った。ジャリクもそのまなざしにようやく気付いたのか、照れくさそうに自分の精一杯の力を出すようになった。

しかし、そんなある日のこと。

トキーエが訓練場に現れず、朝の早いダイロンでさえ一度も顔を見せない一日があった。訓練生たちは他の訓練場監督補佐から訓練指導を受け、特にその日を気にすることはなかったが、その日からしばらく、トキーエとダイロンが来ることはなかった。訓練生たちは勝手の違う監督補佐の指導を渋々と受けながら、彼等の帰りを心待ちにしていた。

そして何日かが過ぎ、ふらりとダイロンが戻ってきた。

「お帰りなさい、総……監督……！」

そのダイロンを見た訓練生たちは、皆一様に目を見張った。

あの大柄なダイロンが、一回りも二回りも小さくなって見えたの

だ。訓練生たちは我先にとダイロンに駆け寄り、その変わり様から今だ現れないトキーエのことまで、嵐のように詰問した。

青くやつれた顔のダイロンはしばらく、訓練生たちの顔を見回して口を閉ざしたままだった。噛み締めるように口を歪ませ、じつとその声を聞き続けた。その異様さに訓練生たちがようやく気付いた頃、ダイロンは静かに口を開いた。

「……トキーエが………死んだ。」

凍り付くような冷たい戦慄が駆け抜ける。

「そんな馬鹿な!!」

誰ともなく、同時に声が上がった。ダイロンは首を小さく振った。

「嘘じゃない……あの日、悪夢のようなあの日に……」

…

その時期、ちょうどゼラン軍との戦闘の激化から、宮廷騎士の三分の一が出払って戦闘に加わっていた。トキーエはその穴埋め役として、交替制で王宮の見回りに参加することになり、訓練終了と同時に王宮内の詰め所に入る日々を送っていた。

本来最前線に出て戦闘に加わるべきであったが、訓練場技術指導官としての任務も重要であるから戦線参加は辞退せよと、宮廷騎士団のマキュアリー団長から言い渡されていたトキーエは、技術指導官という立場上、本来の任務ではないこの見回り役を、かつて出ていたのであった。

その運命の日、トキーエは朝のまだ暗いうちに王宮内の見回りにでて、ふと異質の気配に気が付いた。

「……これは……！」

それは実に巧妙に周囲に溶け込み、流れを乱していなかった。しかしその静かな気配に鋭い針のような殺意があるのを察知したトキーエは、仲間の宮廷騎士に緊急に集合をかけさせ、単身王の間に駆け出した。

トキーエは王の間から物音がするのと同時に部屋に躍り込んだ。そこには黒い服に身を包んだ暗殺者たちの姿があった。

今まさに、王に向けて黒い鋼の剣が無数に振り降ろされようとしている……

「陛下!!」

一瞬だった。

いくらトキーエが双剣術の使い手であっても、迫る無数の刃から、自分の身ならいざ知らず、無防備の王を守るなどできようはずもない。

その時トキーエが瞬間の判断で出した答えは、その場で最も大きい盾……自分の身で、王を守ることであった。

「ぐはっ……!」

鈍い衝撃と同時に一瞬、トキーエの体が浮いた。

黒い鋼の刃はトキーエの体を突き抜け、その刃先からは血が滴り落ち、王のすぐんだ足元にたまっていく。王はその暖かな恐怖の前に、瞬きも忘れて、壮絶なトキーエの後ろ姿を凝視した。

暗殺者たちが低く笑い声をもらし、剣を一斉に引き抜いた。

トキーエはぐらりとよろめいた。血がおもしろいように吹き出た。

だが、トキーエは倒れなかった。

「おおあああつ!!」

トキーエは氣勢を上げ、夥しい血を流したまま敵に突っ込んだ。その様はまさに闘いの神、鬼神そのものであった。八人の暗殺者は見る間に切り刻まれ、厚い絨毯に血の模様を染めた。

一瞬で絶命してもおかしくないほどの深手なはずのトキーエは、荒ぶる闘神となりながら、それでも王をかばうことは忘れず、最後の一人も嵐のような勢いでとどめを刺した。

：

急いで駆け付けた宮廷騎士たちは、燃えるような朝焼けの中で、王の間の惨状に息を飲んだ。

王が傍らに立ちすくみ、トキーエを見ている。

騎士たちも、トキーエを食い入るように見つめた。

そこには、闘いの姿勢を崩さず、今にも斬りかかってきそうなトキーエが、血まみれのまま微動だにせず佇んでいた。

もうすでに息はなく、・・・彼は絶命していた。

その壮絶な最期に、宮廷騎士たちはがっくりと膝をつき、泣いた。
王もまた、静かに涙を流した。

燃えるような朝焼けだけが、そっとトキーエを包んでいた。

・・・

ダイロンは話しながら、目頭を押さえて泣いていた。
訓練生たちも声を殺し、泣いた。

唇を噛み締める者、肩を抱き合って泣く者。黙って拳を握り締める者・・・

「う・・・嘘だ、嘘だ嘘だ！トキーエが死ぬもんか、あの闘いの神が死ぬもんか・・・絶対に死ぬわけねえんだ！！」

「ジャリク・・・」

「そうだろう、みんなそうだろう！！ちきしょう・・・嘘だ、そんな・・・そんなことが、そんな・・・！頼む総監督長、嘘だって、冗談だって言って笑ってくれよ！！頼むから！！」

ジャリクは叫び散らしながら、見慣れたダイロンの顔を凝視した。
貫禄ある巨体のダイロンが、急に老け込んでしまった・・・ずっと、ずっと小さく見える。

嘘だと思いたいのに、こんなダイロンを目の前にしては、その思いすら悲しみに引き裂かれそうだ。

「失礼します・・・」

そこへ、ひとりの宮廷騎士がやってきた。

「フォーディエ総監督長、彼の・・・トキーエの部屋にこんなものが。」

宮廷騎士は大きな藤籠をダイロンに手渡した。その宮廷騎士はトキーエと同じ頃に宮廷騎士になったという。

宮廷騎士は訓練生たちを見回した。

「・・・素晴らしい戦闘士たちですね、彼が心血を注いで育て上げただけある。」

宮廷騎士は静かにつぶやいた。

「総監督長、彼は常々言っていました。訓練場の技術指導官になったのは、騎士団を強くするためじゃない、ひとりひとりを強くするためだ、と。若い命ほど瞬間に失われていくこの乱世にあって、限りある生を生き抜くために彼等を強くすることが、自分の天命なのだと・・・」

ダイロンは藤籠の蓋を開ける。すると中から、ふわりと緑の匂いがした。

「ああ・・・この匂いは傷薬ですね。ここから薬草の採れる森まで相当あるのに、いつの間にこんなたくさんの薬を・・・」

宮廷騎士はたくさんの小さな布袋を前に、寂しげに微笑む。ダイ

ロンは思い出したようにつぶやいた。

「そうか・・・もうすぐおまえたちの訓練の修了日だもの・・・あいつ、こっさりこんなもの用意してやがったのか・・・あいつ・・・」

ダイロンは何度も目頭を押さえながら、ひとりひとりにそれを渡した。

緑の匂いはさわやかで、トキーエのあの優しい微笑みを思い出させる。布袋にはそれぞれ、訓練生ひとりひとりの名前が書き込んであった。ジャリクもそれを受け取り、中を覗いて見る。中には深緑色の薬の他に、小さな紙切れが入っていた。

「・・・？」

それは、トキーエが皆に向けて贈った最期の言葉であった。

『剣を受ける時は右脇を締めることを忘れずに』

『敵と相まみえた時は目をそらさないこと』

『自分に自信を持って、過剰にはならぬよう』

訓練生たちは何度もうなずきながら、その言葉を読み返した。ジャリクが取り出した紙には、こう書いてあった。

『素直に風を感じれば恐れるものはない』

ジャリクは、泣いていた。

トキーエの微笑みが蘇る。

もうすぐ一人前の宮廷騎士として、その微笑みの前に違う自分を見せることができたのに。

ジャリクは声もなく泣いた。

トキーエを負かして最強者になることなど、もうどうでもよかった。

自分の力も弱さも理解し、信じてくれたトキーエはもういない。

「ト……トキーエ……師範……」

ジャリクはただただ、涙が止まらなかった。

皆、小さな布袋を持って、彼方の空にトキーエの後ろ姿を見送るのみであった。

……

葬儀が終り、その何日か後に戦闘士訓練修了の儀式が行われた。

美しい銀の紋章は、サンテルマイン王家の象徴である。ダイロンは今期を最期に、訓練場監督を辞することに決めた。訓練生たちはサンテルマインの主要拠点にそれぞれ配置されることになり、数人はそのまま王宮に残ることとなった。その残留組の中に、ジャリクの姿がある。

ジャリクの横顔は、初めて訓練場でトキーエとまみえた時と、比べ物にならないほど精悍に、凜々しくなった。トキーエを倒し最強者の名乗りを上げることよりも、もっと大切な何かを確実に学び取

ったジャリクの心には、宮廷騎士としての誇りと信念が胸一杯に溢れていた。

儀式の終了が近付く。

王自らが高々と掲げた二振りの剣を、静かに赤い箱に収めて蓋をし、祭壇に置いた。澄んだ鐘の音が、トキーエとの最期の別れを奏でる。号令とともにすべての騎士、剣士たちが、祭壇に向けて最敬礼する。マキュアリー宮廷騎士団長は最敬礼の後も、しばらく、二振りの剣が眠る赤い箱を、じっと見つめ続けていた。

鐘の音が止む頃、そこには新たな闘いの日々に飛び込む、若き精鋭の姿がある。

トキーエの意志は静かに、だが力強く後世へと受け継がれたのだ。

その後、サンテルマイン国王は、高名な彫刻家ダイミトーエを宮廷に呼び寄せた。素晴らしい功績を残し、命をかけて自分を守った闘神、トキーエの石像を、王室から見える中庭に建てたいと考えてのことだった。彫刻家ダイミは、その申し出を二つ返事で快く引き受けた。

その時王はダイミに、こう申し付けたという。

『彼の瞳は、必ず閉じさせてやってくれまいか……』

闘神トキーエの瞳に、再び戦の炎が見えぬように。

悪しき光が、魂となったトキーエを妨げることがないように。

闘神を、安息の眠りに誘うために。

…

トキーエの悲報は各国に渡り、人々の誰もが彼を悼んだ。

サンテルマイン国王は、ナロフの街のトキーエの生家と、バートラスタの主アルベルトへ、直々に書状をしたためた。

トキーエの生家では、年老いた母の代わりに嫁いだ姉がサンテルマインを訪れた。また警備隊副隊長補佐フェロー・トヴァシュトリも、彼の幼馴染みとしてトキーエの姉と一緒に王宮へ訪れ、墓標に花を捧げていった。

遙か北のバートラスタの主アルベルトは、王からの書状を受け取ると、すぐさま馬車を駆ってサンテルマインに飛び込んできた。彼の墓標の前で、アルベルトはしばらく言葉もなく立ち尽くした。ハトリック・ジャスターニの形見である絵筆を手にしたまま、彼はしばらくその場を動かなかったという。

宮廷騎士団のみならず衛兵隊もトキーエを悼み、皆マントに黒いリボンを付けて数日間の喪に服した。クリオとワイルダーは、トキ

「工のあまりにも早すぎる死を悔やみ、未だに信じられないと嘆いた。普段の姿から想像もできぬ悲愴なその様子が、衛兵隊員たちの悲しみを誘っていた。

ダイロンは戦闘士訓練場の総監督長を退いてから、サンテルマイン城下町の一角に腰を落ち着け、武闘研究家としての日々を送る決心を固めた。だが彼のもとを訪れて指導を請う、兵士や剣士の卵たちは後をたたず、彼が平穏な生活を送るのはまだまだ先になりそうだった。

そうして、一年が過ぎた。

永久の懐い

闘神トキーエが天に召されて、ちょうど一年目のその日。
彼の墓標の前に、五人の剣士が集まっていた。

「お久しぶりです、フォーディエ様。」

「これはパッセ中隊長・・・ご活躍は聞いとります。」

「君は・・・たしかナロフ警備隊の？」

「フェロー」トヴァシュトリにございます、ノーラン中隊長。」

「・・・見るトキーエ、未だにおまえを懐う剣士がこんなにいるんだぞ。この花束は宮廷騎士団からだ、受け取れ。愛弟子ジャリクの名もあるぞ。」

大きな花束を抱え、最後につぶやいたのはオーガス「マキュアリ」宮廷騎士団長だ。石造りの十字架にそつと花束を捧げるオーガスと入れ替わり、クリオとワイルダーが進みでて墓標につぶやいた。

「トキーエ、見てくれ。こんなに立派なレリーフが届いたよ・・・シューデリ氏からの贈り物だ、受け取ってくれるよな。」

「衛兵隊長や他の兵士たちからも、花束を贈らせてもらっよ。」

その二人の後に、フェローが墓標の前に立った。

「・・・トキーエ・・・」

手には、緑色の瓶。黒いリボンが巻かれてある。

「・・・早いものだな、もう一年だ。おまえを思うと俺たちの時間は、堪え難いほど長く感じる・・・俺より年下のくせに逝っちまって・・・よほど神様に気に入られちゃったんだな。」

「天国でも戦争をしてるのさ、あいつがいなきゃ太刀打ちできないような、難敵とな。」

ダイロンが、墓標の前にしゃがんで言った。

「あちこち引つ張りだこで羨ましいこった・・・でも、まさか天国からお呼びがかかるとは思わなかったよトキーエ。あの日から俺は、神様を祈りたくなかったぜ。」

手にしていたお菓子の包みを、そつと墓標に乗せるダイロン。

「孤児院の子たちが作ってくれたんだ、食いな。」

「フォーディエ様、孤児院の方に行かれていとお聞きしたのは、本当だったんですね。」

クリオがつぶやくと、ダイロンはうなずいて微笑んだ。

「ああ・・・俺の話すトキーエの『闘神伝記』を聞いて、闘いの神様のためにって、わざわざ子供たちが・・・な。」

「闘神伝記・・・」

「あいつの短すぎる一生は、十分伝説になる。俺はそれを子供たちに語り継ぎ、せめて人々の心の中で、永遠の命を持ってもらおうと思ったんだ。あいつはもう、孤児院では英雄さ。事実、奴は素晴らしい英雄だがね……」

「おまえらしいなダイロン。いつかその話を、宮廷騎士たちにしてやってくれないか。……トキーエを知らない世代が入った時にも……」

「ああ……」

気のない返事だった。

ダイロンが戦闘士訓練場総監督長を辞任し、宮廷から離れたのは、トキーエを思い出させるすべてから離れるためであった。オーガスはそれを知りながら、そうつぶやいてみたのだ。一年経てば、ダイロンの心もほぐれているだろうと思つてのことだが、ダイロンの気持ちは、その返事ですべて理解できたような気がするオーガスだった。

クリオが言う。

「……ゼラン軍との戦に明け暮れる日々が続くよトキーエ……俺たちの無事を、空から祈っていてくれ。」

「また北へ向かつての進軍だからな。もし余裕があれば、バートラスタに行つて、シューデリ氏にご挨拶してくるつもりだ。ハトリツク氏の墓石にも、おまえの代わりに挨拶に寄ろうと思つてる。」

「今回は、俺も友軍として参加するよ。おまえの生まれたナロフの

代表だからな、胸を張って闘ってくる。見てくれよトキーエ。」

フェローは自分の盾を見つめる。

トキーエがサンテルマイン衛兵隊に入る前、友情の証しにとフェローと交換した、鋼のプレート。

今もフェローを守る盾に、そのプレートが輝いていた。

「・・・おまえがいなくなっても、人々の心は変わらない。おまえを懐い続ける我等もまた、この気持ちのままで・・・変わることはあるまい。我等はおまえの分も生き続け、いつかおまえの前で、おまえの知らない戦話を、おもしろおかしく話してやるさ。それまで・・・」

ダイロンは、笑いながらそつと、うつむいた。

トキーエ「ギアムデン、享年二十八才。

早過ぎたその死を悼む者たちが捧げる花で、彼の墓標はいつも色褪せることがなかった。闘神の伝説は彼に永遠の命を授け、幾多の剣士たちのあこがれとして語り継がれるに違いない。

闘神トキーエの伝説は、永遠に・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4221a/>

闘神伝記

2010年10月9日21時12分発行